

東名掛川I・C周辺土地区画整理事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ

2003

掛川市教育委員会

例 言

1. 本書は、静岡県掛川市杉谷、上張地内における東名掛川I・C周辺土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
2. 調査は、東名掛川I・C周辺土地区画整理組合の委託により掛川市教育委員会が実施した。発掘調査に係る費用は、東名掛川I・C周辺土地区画整理組合が負担した。
3. 発掘調査に係る期間は、以下の通りである。
発掘調査 1995年4月～2000年9月(確認調査実施25地点のうち11地点について本調査実施)
整理作業 2001年4月～2003年3月(報告書I・IIを刊行)
4. 本報告書は、平成11年度に行った6地点の栗下古墳、平成8・12年度に行った14地点の京徳横穴群、平成9年度に行った18～22地点の茶屋辻古墳と23地点の茶屋辻横穴群、平成7年度に行った27地点の矢崎横穴D群の調査について報告する。
なお、平成7年度に行った26地点の杉谷城と、平成11年度に行った11地点の茶屋辻遺跡の調査については報告書Iに所収している。
5. 調査実施にあたって、東名掛川I・C周辺土地区画整理組合を始め、地元の方々から多大なご協力を得た。
6. 現地調査及び整理調査において、次の方々から多大なご教示を受けている。
穴沢味光 小谷地肇 川江秀孝 鈴木敏則 鈴木一有 松井一明 白澤 崇
7. 現地調査は、掛川市教育委員会(当時)の井村広巳が行い、本書の作成については、掛川市教育委員会文化課大熊茂広、前田庄一が行った。また、金属器の実測・トレースは鈴木敏則氏(浜松市博物館)にお願いし、本書作成において井村広巳、木村弘之氏(磐田市教育委員会)の協力を得た。
8. 調査にかかわる諸記録および出土遺物は、掛川市教育委員会が保管している。

凡 例

1. 挿図中の方位は、真北を示す。
2. 挿図中の標高は、海拔を示す。
3. 遺構の略号は以下のようにした。
SF:土塚

目次

例言 凡例

第1章	調査経過	
	第1節	調査の経過..... 1
	第2節	調査の方法..... 2
第2章	地理的・歴史的環境	
	第1節	地理的環境..... 3
	第2節	歴史的環境..... 3
第3章	栗下古墳	
	第1節	遺構の概要..... 4
	第2節	遺物の概要..... 4
第4章	京徳横穴群	
	第1節	遺構の概要..... 5
	第2節	遺物の概要..... 7
第5章	茶屋辻古墳群	
	第1節	遺構の概要..... 8
第6章	茶屋辻横穴群	
	第1節	遺構の概要..... 9
	第2節	遺物の概要..... 12
第7章	矢崎横穴群D群	
	第1節	遺構の概要..... 16
	第2節	遺物の概要..... 16
第8章	まとめ 17

実測図版目次

第1図	周辺遺跡分布図	第10図	京徳横穴群A群1号墓実測図
第2図	調査地点位置図	第11図	京徳横穴群B群1号墓実測図
第3図	栗下古墳全体図	第12図	京徳横穴群B群2～4号墓墓前城実測図
第4図	栗下古墳SF01実測図(1)	第13図	京徳横穴群B群2号墓実測図
第5図	栗下古墳SF01実測図(2)	第14図	京徳横穴群B群3号墓実測図(1)
第6図	栗下古墳SF02実測図(1)	第15図	京徳横穴群B群3号墓実測図(2)
第7図	栗下古墳SF02実測図(2)	第16図	京徳横穴群B群4号墓実測図
第8図	京徳横穴群配置図	第17図	京徳横穴群B群5～8号墓墓前城実測図
第9図	京徳横穴群A群1号墓墓前城実測図	第18図	京徳横穴群B群5・8号墓実測図

- 第19图 京德横穴群B群6号墓实测图
第20图 京德横穴群B群7号墓实测图
第21图 茶屋辻古墳群1号墳全体图
第22图 茶屋辻古墳群2号墳全体图
第23图 茶屋辻古墳群1-2号墳主体部实测图
第24图 茶屋辻横穴群配置图
第25图 茶屋辻横穴群A群1号墓墓前域实测图
第26图 茶屋辻横穴群A群1号墓实测图
第27图 茶屋辻横穴群A群2-3-4号墓
墓前域遺物出土状態实测图
第28图 茶屋辻横穴群A群2-3-4号墓
墓前域实测图
第29图 茶屋辻横穴群A群2号墓实测图
第30图 茶屋辻横穴群A群3号墓实测图
第31图 茶屋辻横穴群A群4号墓实测图
第32图 茶屋辻横穴群A群5号墓实测图
第33图 茶屋辻横穴群A群6-7-8号墓
墓前域遺物出土状態实测图
第34图 茶屋辻横穴群A群6-7-8号墓
墓前域实测图
第35图 茶屋辻横穴群A群6号墓实测图
第36图 茶屋辻横穴群A群7号墓实测图
第37图 茶屋辻横穴群A群8号墓实测图
第38图 茶屋辻横穴群A群9号墓实测图
第39图 茶屋辻横穴群A群10号墓实测图
第40图 茶屋辻横穴群A群11号墓实测图
第41图 茶屋辻横穴群A群12号墓实测图
第42图 茶屋辻横穴群A群13号墓实测图(1)
第43图 茶屋辻横穴群A群13号墓实测图(2)
第44图 茶屋辻横穴群A群14号墓实测图
第45图 茶屋辻横穴群A群15号墓实测图(1)
第46图 茶屋辻横穴群A群15号墓实测图(2)
第47图 茶屋辻横穴群A群16号墓实测图(1)
第48图 茶屋辻横穴群A群16号墓实测图(2)
第49图 茶屋辻横穴群A群17号墓实测图(1)
第50图 茶屋辻横穴群A群17号墓实测图(2)
第51图 茶屋辻横穴群B群1号墓实测图(1)
第52图 茶屋辻横穴群B群1号墓实测图(2)
第53图 矢崎横穴群D群1-2-3号墓墓前域实测图
第54图 矢崎横穴群D群1号墓实测图
第55图 矢崎横穴群D群2号墓实测图
第56图 矢崎横穴群D群3号墓实测图
第57图 栗下古墳出土遺物实测图
第58图 京德横穴群出土遺物实测图(1)
第59图 京德横穴群出土遺物实测图(2)
第60图 京德横穴群出土遺物实测图(3)
第61图 京德横穴群出土遺物实测图(4)
第62图 茶屋辻横穴群出土遺物实测图(1)
第63图 茶屋辻横穴群出土遺物实测图(2)
第64图 茶屋辻横穴群出土遺物实测图(3)
第65图 茶屋辻横穴群出土遺物实测图(4)
第66图 茶屋辻横穴群出土遺物实测图(5)
第67图 茶屋辻横穴群出土遺物实测图(6)
第68图 茶屋辻横穴群出土遺物实测图(7)
第69图 茶屋辻横穴群出土遺物实测图(8)
第70图 茶屋辻横穴群出土遺物实测图(9)
第71图 茶屋辻横穴群出土遺物实测图(10)
第72图 茶屋辻横穴群出土遺物实测图(11)
第73图 茶屋辻横穴群出土遺物实测图(12)
第74图 茶屋辻横穴群出土遺物实测图(13)
第75图 茶屋辻横穴群出土遺物实测图(14)
第76图 茶屋辻横穴群出土遺物实测图(15)
第77图 茶屋辻横穴群出土遺物实测图(16)
第78图 茶屋辻横穴群出土遺物实测图(17)
第79图 茶屋辻横穴群出土遺物实测图(18)
第80图 茶屋辻横穴群出土遺物实测图(19)
第81图 茶屋辻横穴群出土遺物实测图(20)
第82图 茶屋辻横穴群出土遺物实测图(21)
第83图 矢崎横穴群D群出土遺物实测图(1)
第84图 矢崎横穴群D群出土遺物实测图(2)

写真図版目次

- | | | | |
|-------|---|-------|--|
| 図版 1 | 栗下古墳全景(垂直)
栗下古墳出土玉類 | 図版 19 | A群 2号墓完掘状態(墓前域から)
A群 3号墓墓前域遺物出土状態(東から)
A群 3号墓完掘状態(墓前域から) |
| 図版 2 | 京徳横穴群全景(東から)
茶屋辻古墳群全景(垂直) | 図版 20 | A群 4号墓閉塞石、墓前域遺物出土状態(東から)
A群 4号墓玄室板石等検出状態(羨道から)
A群 4号墓完掘状態(墓前域から) |
| 図版 3 | 茶屋辻横穴群 A群全景(東から)
茶屋辻横穴群 B群全景(西から) | 図版 21 | A群 4号墓玄室完掘状態(羨道から)
A群 4号墓奥壁の状態
A群 5号墓閉塞石検出状態(東から) |
| 図版 4 | 茶屋辻横穴群 A群 7号墓出土主頭柄頭、紐
茶屋辻横穴群 A群 13号墓出土土師器 | 図版 22 | A群 5号墓玄室完掘状態(北から)
A群 5号墓玄室遺物出土状態(東から)
A群 5号墓玄室完掘状態(羨道から) |
| 図版 5 | 栗下古墳全景(東から)
SF01完掘状態(北から) | 図版 23 | A群 6号墓閉塞石検出状態(墓前域から)
A群 6号墓完掘状態(墓前域から)
A群 6号墓玄室完掘状態(羨道から) |
| 図版 6 | SF01(第1主体部)玉類出土状態(東から)
SF01(第2主体部)鉄剣出土状態(北から)
SF02完掘状態(北から) | 図版 24 | A群 6号墓奥壁天井周辺の状態
A群 7号墓閉塞石検出状態(墓前域から)
A群 7号墓玄室遺物出土状態(羨道から) |
| 図版 7 | 京徳横穴群 A群 1号墓全景(南東から)
A群 1号墓完掘状態(北東から) | 図版 25 | A群 7号墓完掘状態(墓前域から)
A群 7号墓玄室完掘状態(羨道から)
A群 7号墓玄室北側壁面の工具痕 |
| 図版 8 | B群 2~4号墓墓前域遺物出土状態(東から)
B群 2~4号墓墓前域完掘状態(東から) | 図版 26 | A群 8号墓閉塞石検出状態(墓前域から)
A群 8号墓完掘状態(墓前域から)
A群 9号墓閉塞石検出状態(墓道から) |
| 図版 9 | B群 5-6号墓完掘状態(東から)
B群 6~8号墓完掘状態(東から) | 図版 27 | A群 9号墓玄室遺物出土状態(墓前域から)
A群 9号墓遺物出土状態(墓道から)
A群 9号墓完掘状態(墓道から) |
| 図版 10 | B群 1号墓完掘状態(墓前域から)
B群 2号墓完掘状態(墓前域から)
B群 3号墓遺物出土状態(羨道から) | 図版 28 | A群 9号墓全景(東から)
A群 10号墓閉塞石検出状態(墓道から)
A群 10号墓完掘状態(墓道から) |
| 図版 11 | B群 3号墓玄室内の状態(墓前域から)
B群 4号墓完掘状態(墓前域から)
B群 5号墓完掘状態(墓前域から) | 図版 29 | A群 10号墓玄室完掘状態(羨道から)
A群 11号墓閉塞石検出状態(墓道から)
A群 11号墓完掘状態(墓道から) |
| 図版 12 | B群 6号墓完掘状態(墓前域から)
B群 7号墓完掘状態(墓前域から)
B群 8号墓完掘状態(墓前域から) | 図版 30 | A群 11号墓棺座・棺台検出状態(東から)
A群 11号墓棺台の状態(東から)
A群 11号墓玄室完掘状態(玄門から) |
| 図版 13 | 茶屋辻古墳群 1号墳全景(南から)
2号墳全景(北から) | 図版 31 | A群 12号墓閉塞石検出状態(東から)
A群 12号墓完掘状態(東から)
A群 12号墓玄室遺物出土状態(羨道から) |
| 図版 14 | 1号墳主体部完掘状態(南から)
1号墳南側で検出した土坑(南から)
2号墳主体部完掘状態(南から) | 図版 32 | A群 13号墓玄室遺物出土状態(墓前域から)
A群 13号墓閉塞石検出状態(東から) |
| 図版 15 | 茶屋辻横穴群 A群全景(北東から)
A群 2~4号墓墓前域遺物出土状態(東から) | | |
| 図版 16 | A群 5~14号墓全景(北東から)
A群 6~8号墓墓前域遺物出土状態(東から) | | |
| 図版 17 | A群 1号墓閉塞石、墓前域遺物出土状態(北から)
A群 1号墓墓前域遺物出土状態(北から)
A群 1号墓墓前域遺物出土状態(東から) | | |
| 図版 18 | A群 1号墓閉塞石、玄室遺物出土状態(北から)
A群 1号墓閉塞石、玄室遺物出土状態(墓前域から)
A群 1号墓完掘状態(墓前域から) | | |

図版 33	A 群 13 号墓玄室遺物出土状態(北西から)	図版 48	2 号墓閉塞石検出状態(南上方から)
	A 群 13 号墓玄室遺物出土状態(北東から)		2 号墓遺物出土状態(玄室から羨道)
	A 群 13 号墓玄室遺物出土状態(北から)		3 号墓遺物出土状態(東から)
図版 34	A 群 13 号墓玄室遺物出土状態(南から)	図版 49	3 号墓閉塞石検出状態(南上方から)
	A 群 13 号墓玄室遺物出土状態(南から)		3 号墓完掘状態(墓前域から)
	A 群 13 号墓玄室遺物出土状態(東から)		3 号墓完掘状態(玄室内)
図版 35	A 群 13 号墓玄室遺物出土状態(南東から)	図版 50	栗下古墳、京徳横穴群出土遺物
	A 群 13 号墓完掘状態(墓道から)	図版 51	京徳横穴群出土遺物
	A 群 13 号墓奥壁鉄線検出状態	図版 52	京徳横穴群出土遺物
図版 36	A 群 14 号墓閉塞石検出状態(東から)	図版 53	京徳横穴群出土遺物
	A 群 14 号墓後門部分の溝の状態(東から)	図版 54	京徳横穴群出土遺物
	A 群 14 号墓完掘状態(東から)	図版 55	茶屋辻横穴群出土遺物
図版 37	A 群 15 号墓閉塞石検出状態(墓道から)	図版 56	茶屋辻横穴群出土遺物
	A 群 15 号墓玄室遺物出土状態(羨道から)	図版 57	茶屋辻横穴群出土遺物
	A 群 15 号墓完掘状態(墓道から)	図版 58	茶屋辻横穴群出土遺物
図版 38	A 群 16 号墓閉塞石検出状態(墓道から)	図版 59	茶屋辻横穴群出土遺物
	A 群 16 号墓閉塞石検出状態(東から)	図版 60	茶屋辻横穴群出土遺物
	A 群 16 号墓全景(南東から)	図版 61	茶屋辻横穴群出土遺物
図版 39	A 群 16 号墓玄室遺物出土状態(北西から)	図版 62	茶屋辻横穴群出土遺物
	A 群 16 号墓玄室遺物出土状態(南西から)	図版 63	茶屋辻横穴群出土遺物
	A 群 16 号墓玄室完掘状態(南から)	図版 64	茶屋辻横穴群出土遺物
図版 40	A 群 17 号墓閉塞石検出状態(東から)	図版 65	茶屋辻横穴群出土遺物
	A 群 17 号墓閉塞石根石の状態(東から)	図版 66	茶屋辻横穴群出土遺物
	A 群 17 号墓完掘状態(墓道から)	図版 67	茶屋辻横穴群出土遺物
図版 41	A 群 17 号墓遺物出土状態(南東から)	図版 68	茶屋辻横穴群出土遺物
	A 群 17 号墓遺物出土状態(南から)	図版 69	茶屋辻横穴群出土遺物
	B 群 1 号墓前室遺物出土状態(南西から)	図版 70	茶屋辻横穴群出土遺物
図版 42	B 群 1 号墓閉塞石検出状態(墓道から)	図版 71	茶屋辻横穴群出土遺物
	B 群 1 号墓完掘状態(墓道から)	図版 72	茶屋辻横穴群出土遺物
	B 群 1 号墓玄室完掘状態(墓道から)	図版 73	茶屋辻横穴群出土遺物
図版 43	B 群 1 号墓奥室入口(前室から)	図版 74	茶屋辻横穴群出土遺物
	B 群 1 号墓奥室完掘状態(前室から)	図版 75	茶屋辻横穴群出土遺物
	B 群 1 号墓奥室壁面の工具痕	図版 76	茶屋辻横穴群出土遺物
図版 44	矢崎横穴群 D 群 1～3 号墓完掘状態(南から)	図版 77	茶屋辻横穴群出土遺物
	1 号墓閉塞石検出状態(墓前域から)	図版 78	茶屋辻横穴群出土遺物
図版 45	1 号墓閉塞石検出状態(東から)	図版 79	茶屋辻横穴群出土遺物
	1 号墓閉塞石検出状態(玄室から)	図版 80	茶屋辻横穴群出土遺物
	1 号墓閉塞石根石の状態(南上方から)	図版 81	茶屋辻横穴群出土遺物
図版 46	1 号墓完掘状態(墓前域から)	図版 82	茶屋辻横穴群出土遺物
	2 号墓閉塞石検出状態(墓前域から)	図版 83	矢崎横穴群 D 群出土遺物
	2 号墓完掘状態(墓前域から)	図版 84	矢崎横穴群 D 群出土遺物
図版 47	2 号墓玄室遺物出土状態(南から)	図版 85	矢崎横穴群 D 群出土遺物
	2 号墓玄室遺物出土状態(西から)		

第1章 調査経過

本報告書は続編であるため、調査に至る経緯については既報告の『東名掛川I・C周辺土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書I』を参照していただき、ここでは、調査の経過及び調査の方法について触れる。

第1節 調査の経過

平成6年12月12日、掛川市教育委員会は東名掛川I・C周辺土地区画整理組合より確認調査の依頼を受け、平成7年4月より発掘調査を開始することとなった。以下各地点の調査期間とその内容を下記の表に記す。

地点	遺跡名	所在地	調査期間	内容
1		掛川市上張798外	95.4.18	1m×30mのトレンチ掘削遺構・遺物なし
2		掛川市上張796-1外	95.4.17～4.20	1m×22mのトレンチ掘削遺構・遺物なし
3		掛川市上張789外	95.4.21～4.30	1m×24m、1m×10mのトレンチ掘削遺構・遺物なし
4		掛川市上張784外	95.4.21～4.30	108㎡試掘遺構・遺物なし
5		掛川市上張789外	95.4.20	1m×12m、1m×20mのトレンチ掘削遺構・遺物なし
6	栗下古墳	掛川市上張668外	99.11.1～00.1.27	木棺直葬墳を確認本調査実施
7		掛川市杉谷683-1外	96.4.22～4.23	1m×7m、1m×14mのトレンチ掘削遺構・遺物なし
8		掛川市杉谷683-1外	96.4.22～4.23	1m×6m、1m×13mのトレンチ掘削遺構・遺物なし
9		掛川市杉谷676外	96.11.15～11.19	1m×26mのトレンチ掘削遺構・遺物なし
10		掛川市杉谷670外	96.11.15～11.19	1m×10mのトレンチ掘削遺構・遺物なし
11	茶屋辻遺跡	掛川市杉谷671-1外	99.11.18～12.1	時期不明の遺構確認
12		掛川市杉谷671-1外	96.11.15～11.19	1m×14mのトレンチ掘削遺構・遺物なし
13		掛川市上張77-1外	96.11.19～11.22 00.7.13～7.18	1m×30mのトレンチ掘削遺構・遺物なし 1m×17m、1m×55mのトレンチ掘削遺構・遺物なし
14	京徳横穴群	掛川市上張76外	96.12.19～97.1.20 00.7.13～9.18	1基の横穴を調査 8基の横穴を調査
15		掛川市上張69-1外		緑地として保存されるため未調査
16		掛川市上張70-2外		緑地として保存されるため未調査
17		掛川市上張66-1外	96.11.25～12.3	1m×12mのトレンチ掘削遺構・遺物なし
18	茶屋辻古墳群	掛川市杉谷612外	97.12.5～98.4.29	2基の木棺直葬墳を調査
19				
20				
21				
22				
23	茶屋辻横穴群	掛川市杉谷612外	97.12.5～98.4	18基の横穴を調査
24		掛川市杉谷573外	96.4.23～4.26	1m×30m、1m×20mのトレンチ掘削遺構・遺物なし
25		掛川市杉谷266-4	96.4.23～4.26	1m×15m、1m×7mのトレンチ掘削遺構・遺物なし
26	杉谷城	掛川市杉谷552-2外	95.4.26～96.3.31	掛川城攻めの際に築かれた砦を調査
27	矢崎横穴D群		95.11.13～96.1.24	3基の横穴を調査

第2節 調査の方法

栗下古墳・茶屋辻古墳

調査範囲の立木を伐採したのち、尾根上に幅1mのトレンチを設定し、古墳の範囲を確認した。そして尾根上の表土をすべて人手によって剥ぎ、主体部の検出、精査、実測、写真撮影を行った。主体部は、1/10で、古墳全体図は1/20の縮尺で人手により記録した。写真撮影には、6×7判(モノクロ)1台と35mm判(モノクロ、リバーサル、カラー)3台を使用した。調査区遠景、全景の垂直写真撮影等の撮影は業者に委託し、ラジコンヘリコプターを使用し行った。基準点測量は業者に委託した。

茶屋辻横穴群・京徳横穴群

調査範囲の立木を伐採したのち、重機(バックホー)を使用して表土を掘削した。そして人手により横穴墓の検出を行った。確認した横穴墓は、鍬や鋤鎌を用いて掘削し、細部を移植ゴテで精査した。遺物出土状態図、閉塞石平面図は1/10の縮尺で、横穴墓平面図は1/20の縮尺で記録した。写真撮影には、6×7判(モノクロ)1台と35mm判(モノクロ、リバーサル、カラー)3台を使用した。調査区遠景、全景の垂直写真撮影等の撮影は業者に委託し、ラジコンヘリコプターを用いて行った。基準点測量は業者に委託した。

また、現地説明会を行い、地域住民の埋蔵文化財への理解を深めるように努めた。

矢崎横穴群D群

当初、横穴群が存在すると確認されていなかったが、区画整理地内で業者による伐採作業を行っていた際に発見された。直ちに市教育委員会に届け出があり、区画整理課と協議の結果、現地の作業に合わせて調査を進めていくことになった。発見当初は、1基のみであったが周辺にも横穴墓が存在することが推定されたため、重機(バックホー)を用いて周辺の表土を掘削した。そして人手により横穴墓の検出を行った。確認した3基の横穴墓は、鍬や鋤鎌を用いて掘削し、細部を移植ゴテで精査した。遺物出土状態図、閉塞石平面図は1/10の縮尺で、横穴墓平面図は1/20の縮尺で記録した。写真撮影には、6×7判(モノクロ)1台と35mm判(モノクロ、リバーサル、カラー)3台を使用した。また、必要に応じてローリングタワーを使用して撮影を行った。基準点測量は業者に委託した。

第2章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

東名掛川I-C周辺土地地区画整理事業が実施された掛川市杉谷・上張地区は、JR掛川駅から南東へ約1kmの地域に位置する。平成5年に東名掛川インターチェンジが建設されてから、その景観は大きく変化している。

掛川市は南東を粟ヶ岳を中心とする日坂山地、北を八高山山地、南を小笠山、掛川丘陵によって囲まれている。杉谷・上張地区はこの掛川丘陵の北端にあたる。地層は、新第3紀鮮新世に堆積した掛川層群から成り立っている。掛川層群は、東は相良町萩間南方から西は天竜川左岸までの広い地域にわたって分布しているが、掛川付近を境に東と西では堆積状況が異なっている。当地区が含まれる東側は、砂岩とシルト岩が規則的に堆積する堀の内砂泥互層の上に土方泥層が堆積している。岩質はやわらかく侵食されやすいため開析がすすみ、侵食谷が樹枝状に発達し、起伏のある地形を作り出している。

調査地周辺の遺跡の立地は開析により形成された丘陵尾根上に古墳が存在し、丘陵斜面に横穴が存在している。

第2節 歴史的環境(第1図)

この地域では、弥生時代以前の遺跡はこれまで確認されていない。「東名掛川I-C周辺土地地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ」報告した杉谷城の調査で頁岩製の石鏃が1点検出されている。古墳時代になると前期の土器を伴う遺構が、今回の調査でわずかに確認された。

依然、生活遺構はほとんど認められないが、古墳時代後期の横穴築造に先立ち、古墳時代中期の木棺直葬墳が尾根上に数基点在するようになる。その後、数多くの横穴が丘陵斜面に造られている。恐らく、墓を造った集団は、掛川丘陵の北側に広がる逆川左岸の沖積地に居住していたと推定される。

掛川市は県内でも横穴が数多く分布する地域である。そのなかで杉谷・上張地区は、数基から十数基で構成される中小規模の横穴群が数多く分布する地域として知られてきた(第1図参照)。東名高速道路造成の際に矢崎横穴群等横穴が確認されており、東名掛川インターチェンジの造成工事に先立ち行われた発掘調査においても、矢崎横穴群A群3基、同B群5基、同C群1基、鶴本横穴群3基の計12基の横穴が確認されている。今回の東名掛川I-C周辺土地地区画整理地内の発掘調査においても、本報告に掲載した茶屋辻横穴群18基、京徳横穴群9基、矢崎横穴群D群3基、計30基の横穴が調査された。

第3章 栗下古墳

栗下古墳は確認調査で発見された古墳である。東西に伸びる丘陵の西端に造られており、墳頂部から隣接した主体部2基を検出している。また、尾根を断ち切る溝をはさんでSF02が存在する。

第1節 遺構の概要(第3～7図、図版1、5、6)

墳丘は丘陵尾根を削り出し、一部を盛り土で整え成形していると考えられる。墳丘の規模は、20m×18m、高さ2.5mを測る。東西方向にやや長い、円墳と考えられる。葺き石、埴輪はない。

墳頂部から主体部SF01を検出した。SF01の規模は長さ8m、幅2.8mである。SF01は第1主体部と第2主体部に分けられる。第1主体部からは鉄剣1が、第2主体部からは勾玉、管玉が出土している。また、墳丘頂部を覆う表土層から、鉄鏝1と鉄鑿1が出土している。これらは、棺外埋葬の可能性が考えられる。副葬品から栗下古墳の築造時期は5世紀中葉～後葉と考えられる。

栗下古墳の東側、尾根を断ち切る溝を挟んだ地点に、SF02を検出している。長さ2.75m、幅1m、深さ約0.3mを測る。舟形の土壇と、長さ1.3m、幅0.8m、深さ約0.4mの不整形の土壇である。SF02からは、土師器小形壺片2と土師器高坏片1が出土している。これら土師器は古墳時代前期に位置付けることができると考えられる。そのため、SF02は栗下古墳に先行して作られた土壇と考えられる。

また、尾根を断ち切る溝については、区画の意識で作られたことが考えられるが、出土遺物もなく、栗下古墳に伴うのか、SF02に伴うのか判断する材料に乏しい。

第2節 遺物の概要(第57図、図版1、50)

栗下古墳に関わる遺物として鉄器3、玉類16が出土している。また、SF02から、土師器3が出土している。このほか、主体部北側で検出された近世から近代の火葬墓群に伴うと考えられる、かわらけ、陶磁器があるが、紙面の制約上割愛した。

土器(第57図、図版50)

1は小形壺である。手づくねによる製作と考えられ、内面には指頭痕を残す。口縁部内外面には横方向の調整痕がみられる。2は口縁部を欠失した小形壺である。内外面の底部付近には指頭痕を残す。内面には横方向の調整痕がみられる。3は脚部を欠失した高坏の坏部である。坏部の下底面を乳頭状に絞り、筒形の脚を接合させたものと考えられる。

鉄器(第57図、図版50)

4は第2主体部から出土した鉄剣である。全長37.2cmを測る。木質が残存している。5は鍔身部が柳葉形を呈する鉄鏝である。6は両肩で無袋の鑿である。

玉類(第57図、図版1)

7・8は翡翠製勾玉、9～18、20～22は緑色凝灰岩製管玉である。19は碧玉製管玉である。玉類は全て第1主体部から出土している。

第4章 京徳横穴群

京徳横穴群は、京徳池の西岸の丘陵斜面に存在する。京徳池は、江戸時代以前の築造とされる、ため池である。横穴群と池の間は茶畑となっていた。その茶畑の開墾のため、横穴墓の存在する丘陵は削平されている。調査は平成8年度に単独で存在するA群1基を調査し、平成12年度にB群8基を調査した(第8図、図版2)。なお、各々の横穴の寸法等は、数値表を参照されたい。B群は、1号墓が単独で存在し、2～4号墓と5～8号墓がそれぞれ墓前域を共有している。

第1節 遺構の概要

A群1号墓(第9・10図、図版7)

今回調査地の一番南に単独で存在する。南東方向に開口している。玄室の形状は、平面形は台形、断面形は尖頭形である。玄室と羨道の境目は不明瞭である。最大幅4.5m、奥行き3.5mの墓前域が存在する。墓前域から崩れた閉塞石と思われる円礫が出土している。遺物は、須恵器坏、フラスコ瓶が残されていた。築造時期は、出土遺物から6世紀末から7世紀初頭と推定される。

B群1号墓(第11図、図版10)

A群1号墓から北へ約30m離れて存在する。東南東方向に開口している。調査時には既に開口しており、閉塞石は存在していなかった。埋没土は5～10cm程であった。玄室の形状は、平面形は方形、断面形はドーム形である。墓前域は存在していない。奥壁も側壁も概ね垂直に立ち上がる。玄室天井は幅約1.5m崩落している。玄室奥壁から北側壁、羨道にかけて幅約10cm、深さ2cmの溝がある。そして、それに一部接続して、幅約10cm、深さ3～5cmの溝が縦横に刻まれている。排水溝と考えられるが、後世に掘られたものかもしれない。また、羨道部分壁沿いに径25～35cm、深さ約30cmのピットが2つある。それぞれ腐朽した杭が立っていた。これも、後世に掘られたものと考えられる。

遺物は鉄製の破片数点が出土したのみである。

B群2号墓(第12・13図、図版8・10)

B群1号墓から北へ約20m離れて存在する。3号墓、4号墓と隣接し、墓前域を共有している。東方向に開口している。調査時に開口しており、閉塞石は存在していなかった。玄室の形状は平面形は台形、羨道との境が不明瞭である。断面形は天井部分が大きく崩落しており不明であるが、ドーム形と考えられる。奥壁は幅1.8m、奥行き0.5m、高さ1mの範囲で掘り込まれているが、後世の攪乱である。玄室床面には最大15cmの段差が見られる。床面にあたる層位が砂質で軟らかいため、掘れてしまったとも考えられるので、これが棺座としてしつらえられたものなのか不明である。また、玄室内には径50cm、深さ15cmのピットが存在するが、これも後世の攪乱と考えられる。

B群3号墓(第12・14・15図、図版8・10・11)

2号墓の北、約3mに隣接し存在する。玄室の平面径は方形であるが、袖の屈曲が角度が浅いため、台形に近い意識があると考えられる。断面形は尖頭形である。玄室床面は羨道床面から10cm高い。羨道部分には閉塞石と考えられる15～35cm程の石と、須恵器が出土している。また、玄室奥壁沿いに4つ、側壁沿い

に1つ、20cm以下の石が床面から出土している。玄室内には径約60cmのピット1が検出された。

2・4号墓と共有する墓前域の3号墓の前面には、拳大から人頭大の石が土器と共に散在している。後世に攪乱されたものと考えられる。

攪乱されているが土器、鉄製品、装身具といった遺物は比較的残されていた。築造時期は、6世紀末から7世紀初頭と推定される。

B群4号墓(第12・16図、図版8・11)

3号墓の北、約3mに隣接する。大きく壊れ、玄室の奥から約2mが残存しているのみである。戦時中に防空壕として利用したために攪乱されている。北側壁面はその時に拡張されているようで、破線で示したラインが本来の下場と推定される。壁と床も著しく損傷しているが、玄室は平面形が方形か台形で、断面形は側壁の立ち上がる角度から尖頭形の可能性がある。奥壁沿いには方形のピットが2つ掘られている。50cm×40cm、深さ18cmと、90cm×50cm、深さ53cmをそれぞれ測るが、これらは最近まで使われていたようである。この横穴からは、遺物は出土していない。

B群5号墓(第17・18図、図版9・11)

4号墓から北に約30m離れて存在する。5～8号墓は墓前域を共有していると考えているが、どの横穴も羨道及び玄室が壊れていることから、その形状は大きく異なるであろう。

この横穴も大きく壊れており、玄室奥の部分を1m足らず検出したのみである。壁面も大きく壊れている。玄室の形状は平面形は不明であるが、断面形はドーム形と考えられる。

この横穴からは、遺物は出土していない。

B群6号墓(第17・19図、図版9・12)

5号墓の北、約2mに隣接する。羨道及び玄室は壊れており、玄室奥壁から約2.5mが残存している。天井は奥から約2m残存する。しかし、天井、壁面とも、現代の二次的な掘削により著しく攪乱されている。そのため、かろうじて残っている部分からの推定であるが、玄室の形状は、羨道との境目が明瞭ではない台形の平面形で、断面形は尖頭形であると考えられる。玄室北寄りの70cm×60cmの方形で、深さ28cmのピットも攪乱である。

B群7号墓(第17・20図、図版9・12)

6号墓の北、約2mに隣接する。羨道及び玄室入口は壊れており、玄室奥壁から約3mが残存している。天井は奥から約2m残存している。6号墓に通じる穴が南側側壁に掘られているなど、この横穴も二次的な掘削を受けている。また、玄室床面には径70cm、深さ15cmのピットや、約25cmの段差があるが、攪乱された結果である可能性が高い。玄室の平面形は台形か方形と推定される。断面形は天井のかろうじて崩落を免れた部分から、尖頭形と考えられる。

遺物は、図示できなかったが、鉄鎌茎片の可能性があり、長さ約2cmの鉄片2が出土している。

B群8号墓(第17・18図、図版9・12)

7号墓の北側に接して存在する。羨道及び玄室は大きく壊れ、玄室奥から約1mが残存する。天井、側壁も大きく壊れている。玄室の平面形は不明だが、断面形はドーム形と推定される。

遺物は出土していない。

第2節 遺物の概要

今回区画整理事業で調査したA群及びB群の横穴は、後世の攪乱を受けていたため、遺物の出土数も少なかった。当該横穴群から出土した土器は周辺域や表採品を合わせて総計59点、鉄器16点、玉類17点を計測することが可能であった。

土器(第58～61図、図版51～53)

1から7は、A群1号墓から出土した須恵器である。1・3は坏蓋、2・4・5は坏身である。いずれも口径8.5～9.9cm、最大径は11cm内におさまる大きさである。6は高坏である。坏部の口唇部は丸みを持ち、大きく外反する。脚部内面に絞り痕を残す。7はフラスコ瓶である。体部側方の疑口縁を粘土板により閉じる製作方法をとる。体部上方に頸部を接合させ、直立させながら口縁部に至りハの字形に開く。端部は折り返す。体部上半まで自然軸がみられる。坏やフラスコ瓶から6世紀末から7世紀初頭の様相を呈している。

8～13はB群3号墓玄室内から出土した須恵器である。8は坏蓋、9・10は坏身である。11は連の肩部と思われる。12は短頸壺の破片と思われる。13は壺の肩部の破片と思われる。14～56は3号墓周辺から出土した土器である。14～20は須恵器坏蓋、21～33は同坏身である。14～18は口径9.1～10.0cm、最大径9.8～10.4cmといずれも11cm以内の大きさである。19・20は外面につまみ部分、内面に返りをもつ坏蓋である。17～23は口径8.6(推定)～10.2cm、最大径11.05cm内の坏身である。底部に外面へラ削りを施している。24～33は碗形を呈した坏身である。24～27・32・33は内湾し、28～31は外側へ開く形態をとる。

34・35は高坏の脚部の破片と思われる。36は長頸壺の胴部と思われる。37～42は埴である。37・38は外反する形態をとるが、他は内傾する。胴部と頸部の境には沈線が施している。

43～45は長頸壺の蓋である。扁平の摘みをもつ43と乳頭状の摘みをもつ44・45の2種に分かれる。

46は壺の口縁部、47は同頸部であるが、別個体と判断される。47は頸部外面に沈線2条と槲による刺突文が施されている。48は土師器の低脚盤である。49は須恵器の坏蓋である。宝珠形つまみをもつ。50・51は同坏身である。52は高坏である。53は高坏の坏部の破片と思われる。54は長頸壺である。55・56は壺の破片と思われる。

坏の形状から6世紀末～7世紀初頭、7世紀中頃、8世紀初頭の3時期が推定される。

57～59はB群2～4号墓周辺から採集された須恵器片である。57は須恵器の坏蓋、58は須恵器の壺頸部片、59は坏蓋である。

鉄器(第61図、図版54)

60～71は鉄製の頸部から基部にかけての破片である。62はB群2号墓、63はB群2・3号墓前域、他はB群3号墓の出土である。72は馬具で鍔の鉸具である。73、74は不明、75は耳環である。72～75のうち、74はB群1号墓、他はB群3号墓出土である。

玉類(第61図、図版54)

76は琥珀製の丸玉で赤褐色を呈している。77・78は水晶製の切子玉、79～83、88～92は丸玉である。84～87はガラス玉で濃紺色で両面が平らである。76はA群2号墓、他はA群3号墓出土である。

第5章 茶屋辻古墳群

次章でふれる茶屋辻横穴群の造営された丘陵尾根に存在する。当初尾根上に5基の古墳の存在を想定したが、確認調査の結果、2基を検出し、調査を実施した(図版2)。

なお、茶屋辻古墳群1号墳及び2号墳ともに、古墳に伴う遺物の出土はなかった。

第1節 遺構の概要

1号墳(第21、23図、図版13、14)

墳丘の成形は丘陵尾根を削り出していると考えられる。盛り土の存在は不明である。周溝も確認していない。規模は径8mの円墳と考えられる。

墳頂部から主体部を2基検出している。1基は長さ3.2m、幅1.45m、平面形は長方形で、深さは0.7mを測る掘り方で、もう1基は長さ3.2m、幅0.6m、深さ0.5mを測る掘り方である。2基は20～30cmの間隔でほぼ平行に存在し、小口の掘り方も揃っている。棺の痕跡等不明だが、底が平らであることから、組み合わせ式の木棺の使用が想定される。この古墳から遺物は出土していない。

2号墳(第22、23図、図版13、14)

1号墳から南東に位置する。古墳の向きは、図の上方が北方位である。墳丘は尾根を削り出して成形している。墳丘の南側は、尾根を直行する幅1.5mの溝で区画されている。規模は南北(北側墳裾から南側溝まで)20.7m、東西20.3m、高さは約1mを測る。墳頂部は平面的には南北にやや長く、その中ほどに主体部1基を検出している。平面形は方形で、長さ2.5m、幅1.3m、深さ約0.3mの掘り方である。棺の痕跡等不明であるが、1号墳と同じく組み合わせ式の木棺の使用が想定される。この古墳から、遺物は出土していない。

第6章 茶屋辻横穴群

今回の調査範囲では、丘陵東側斜面に17基、西側斜面に1基確認している(第24図、図版3・15)。茶屋辻横穴群は現在道路で分断されているが北側の丘陵の東側斜面にも横穴が存在することが周知されている。そのうち、2～4号墓、6～8号墓は墓前域を共有する。その他は単独で墓前域、墓道を持つ。築造された標高の位置を見てみると、1～4号墓と6～8号墓が近似する位置で、5号墓はそれらより約1.5m高い。9・10・12・13号墓が概ね近似する位置で、11号墓はそれらより約1.5m高い。14～17号墓は近似する位置である。

第1節 遺構の概要

A群1号墓(第25・26図、図版17・18)

今回調査地北端に存在する。東南東方向に開口する。玄室、羨道とも床面から約0.5mより上は崩落している。

玄室の平面形は方形、断面形はアーチ形と考えられる。羨道の長さは玄室長の1.5倍である。羨道には上段が崩れているが閉塞石を検出している。また、玄室入口周辺には20～30cmの礫を検出している。

単独で墓前域を持っている。幅は下場で3.3m、奥行きは下場で3mを測る。墓前域からは礫と土器が多く出土しており、攪乱されたものと思われる。墓前域から出土した土器は7世紀後半代に位置付けられる。そのため、1号墓の築造時期はその頃と推定される。

A群2号墓(第27～29図、図版15・19)

1号墓の南側に接して存在する。3・4号墓と隣接し墓前域を共有している。2号墓も羨道、玄室とも上部が崩落している。また、隣り合う1・3号墓とつながってしまっている。玄室の平面形は方形で、断面形は不明である。袖の屈曲角度はやや緩い。羨道には閉塞石が残されていた。築造時期は墓前域から出土した土器も考慮すると7世紀前半代と推定される。

A群3号墓(第27・28・30図、図版15・19)

2号墓南側に接して存在する。この横穴も天井と壁面は大きく崩落していた。玄室の平面形は台形で、断面形は不明である。玄室と羨道の境は明瞭ではない。閉塞石は残っていない。築造時期は7世紀前半代と推定される。

A群4号墓(第27・28・31図、図版15・20・21)

3号墓の南側、2mに存在する。羨道、玄室とも天井部が崩落している。玄室の形状は方形で、断面形は尖頭形である。玄室内には約10cmの段差が見られるが、意図的につけられたものか疑問である。

玄室には、1.8m×1.2mの範囲で板石を敷いている。羨道には閉塞石を検出している。また、玄室壁面には整壁と幅広の工具痕がきれいに残っていた。築造時期は7世紀前半代と推定される。

A群5号墓(第32図、図版16・21・22)

4号墓の南、3mに存在する。羨道、玄室とも床面から約1mより上の壁と天井が崩落している。墓道部分は滑落している。単独で存在している。玄室の形状は平面形は正方形、断面形は不明である。奥壁から約0.9mの棺座が床面と約10cmの段差を持つてつくられている。

閉塞石は4～5段残されていた。玄室南東部分に集中して土器が出土した。また、棺座の北寄り周辺に

は玉類と金環が散在している。

この横穴には、比較的多くの土器が残されていた。そのうち、特殊扁壺の出土は特筆される。築造時期は6世紀後半代と推定される。

A群6号墓(第33～34図、図版16・23・24)

5号墓の南、3mに位置する。7号墓・8号墓と共有する墓前域を持つ。羨道、玄室とも天井と壁面の一部が崩落している。玄室の形状は横長の方形で、断面形は天井に稜が見られるため尖頭形とわかる。玄室は羨道から15cm上段となり、その段差部分は幅10cm、深さ5cmの溝状となっている。羨道には大きさ50cm、厚さ5cmの板石が2枚検出し、その手前は閉塞石が残されていた。この状況から、玄室内に板石が敷かれている。玄室北側側壁には下方に鑿の刺突痕、上方に工具の削り痕が残っていた。築造時期は、墓前域の出土土器から、6世紀末から7世紀前半代と推定される。

A群7号墓(第33・34・36図、図版16・24・25)

6号墓南に隣接する。入口は大きく崩落している。また羨道、玄室とも壁面には崩落が見られる。玄室の形状は平面形が長方形、羨道との境は緩い袖がつくられ、床には約10cmの段差がある。断面形は天井に稜が見られるため、尖頭形である。玄室には大きさ50cm、厚さ3cmほどの板石が敷かれている。閉塞石は3～4段残っていた。壁面は崩落しているが、鑿痕と成形の工具痕が見られた。築造時期は6世紀末から7世紀前半代と推定される。

A群8号墓(第33・34・37図、図版16・26)

7号墓の南に隣接して存在する。入口周辺は崩落しているが、その他の遺存状況は比較的良好である。玄室の形状は、平面形がいびつな長方形、断面形はドーム形である。玄室の袖は緩い角度である。玄室床面は羨道床面より20cm高く、奥側はさらに10cm高く残し棺座としている。

羨道には閉塞石が残されていた。そして、それを取り去ると、幅約10cm、高さ3cmの段差があり、南側は小石が詰まっていた。

壁面には鑿で掘削した後、幅6～8cm程度のちような状の工具で仕上げている痕が残っていた。

A群9号墓(第38図、図版16・26・27)

8号墓から南に5m離れて単独で存在する。約5mの墓道を持つ。羨道部は短い。羨道と玄室天井が一部崩落しているが、残り具合は良好といえる。玄室の形状は、平面形は卵形に近い縦に長い楕円形で、断面形はドーム形である。玄室には、北側側壁から南西側袖にかけて5～12cmの段差がつけられており、棺座としている。また、玄室中寄りには、主軸方向に15～20cmの円礫が並んでおり、棺台と考えられる。

壁面には、工具痕が良く残る。天井部の工具痕は幅約5.5cmを測る。

A群10号墓(第39図、図版16・28・29)

9号墓から南に6m離れて単独で存在する。墓道を持つが崩れている。玄室天井は若干の崩落があるが、残り具合は良好であった。玄室は平面的に南側へ傾く方形で、断面形は偏平なドーム形である。今回調査した横穴の中で最も規模の小さい玄室であり、幅は約1mである。

壁面に残った工具痕は、丸い大きめの鑿痕と、縦長の鑿痕と2種類見られた。

A群11号墓(第40図、図版16・29・30)

10号墓の南に4m離れて単独で存在する。墓道の存在は不明である。玄室天井に崩落がある。玄室の形状は、平面形が正方形で、断面形はドーム形である。玄室床面は約10cmの段差が2段つけてある。そして、

20cm程の礫が1.8m×0.9mの長方形に並び棺台と考えられる。南西側の礫の下から銅鋼が出土している。また、玄室内には中央と周囲に排水溝を巡らせている。

なお奥壁、側壁の壁面には、鑿痕がきれいに残っていた。

A群12号墓(第41図、図版16・31・32)

11号墓の南側、3mに単独で存在する。天井や壁面の崩落はほとんど見られない。玄室の形状は楕円形で、断面形はドーム形である。奥壁周辺には、棺台と考えられる10cm前後の礫と10～25cmの岩が検出された。閉塞石の残りは良好であった。床面を含め、壁面には鑿痕が良く残っていた。先の丸いものと、平らなもの2種類が見られた。

A群13号墓(第42・43図、図版16・32～35)

12号墓から南に6m離れ単独で存在する。天井や壁面の崩落はほとんど見られず、良好な保存状態を保っていた。玄室の形状は、平面形が隅丸の長方形で、断面形はドーム形である。閉塞石は良く残っていた。羨道には排水溝が掘られている。玄室内には、15～30cmの礫とともに土器、鉄製品、玉類が多く残されていた。土器は、土師器15、須恵器16と、土師器の割合が多いことが特徴としてあげられる。

そして、奥壁の北よりの壁面から、床面から約85cm、天井から約20cmの高さに、鉄鏃2本が刺さって発見された。鉄鏃の間隔は約10cm、高さは約5cmの差がある。奥壁と直交する方向に、斜め上方から刺さっている。その周辺の床面には人骨が散在している。

壁面には鑿痕がきれいに残っていた。奥壁と側壁には丸い刺突痕が残り、天井には幅広の工具により成形された様子が観察できた。築造時期は、6世紀後半代と考えられる。

A群14号墓(第44図、図版16・36)

13号墓の南に隣接して単独で存在する。墓道は滑落している。そして、羨道の天井は崩落するが、その他は良好に保存されていた。玄室の形状は平面形が長方形で、断面形はドーム形である。玄室内の中程には10cm程の窪みが見られるが、床面の地層が軟らかいために掘れてしまった結果と考えられる。

閉塞石は最下段が残っていた。そして、その下は下場の幅10cm、深さ10cmの溝が掘られている。

壁面に残っていた工具痕は、他の横穴のものに比べ、先端が丸みを帯びている。

A群15号墓(第45・46図、図版37)

14号墓の南、6m離れ単独で存在する。約3mの長さの墓道が存在する。玄室、羨道とも床面から約1mから上方は崩落している。また、南側側壁は、隣接する16号墓とつながってしまっている。玄室の形状は平面形は縦に長い楕円形、断面はドーム形である。玄室と墓道のそれぞれの主軸は異なっている。玄室内北方壁寄りには、15～25cmの礫が残されており、棺台である可能性がある。

閉塞石は前後に崩れているが残りは良い。土器の出土はなく、玉と鉄製品のみ出土している。

A群16号墓(第47・48図、図版38・39)

15号墓の南に隣接する。約4mの長さの墓道を検出している。玄室、羨道とも天井と壁面が床から約0.7mより上は崩落している。玄室の形状は、平面形が丸みを帯びた方形で、断面形はドーム形と考えられる。玄室の主軸は、墓道の主軸から見るとやや南にずれている。そして、玄室には、墓道の主軸を延長したあたりから南側は約10cm高くなっており、棺座がつくられている。玄室の一段低い部分から土器が重なって出土している。また、棺座の北寄りの部分には玉が固まって出土している。築造時期は、6世紀後半代と推定される。

A群17号墓(第49・50図、図版40・41)

16号墓の南東側に位置する。約4mの長さの墓道を検出している。天井の崩落は見られるが概ね良好に保存されている。閉塞石の残りは良い。そして、羨道外側入口の周囲を方形に囲むように掘り込みが認められる。これは、初葬時には、この掘り込みを板をはめて入口を塞ぎ、追葬時には右で塞いだものと考えられる。玄室の形状は、平面形が正方形、断面形はドーム形である。長さ2.5mの玄室は、奥壁から1mの部分約30cm高く、棺座となっている。棺座部分の両側壁には排水溝が掘られている。玄室内からは手前の部分に土器が残されており、棺台の中央やや南西寄りから小刀が出土している。壁面の工具痕は残りが良好であった。3種類の使用が考えられる。築造時期は、6世紀中半～後半代と推定される。

B群1号墓(第51・52図、図版41～43)

茶屋辻横穴群の展開する丘陵の西側斜面に1基単独で存在している。そして、この横穴の大きな特徴として、玄室の奥にさらに墓室が存在する(ここではそれぞれ前室、奥室とした)。

約4mの墓道を検出している。閉塞石は残りが良い。入口上方に崩落があるが、その他は概ね良好に保存されている。玄室の形状は、前室の平面形は長方形、奥室の平面形は正方形、断面形は共にドーム形である。平面形は全室は横長の方形で、奥室は長さと同幅が近似する方形である。全室には中央に排水溝が掘られている。奥室は奥壁から約1mが30cm高くつくられ、棺座となっている。前室からは土器、鉄製品が残されていたが、奥室から遺物の出土はなかった。築造時期は、6世紀中頃と推定される。

第2節 遺物の概要

総計153点の土器を実測することが可能であった。内訳はA群1号墓が4点、同墓前域が20点、同群2～4号墓前域が15点、同群5号墓からは25点、同群7号墓からは10点、同群6～8号墓前域からは4点、同群9～12号墓からは5点、同群13号墓からは32点、同群15号墓から1点、同群16号墓から21点、同群17号墓から8点、B群1号墓から8点である。中でも、5号墓から出土した特殊扁蓋は全国でも十数例という稀少な土器であり、特異である。

土器(第62図～第74図、図版55～73)

1～4はA群1号墓から出土した土器である。1は土師器の盤である。外面の調整は不明である。2は土師器の碗である。3は須恵器の壺底部かと思われる。4は土師器の甕である。胴部及び頸部くびれの外面に指頭痕を残す。口縁部は外側に大きく屈曲する。内面はナデ調整を施したと思われるが明確でない。頸部の内外面にナデ調整を施す。盤や甕から7世紀末から8世紀前半代と考えられる。

5～24はA群1号墓前域から検出された須恵器である。5～7は須恵器坏蓋、8～10は同坏身、11～14は乳頭状の摘みをもつ須恵器坏蓋、15～18は同坏身、19は摘み部分の頂部が窪み、内面にかえりを持たない坏身である。壺の蓋の可能性もある。いずれも口径、最大径とも11cm以内におさまる。20は高坏である。21は脚部を欠失した無蓋高坏の坏部である。22は甕である。完形品である。外面頸部及び肩部に沈線1条を施す。注口内径1.0cmを測る。23は瓶類の口縁部と思われる。24は推定口径40.0cmを測る大形の甕である。頸部外面に沈線及び波条文を施すが、波状文は明瞭ではない。体部内面には青海波文がわずかながら残存する。坏の身・蓋の逆転が見られることから7世紀後半代と推定される。

25～39はA群2～4号墓前域から検出された土器である。25は2号墓出土で、口縁部に漬けがけによる施軸がみられる灰陶陶器である。口縁部はやや外反させ端部は丸くおさめている。高台部は爪形を呈している。26はA群4号墓出土の須恵器の口縁部を欠失した長頸甕である。27、28は須恵器の坏蓋、29～32は同坏身である。いずれもA群2号墓出土である。27、28はいずれも口径9.1cmを測る。高さは27が3.7cm、

28は3.45cmである。29～32の口径は推定も含め、9.0～11.4cmである。最大径は12cm以内におさまる。坏の形状から7世紀前半代と推定される。

33～38はA群2号墓、39は3号墓出土である。33は須恵器の無蓋高坏の坏部と考えられる。34は須恵器の壺の体部上半と思われる。肩部に2条の沈線を施す。内外面ともにナデ調整を施す。35は須恵器の壺である。完形品である。外面口縁部付近、肩部に沈線を施す。注口径1.0cmを測る。底部にヘラ削りを施している。36は須恵器の埴である。口縁部をやや外反させ、端部に丸みをつけている。37は須恵器の壺の上半部である。頸部が短く、口縁部にかけて湾曲する形をとる。体部外面は平行叩き、内面はナデ調整が施されている。38、39は土師器の碗である。いずれも口縁部を内傾させ、下半部に指頭痕を残す。上半部は内外面とも横方向のナデ調整を施している。壺の形状から7世紀後半と推定される。

40～64まではA群5号墓から出土した土器である。内訳は62～64が土師器で、そのほかは須恵器である。40～46は坏蓋である。外面に稜線を残す41、42、45と稜線が消失し半球状に丸みを帯びる40、46、43、44の2つに分けられる。口径は14.0～14.2cmが40、41、43で、11.9～12.3cmが46、42、44、45と14cm代と12cm代の大きさに分けることができる。前者は時期差、後者は用途の違いと考えられる。いずれも天井部外面に回転ヘラ削りを施す。46は天井部外面にヘラ記号がみられる。44は色調は赤褐色を呈し、焼成は良好、胎土に3mm程度の小石を含んでいる。その他は色調は灰色～暗灰色を呈し、焼成は良好、胎土は緻密である。47～52は坏身である。立ち上がり内傾する47～49とやや直線的な立ち上りの50、51、碗形を呈する52に分けられる。口径は47～49が13.6～14.3cm、50、51が13cm弱、52が13.1cmを測る。53、54は壺である。53は口縁部と頸部の境に段をなし、口縁部は大きく外反する。胴部は十露盤玉状をなす。口縁部から頸部にかけてはヘラ状工具による押し引き文、頸部下半の2条の沈線間には搦状工具による連続刺突文が施されている。胴部の2条の沈線間にも搦状工具による連続刺突文が施されている。注口部分に打ち欠きがみられる。54は頸部が大きく開き、胴部は半球形をなす。頸部外面に1条及び2条の沈線、胴部外面の2条沈線間にヘラ状工具の連続刺突文が施されている。55、56は短頸壺である。口縁端部を丸くおさめ、器壁は0.7～1cmと厚く作っている。外面はカキ目調整を施し、内面底部に整形時の当て具の痕跡がみられる。56は、肩部に丸みを帯び、頸部はやや内傾する。57～59はフラスコ瓶である。頸部に沈線を施す。体部は木板によるハケ目状の整形が見られる。58の体部は球状を呈し、頸部に2条の沈線を施す。59は口縁部が欠失している。60は横瓶である。体部の調整は斜方向の叩き、カキ目を施している。製作時の上面を円盤充填した痕跡がみられる。61は特殊扁壺である。提瓶と同様の作りで胴部に山形の切り込みを入れ、これを口縁とし、胴部の両面の中心に穿孔を行っている。外面には同心円文を施し、その間を波状文、襷による連続刺突文が施されている。外面の文様は表裏があると考えられるが、両面とも精緻な図柄を描いている。同種のものは、全国で12例が知られている。62、63は短頸壺である。両者とも肩部に1cm前後の円形貼付文を施す。体部外面はハケ目、頸部内外面ともにナデ調整を施す。64は碗である。外面に荒いハケ目、内面にナデ調整を施す。坏蓋の稜線の欠失や壺の形状、特殊扁壺の製作技法などを考慮すると、6世紀後半代と推定される。

65～74はA群7号墓から出土した土器である。うち、74は土師器であるほかはすべて須恵器である。

65～68は坏蓋である。口径8.8～9.0cmを測る。69～72は坏身である。口径9.5～10.1cmを測る。73は長頸壺の蓋である。74は碗の破片と思われる。外面に指頭痕がみられる。坏の形状から6世紀末～7世紀前半代が推定される。

75～78はA群6～8号墓から出土した土器である。75、78は口径8.9cm、8.7cmを測る。76、77は口径がともに9.3cmを測る。坏の形状から6世紀末～7世紀前半代が推定される。

79～83はA群9～12号墓から出土した土器である。79はA群9号墓出土の短頸壺である。口径9.3cm、高さ11.3cmを測る。肩部に2条の沈線を施す。80はA群11号墓出土の壺の口縁部である。81は12号墓出

土の長脚一段透かしの高坏である。82はA群12号墓出土の短頸壺である。底部外面は手持ちヘラ削りを行い、ヘラ記号を残す。83はA群12号墓出土の土師器の高坏である。外面受部と脚部の接続部には指頭痕を残す。脚部は最下部で大きく開く。内面はナデ調整を施す。84～90はA群13号墓出土の須恵器である。84～86は坏壺である。6世紀後半代と推定される。

84～115はA群13号墓から出土した土器である。84は口径13.2cm、85は11.0cm、86は10.55cmを測る。87は坏身で、84と同じ口径を測る。88は長脚2段透かしの高坏である。受部口縁は直立きみで、中央に稜をもつ。稜の下方に6条の波状文を施す。脚部中央に2条の沈線を施し、ハの字形に開く。89は口径16.35cm、高さ11.55cmを測る、高坏である。受部は半球状を呈し、脚部はハの字形に開く。90、91は甕である。90は口縁部が大きく変形している。注口径1.5cmを測る。91は肩部に沈線が1条巡る。92は広口壺で、体部に粗いハケを施す。93は埴である。最大径を体部中央にもつ。94は短頸壺で、最大径を肩部にもつ。95は台付長頸壺である。肩部の沈線間に櫛による連続刺突文を施す。96は長頸壺で頸部に1条の沈線を施す。97、98はフラスコ瓶である。体部は球状を呈し、98の外面は全体が自然釉に覆われる。99は大形の瓶で、肩部に2つの円形貼付文がみられる。頸部には3条の沈線を施している。100は横瓶である。101～105は模倣坏である。101～103は坏壺、104、105は坏身である。いずれも半球状を呈している。106～109は土師器の高坏で、いずれも受部断面がS字状に屈曲し、脚部も大きく開く形をとる。110～115は須恵器を模倣した土師器である。110は甕である。体部に横方向のハケ目調整を施す。111は短頸壺で、体部が球状を呈している。112は長頸壺の蓋で、乳頭状のつまみをもつ。113は台付長頸壺である。112とセットになると思われる。114は台付壺である。体部に縦方向のハケ目調整を施す。115は平瓶である。体部が肩部に丸みがある。坏の形状やフラスコ瓶、大型瓶から6世紀末～7世紀前半代が推定される。

116はA群15号墓閉塞石上面から出土した山茶碗の底部で、高台が僅かに残る。回転糸切痕がみられる。

117～137まではA群16号墓から出土した土器である。117は坏壺で、口縁部近くに稜がみられる。全体的に丸みを帯びる。118～120は有蓋高坏である。口縁部が内傾する。121は短頸壺で、頸部が直立きみで口縁部に至り外反する。122は頸部に最大径をもつ甕である。頸部と体部に櫛による連続刺突文を施している。123は無頸壺で体部にカキ目調整を施している。123は埴で頸部が直立した形をとる。128～136は土師器の高坏で、いずれも受部が低く、口縁部が外反する形をとる。134～136までは同脚部であるが形状から高坏と判断される。137は体部を欠失した土師器の甕である。坏や甕から6世紀後半代と推定される。

138～145はA群17号墓から出土した土器である。138、139は須恵器の坏壺、140、141は同坏身である。坏壺は稜線を残している。142は口縁部を欠失した甕である。肩部に張りをもつ。143は環状把手を施した提瓶である。製作時の底面は平らで、その上面は半球状を呈す。144は横瓶である。外面には叩きとカキ目、内面には青海波文を施す。145は土師器の坏壺と思われる。坏壺の明瞭な段、提瓶、横瓶、甕から6世紀中半～後半代が推定される。

146～153はB群1号墓から出土した土器である。146、147は甕で体部が球状を呈す。147は頸部にヘラによる波状文、体部に櫛による連続刺突文を施している。148は頸部に波状文及び沈線を施した須恵器の壺である。149は吊り手状の把手をもつ提瓶である。150は土師器の長頸壺と思われる。151は高坏受部と思われる。152、153は稜線を欠失した須恵器の坏壺である。甕、提瓶から6世紀後半代が推定される。

鉄器(第75～81図、図版73～81)

鉄器は計207点を計測することが可能であった。鉄鏃を最多として、刀子、大刀、馬具が主な出土品である。中でも、大刀の柄頭や柄縁金具の図柄は国内で他に類をみないものとして注目される。

154～161はA群1号墓から出土した刀子である。159は墓部で、他は刃部だけの出土である。木質が残存しているものがみられる。A群2号墓からは161、162の平造三角形の鏃身、163の刀子の出土がある。

A群3・6号墓からは筈被部分(164、166、167)、A群4・7号墓からは小形の耳環(165、168、169)が出土している。A群7号墓にはこの他に170～187までが出土しており、特に大刀の柄頭、柄縁金具は他に例を見ない。170は銅製で龍が舞う姿を毛彫りした丰頭柄頭で、両面に施文されていたものと考えられる。171は銅製の毛彫りを施した鉏であるが、図柄は「獅噛」を表現したものと推定される。175～178は片刃箭式の鐵身である。180～187は轅関の柄部である。172、173は刀子で、174は同鉏である。A群5号墓からは鉄鎌、刀子、耳環のほか、馬具の出土がある。188は筈被広鋒平造三角形形式の鉄鎌である。189は平造柳葉式の逆刺をもつ鐵身である。190は188と同型式と思われる。193、194は刀子である。191、192は耳環である。195、196は鉦、197、198は鉦の兵庫鎖、199～204は鉦の吊金具である。A群8号墓からは205、206の刀子、207の同鉏が出土している。A群9号墓からは鑿箭式の片刃造である209、210の鉄鎌や轅関及び柄部の211、212、耳環(208)、刀子(213、214)が出土している。A群11号墓からは2点の銅鋼(218、219)、刀子(220)が出土している。A群12号墓から出土した221～229は片刃造鑿箭式で轅関をもつ鉄鎌であると思われる。A群15、16号墓からは刀子(230、231)が出土している。A群16号墓からはこの他に鹿角装を施した小刀が出土している。A群13号墓からは耳環状2点(234、235)、鉄鋼2点(236-1、236-2)が出土しているが同品は同一体の可能性もある。237～240は広根系の鉄鎌で、平造三角形形式で、237、238は長三角形、239は腸袂、240は三角形である。241～251は鑿箭式で片刃造の鉄鎌と考えられる。242～284までは頸部から茎部にかけての破片で、関部は轅関である。茎部に糸巻き痕が残るものがある。285、286は両頭金具である。287～291は刀子で、291は鉏である。292、293は毛抜き状鉄器であるが、遊環の可能性もある。294は不明である。295～315はA群13号墓から出土している刀片である。295～297は大刀の鐔、298～303は鉏である。304は大刀の莖片で目釘が残る。305は小刀の莖片、306は大刀片である。307～315は大刀刀身片である。316～326はA群17号墓から出土した遺物で、316～321は鉄鎌である。316は尖根系の平造鑿箭式で腸袂がある。関は轅関である。茎部に糸巻き痕が残る。317は柄部で轅関、318は広根系の平造三角形形式、319は逆刺が深い腸袂、320は浅い逆刺をもつ鉄鎌である。321は同莖部片である。322は大刀の莖片で目釘が残る。324～327は刀子である。327は不明である。328～352はB群1号墓から出土した鉄鎌、馬具、刀などである。328は広根系の平造三角形形式の腸袂をもち、329、330は尖根系の片刃造鑿箭式の鉄鎌である。331～336は頸部から茎部にかけての破片である。337～339は刀子である。340～351、354～357までは馬具の部品である。340、341は帯飾金具、342～344は鉸具、345は344の刺金、346～351は銀飯である。352、353は大刀、354～357は鉦の吊金具片である。木質片が残る。358、359は耳環である。360は目釘である。

玉類(第82図、図版81～82)

勾玉、切子玉、管玉、小玉、ガラス小玉、霰玉のほか、小形の砥石の出土がある。総数67点である。

361は琥珀製の霰玉でA群1号墓出土である。362～375はA群5号墓出土である。362～365は勾玉で364の碧玉製を除いて他は瑪瑙製である。366～371は水晶製の切子玉である。372、373は碧玉製の管玉で、374、375は濃紺色のガラス小玉である。376はA群9号墓出土のガラス小玉である。377～389はA群11号墓の出土である。377は緑色を呈したガラス質の管玉である。378～380は瑪瑙製の切子玉である。381～383は霰玉で前2者は琥珀製で、後者は材質は不明である。384～388は濃紺色のガラス小玉である。389は勾玉である。390～394はA群13号墓出土の小玉で391である。395～404はA群15号墓出土である。395～403は碧玉製の管玉で、404は琥珀製の霰玉である。405～420はA群16号墓出土である。405～419は瑪瑙製の切子玉であるが、405は大型品である。420は材質不明の霰玉である。421～426はB群1号墓出土である。421は琥珀製の霰玉である。422～426は管玉である。426の緑色凝灰岩製を除いて他は碧玉製である。427はA群17号墓出土の砥石である。2箇所の穿孔があり、表面は滑らかで湾曲さみである。携帯用の製品と考えられる。

第7章 矢崎横穴群D群

丘陵斜面に存在する。矢崎横穴群は周知の遺跡であり、東名掛川インターチェンジ建設工事に伴い調査されている。今回調査では、D群3基を調査した(第2図)。D群は横穴3基で構成される。墓前域を共有している。

第1節 遺構の概要

D群1号墓(第53・54図、図版44～46)

東側に位置する。羨道の天井部は失われている。玄室の形状は、平面形は方形で、両袖とははつきりしている。断面形はドーム形である。玄室の天井も崩落がある。羨道は玄室の長さの2倍の長さをもつ。閉塞石は残されていた。

D群2号墓(第53・55図、図版44・46～48)

1・3号墓にはさまれて存在する。1号墓とは約3m、3号墓とは約2m離れている。玄室の形状は平面形が方形、袖は東側ははつきりしている。断面形はドーム形である。玄室には礎床が、1.6m×1.1mの範囲で検出された。閉塞石は下方が残されていた。羨道の長さは、玄室長の約2倍である。

D群3号墓(第53・56図、図版44・48・49)

2号墓の南2mに隣接する。入口周辺に若干の崩落が見られる。玄室の形状は、平面形が方形、断面形はドーム形である。玄室床面は羨道床面から約5cm高くなっている。玄室には礎床が1.1m×0.7mの範囲で検出された。閉塞石は若干の崩れがあったが残されていた。

第2節 遺物の概要

計15点の土器(須恵器が10点、土師器が5点)、8点の鉄器が実測可能であった。

土器(第83・84図、図版83～85図)

1～3、9～15は須恵器である。1は平瓶である。2は短脚の高坏である。3は1と同じく平瓶である。1と比べ、3は全体的にやや丸みをもつ。

4～8は土師器である。いずれも高坏である。4～7は受け部が大きく外反し、8は内傾する。いずれも粗雑なつくりである。10、11は平瓶である。頸部に沈線1条、外面底部付近に叩きを施す。他はナデを施す。11はやや小振りなつくりである。外面胴部にカキ目を施す。12は坏蓋である。13、14は坏蓋である。15はフラスコ瓶である。口縁部は欠損し、不明である。頸部外面に接合時のナデ調整がみられる。坏の形状や平瓶、フラスコ瓶から6世紀後半代が推定される。

鉄器(第84図、図版85)

16～18は広根系の平造三角形で棘関の鉄鏃で、18～21は頸部から茎部の破片である。22は銀箔銅製の耳環、23は両頭金具である。

第8章 まとめ

ここでは、各遺跡の今回調査の成果を箇条書きにまとめてみたい。

栗下古墳

栗下古墳は、径20mの規模の墳丘を持つ。主体部は掘り方の長さが8m、幅が2.8mと規模の大きなものである。残った副葬品として、主体部内から勾玉2と管玉14が出土し、棺外埋葬と考えられる鉄鍔1と鉄鑿1が出土している。鉄鍔は柳葉形で、鑿は実用が可能と考えられるものである。勾玉は、2点とも小さいながらも翡翠製で、管玉はどれも細身であり、1点が碧玉製、他は緑色凝灰岩製である。栗下古墳の築造時期を知る材料としては、鉄器と玉類だけだが、5世紀中葉～後葉と考えられる。この古墳は、現在のところ、この地区における、古墳の初現として位置付けられる。

茶屋辻古墳群

茶屋辻古墳群1号墳、2号墳は、比較的小規模な、木棺直葬の古墳と考えられる。しかし、古墳に伴う遺物の出土がなかったため時期を確定できない。市内では、近年、こうした比較的小規模な古墳の調査例が増えており、5世紀後半から6世紀前半に位置付けられる。茶屋辻古墳群もこの地区に横穴が導入される以前の墓制として、上記の時期に築造されたものと考えられる。

茶屋辻横穴群

・特殊扁壺の出土

A群5号墓から出土した特殊扁壺は、出土例が全国でも12例と極端に少なく、稀少で特異な遺物といえる。茶屋辻横穴群出土のものは、胴部の片側は波状文を施し、もう片側には樽状工具による刺突文を施している。施文は精緻で、また、成形も丁寧につくられている。他の遺跡から出土したものは、胴部の施文を省略するものも見られる。この特殊扁壺という稀少な須恵器を持つことは、A群5号墓に埋葬された人物の生前の人となりを考える材料となる。

・毛彫りされた龍と獅頭

A群7号墓からは、毛彫りが施された主頭柄頭と鉤が発見されている。特に、龍の文様は、日本では他に出土例が知られていない。これらの出土は、当時の最先端の技術による装飾品を手に入れられること、日本にないものを手に入れられることを示しており、埋葬された人物の出自や身分を考える材料となる。

・玄室奥壁に刺された2本の鉄鍔

A群13号墓からは、鉄鍔が2本、奥壁に突き刺された状態で発見されている。2本は約10cmの間があり、高さの差は約5cmあり、やや上方から奥壁に直交して刺されている。その周辺には人骨が多く残されており、まさにここに遺体を安置したと考えられる。そのため、埋葬に関係する何らかの行為である可能性が考えられる。

・丘陵西側斜面に単独で存在する復室構造の横穴墓

B群1号墓は、17基で群をなす横穴群の反対側に、単独で存在している。しかも、玄室の奥にもう一つ墓室を持つ。復室構造は、九州の横穴では比較的多く見られる形態であるが、近畿や東海では例がない。

被葬者は、九州と直接関係があった人物である可能性が考えられるかもしれない。

・横穴導入期の横穴の存在

A群17号墓は6世紀中～後半の築造が考えられ、B群1号墓は6世紀中頃の築造が考えられる。掛川市域における横穴の初現は、6世紀前半とされ6世紀中頃は横穴の導入期と考えられる。さらに、これら横穴は、現在のところこの地区における横穴の初現として位置付けられる。

京徳横穴群 横穴計測一覽表

名称	女			室			羨道部			主軸	標高	
	奥行き(m)	幅(m)	高さ(m)	床面積(m ²)	平面形	断面形	埋葬施設	長さ(m)	幅(m)			傾斜石
A群 1号墓	4.0	1.9	1.5	5.4	台形	尖頭形	—	—	—	凹壁	N-45°00'W	40.9
B群 1号墓	2.2	2.7	1.8	5.8	方形	ドム形	—	—	—	凹壁	N-60°00'W	38.8
3号墓	2.4	—	1.8	—	台形	ドム形?	—	—	—	—	N-76°00'W	36.8
4号墓	2.5	2.2	1.85	5.2	方形	尖頭形	—	—	—	凹壁	N-39°00'W	36.5
4号墓	2.2(埋込)	3.2	—	—	方形?台形?	尖頭形?	—	—	—	—	N-33°50'W	37.0
5号墓	0.8(覆石)	1.8	—	—	—	ドム形	—	—	—	—	N-90°00'W	36.7
6号墓	1.7	2.0	—	3.0	台形	尖頭形	—	—	—	—	N-82°25'W	36.9
7号墓	2.8	1.8	1.45	3.6	方形?台形?	尖頭形	—	—	—	—	N-69°00'W	36.2
8号墓	1.1(埋込)	1.4	—	—	—	ドム形	—	—	—	—	N-52°00'W	37.1

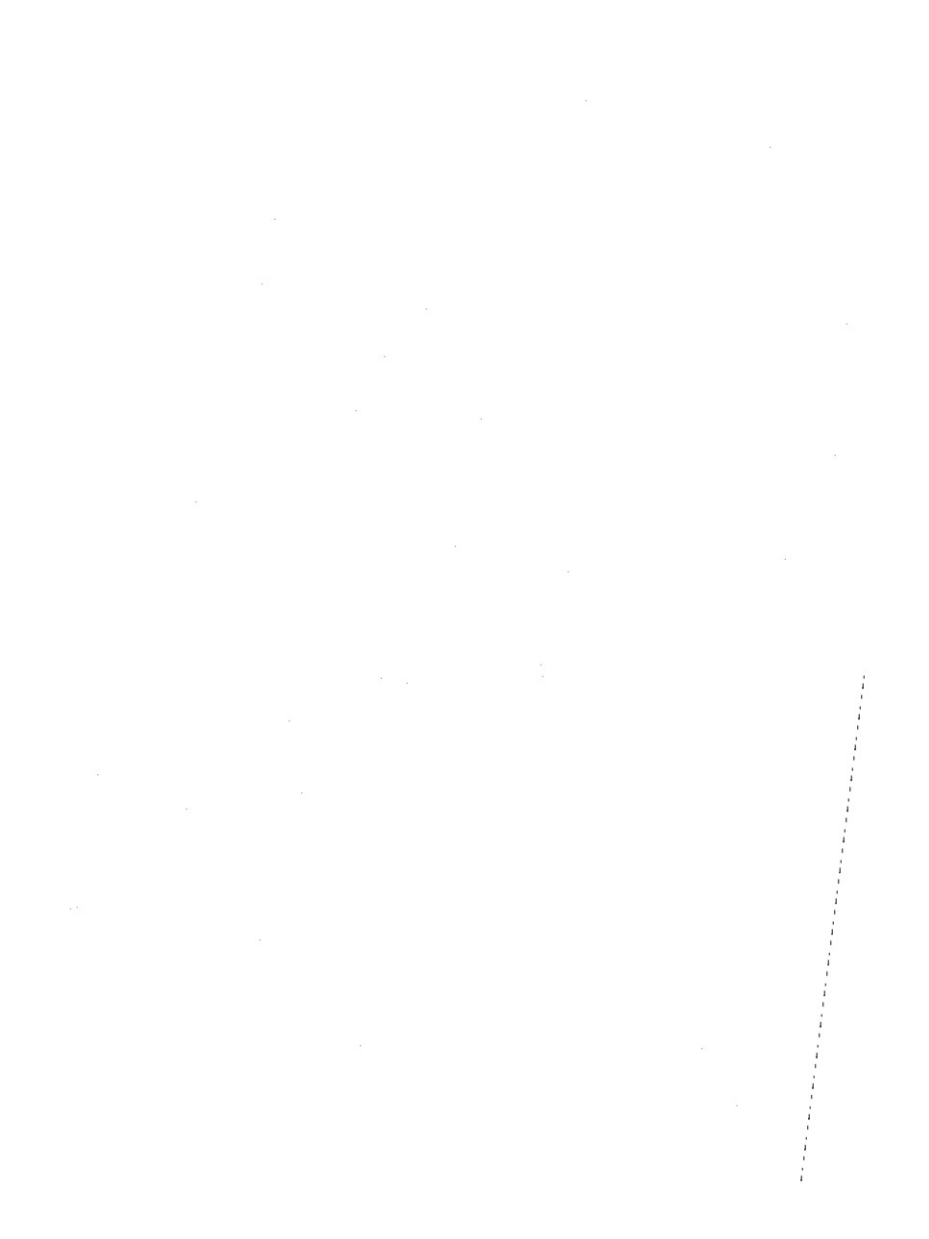
茶屋辻横穴群 横穴計測一覽表

名称	女			室			羨道部			主軸	標高	
	奥行き(m)	幅(m)	高さ(m)	床面積(m ²)	平面形	断面形	埋葬施設	長さ(m)	幅(m)			傾斜石
A群 1号墓	1.9	2.4	—	4.4	方形	ドム形	—	—	—	凹壁	N-55°50'W	46.9
2号墓	1.9	1.8	—	3.1	方形	—	—	—	—	凹壁	N-65°00'W	47.4
3号墓	2.2	1.1	—	2.2	長方形	—	—	—	—	—	N-57°50'W	47.3
4号墓	1.3	1.9	—	2.5	方形	尖頭形	—	—	—	凹壁	N-62°00'W	47.6
5号墓	2.1	2.4	—	5.1	方形	—	—	—	—	凹壁	N-72°00'W	49.1
6号墓	1.2	1.9	1.4	2.1	方形	尖頭形	—	—	—	凹壁	N-64°00'W	47.4
7号墓	1.6	1.3	1.2	1.9	方形	尖頭形	—	—	—	凹壁	N-68°50'W	47.5
8号墓	1.6	1.8	—	2.5	方形	ドム形	—	—	—	凹壁	N-76°50'W	47.5
9号墓	1.9	1.7	1.2	2.7	楕円形	ドム形	—	—	—	凹壁	N-70°00'W	50.4
10号墓	1.6	1.1	0.8	1.6	方形	ドム形	—	—	—	凹壁	N-78°50'W	51.2
11号墓	2.5	2.5	1.1	5.7	方形	ドム形	—	—	—	凹壁	N-90°00'W	53.7
12号墓	1.1	1.8	1.1	1.8	楕円形	ドム形	—	—	—	凹壁	N-105°00'W	51.4
13号墓	2.4	3.5	1.6	8.0	方形	ドム形	—	—	—	凹壁	N-116°00'W	52.3
14号墓	1.6	2.1	1.1	3.1	方形	ドム形	—	—	—	凹壁	N-127°50'W	53.6
15号墓	2.9	1.9	—	4.6	台形	ドム形	—	—	—	凹壁	N-86°50'W	53.2
16号墓	1.9	2.1	—	3.7	方形	—	—	—	—	凹壁	N-54°50'W	52.5
17号墓	2.5	2.5	1.2	5.7	方形	ドム形	—	—	—	凹壁	N-42°00'W	53.0
B群 1号墓	1.9	2.0	—	1.4	方形	ドム形	—	—	—	凹壁	N-55°25'E	54.7
	1.7	2.6	—	1.5	方形	ドム形	—	—	—	凹壁	N-68°50'E	55.2

矢崎横穴群 横穴計測一覽表

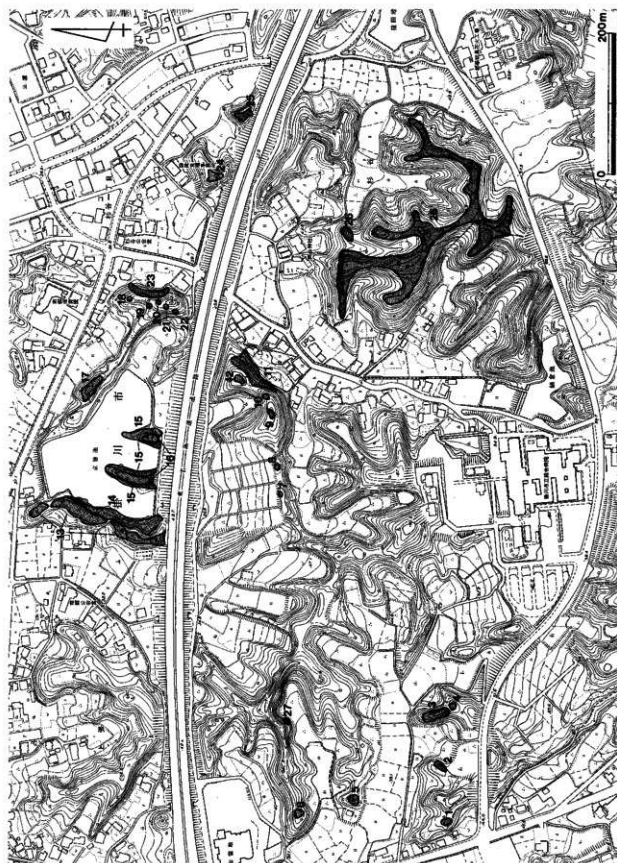
名称	女			室			羨道部			主軸	標高	
	奥行き(m)	幅(m)	高さ(m)	床面積(m ²)	平面形	断面形	埋葬施設	長さ(m)	幅(m)			傾斜石
D群 1号墓	1.2	1.7	1.3	1.7	方形	ドム形	—	—	—	凹壁	N-6°50'W	46.8
2号墓	1.2	1.9	(1.1)	1.9	方形	ドム形	—	—	—	凹壁	N-15°75'W	46.3
3号墓	1.1	1.7	0.7	1.5	方形	ドム形	—	—	—	凹壁	N-33°50'W	45.7

実測図版

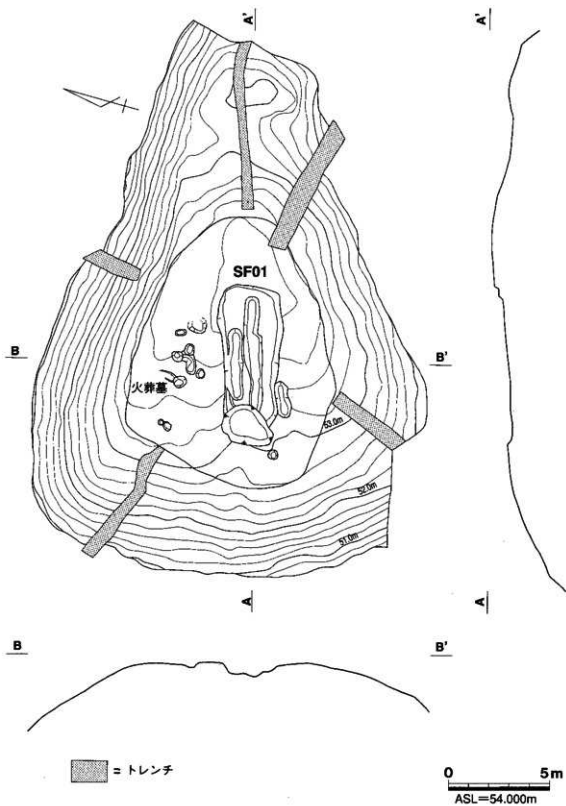




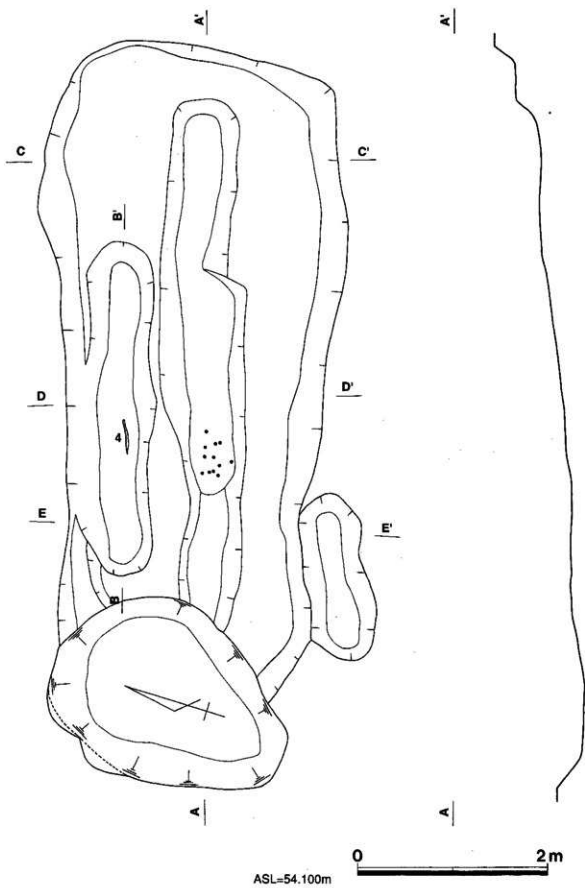
第1図 周辺遺跡分布図



第2図 東名掛川.C.周辺調査地点位置図



第3図 栗下古墳全体図



第4図 栗下古墳SFOI実測図(1)

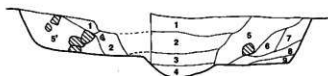
B

B'



C

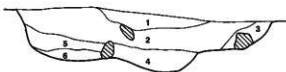
C'



- 1. 黄白色土
- 2. 淡茶色土
- 3. 茶色土
- 4. 黄茶色土
- 5. 黄白色土
- 5'. 黄白色土
- 6. 黄茶色土
- 7. 淡茶色土
- 8. 黄白色土
- 9. 淡黄色土

D

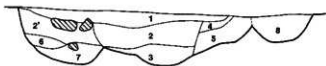
D'



- 1. 黄白色土
- 2. 淡茶色土
- 3. 黄白色土
- 4. 茶色土
- 5. 黄白色土
- 6. 黄色土

E

E'

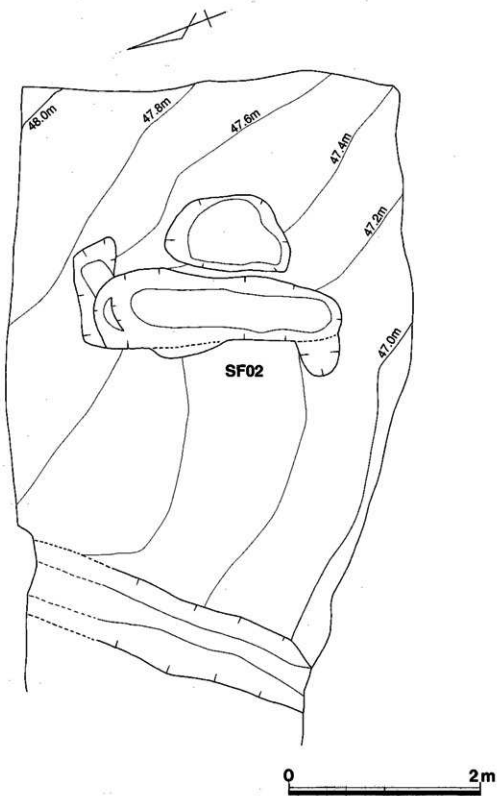


- 1. 黄茶色土
- 2. 黄色土
- 2'. 黄白色土
- 3. 淡黄色土
- 4. 淡茶色土
- 5. 茶褐色土
- 6. 淡茶色土
- 7. 茶色土
- 8. 茶色土

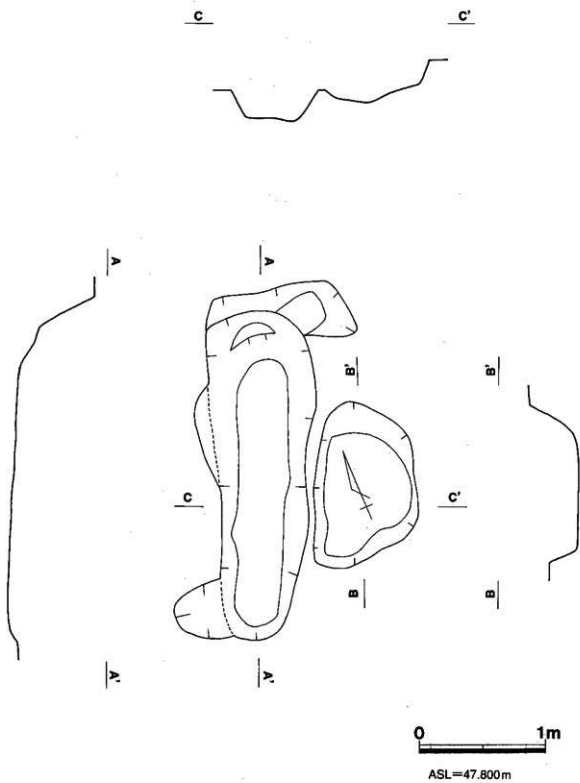
ASL=54.100m



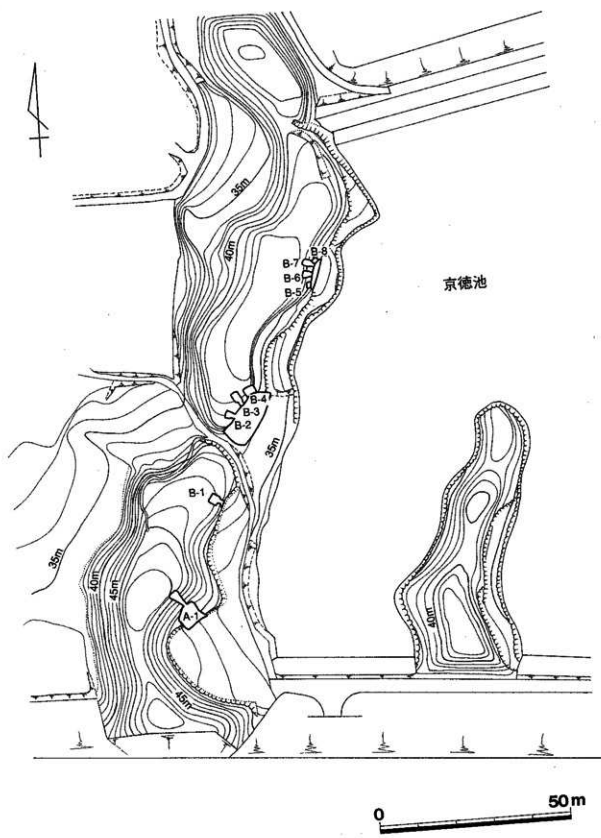
第5图 栗下古墳SFOI実測図(2)



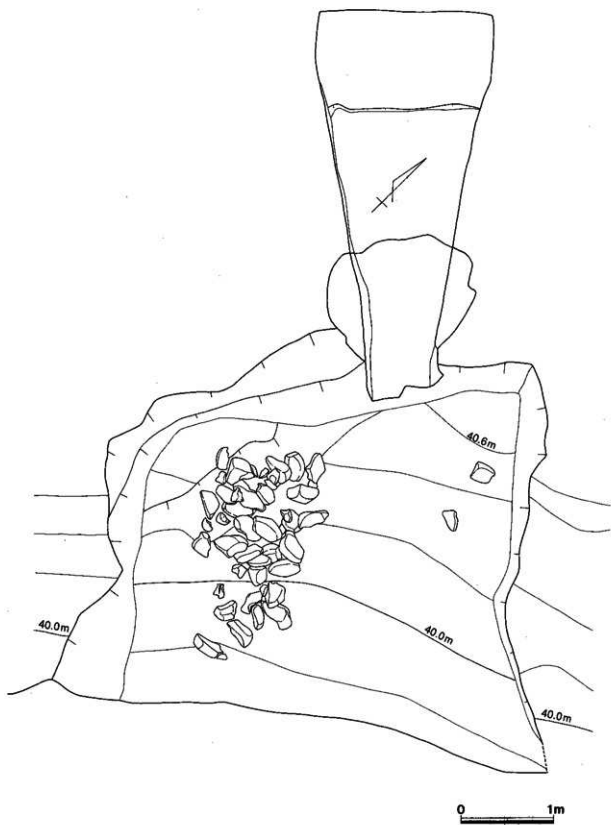
第6図 栗下古墳SF02 実測図(1)



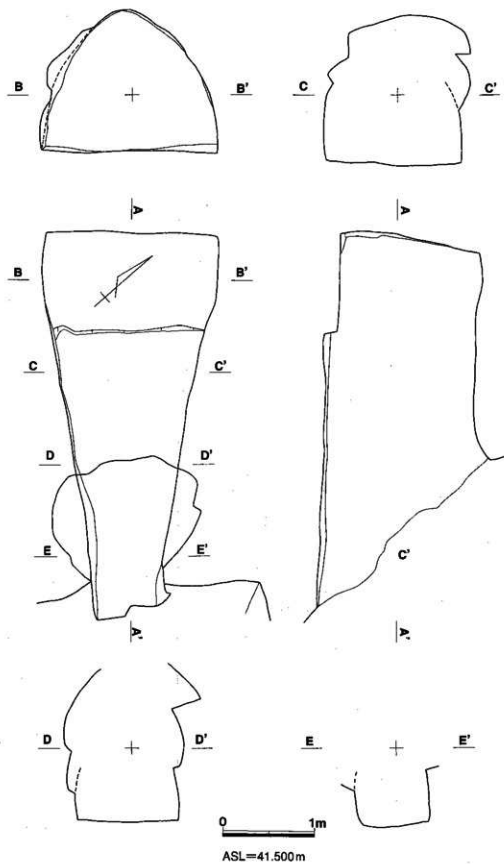
第7图 栗下古墳SF 02実測図(2)



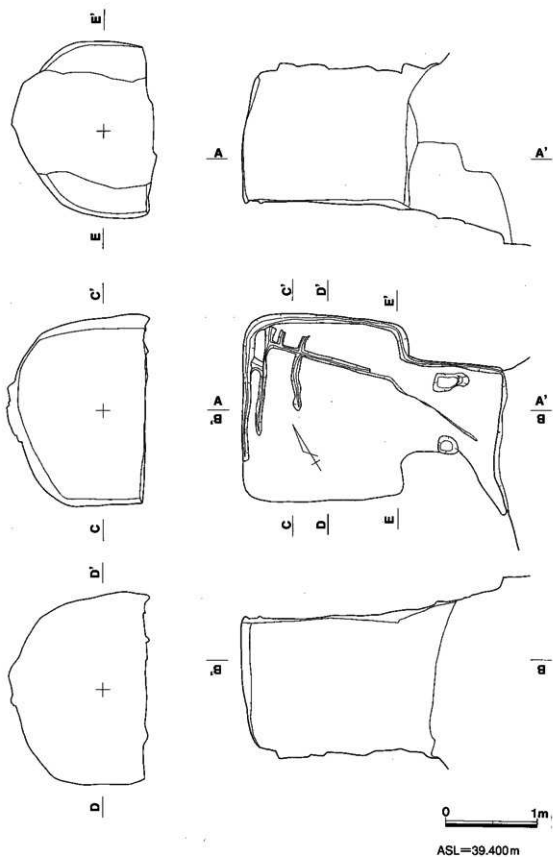
第8図 京徳横穴群配置圖



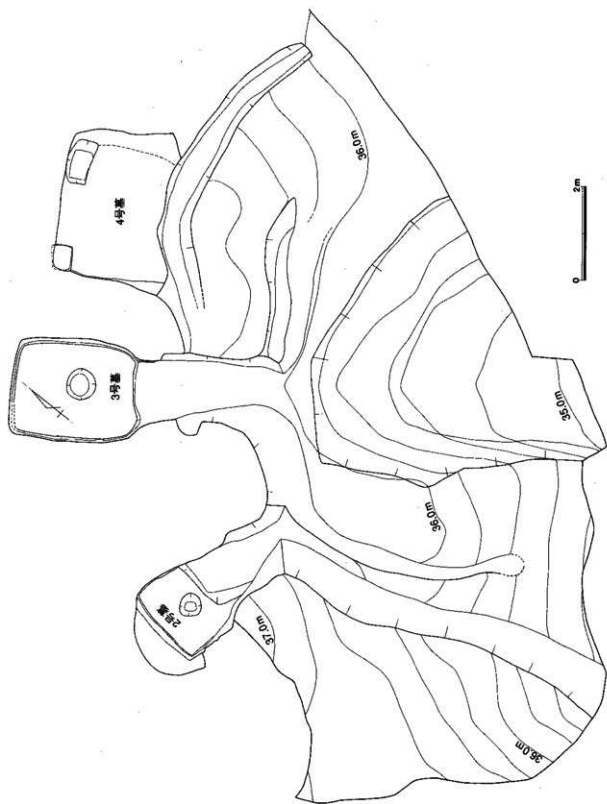
第9图 京德横穴群 A群1号墓墓前域实测图



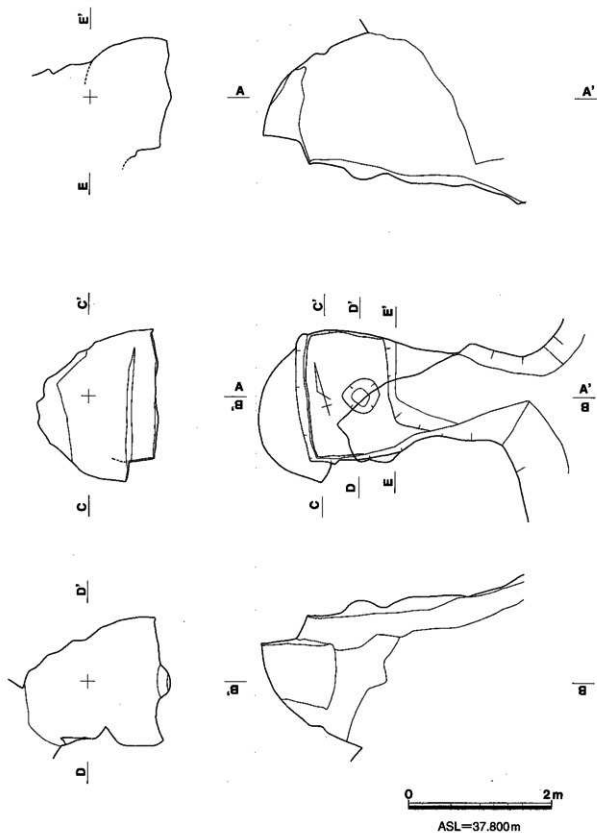
第10图 京德横穴群 A群1号墓实测图



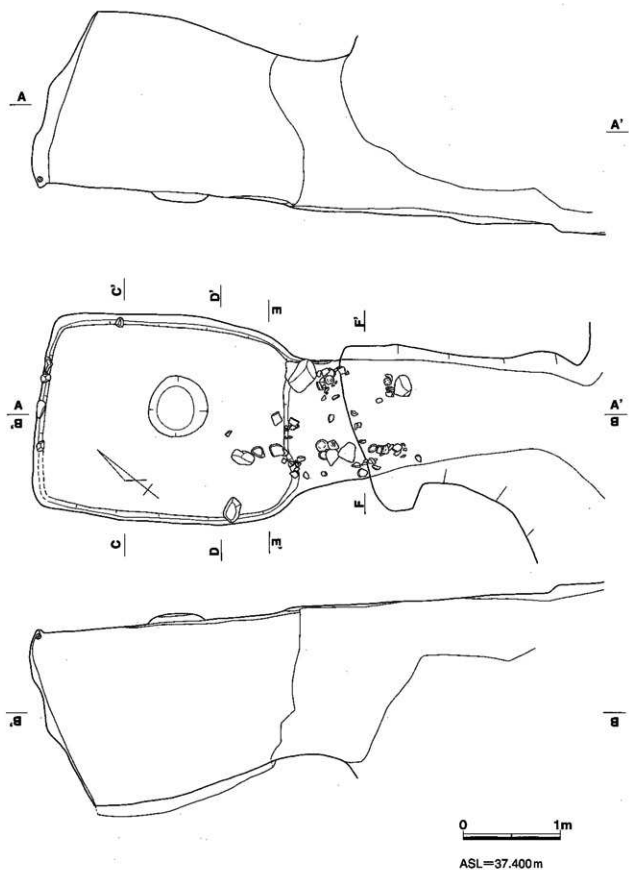
第11图 京德横穴群 B群1号墓实测图



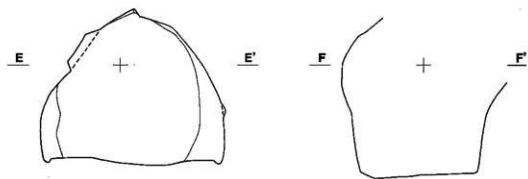
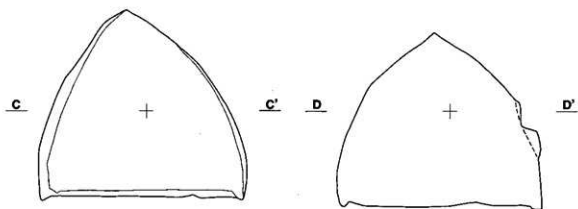
第12图 京徳横穴群 B群2~4号墓前域実測図



第13图 京德横穴群 B群2号墓实测图



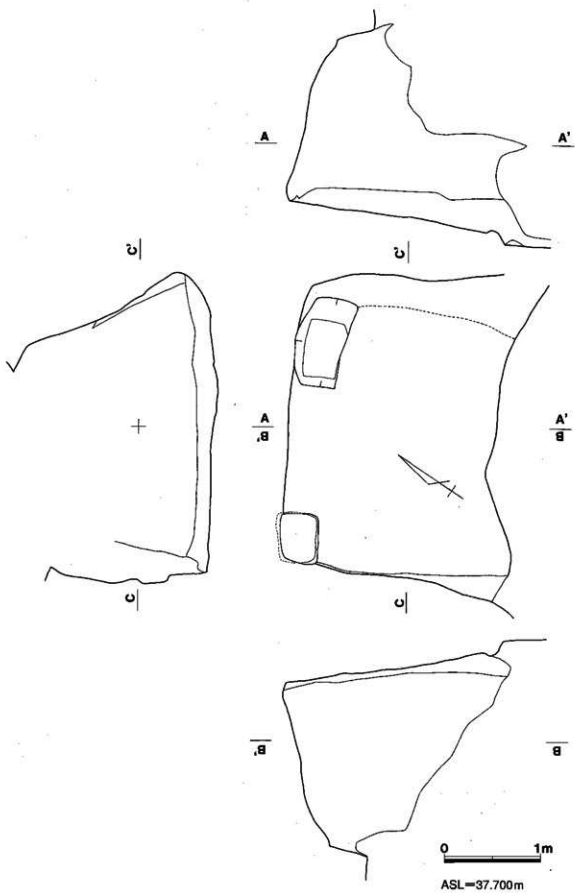
第14图 京德横穴群 B群3号墓实测图(1)



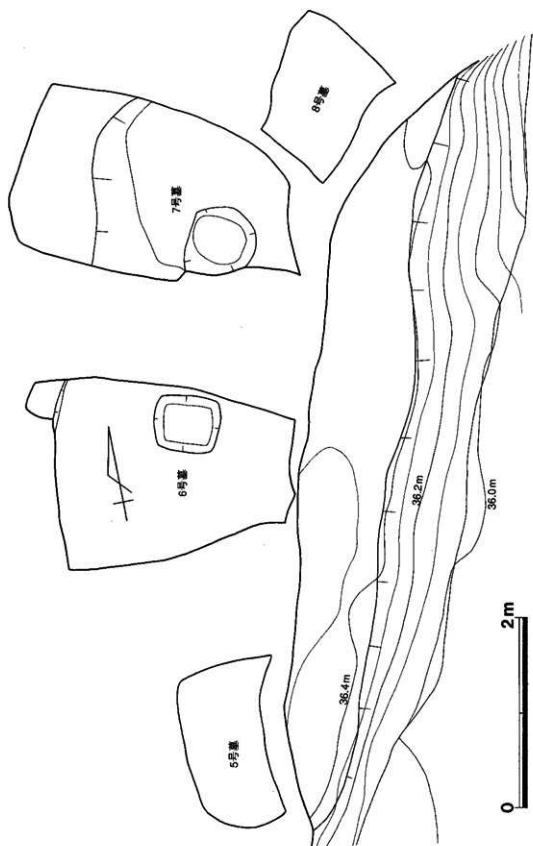
0 1m

ASL=37.400m

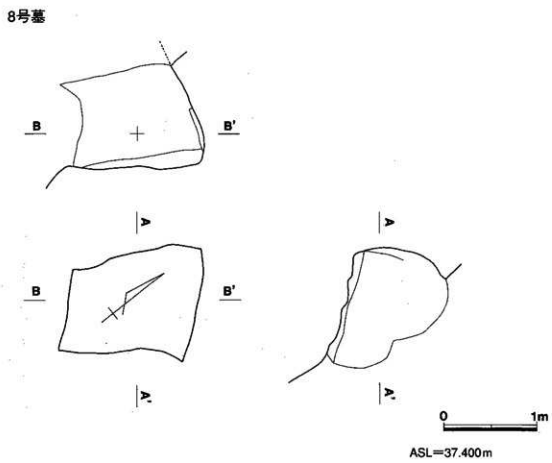
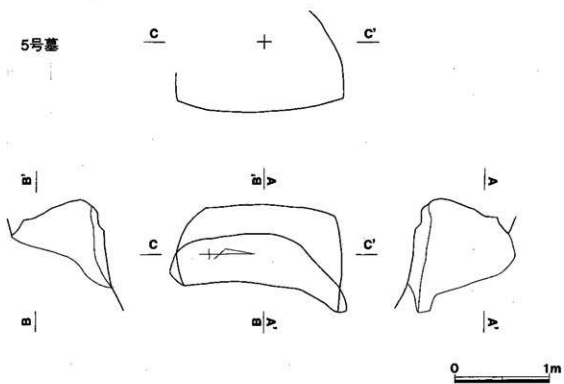
第15图 京德横穴群 B群3号墓实测图(2)



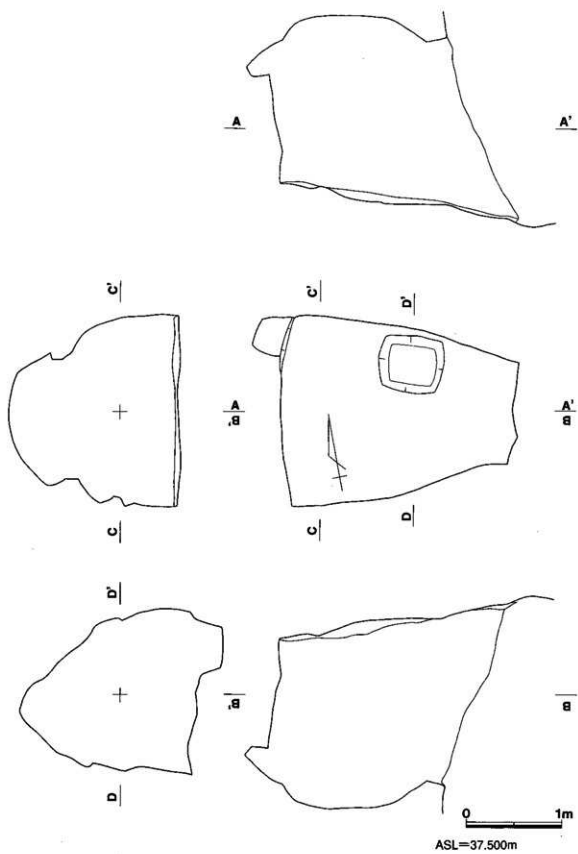
第16图 京德横穴群 B群4号墓实测图



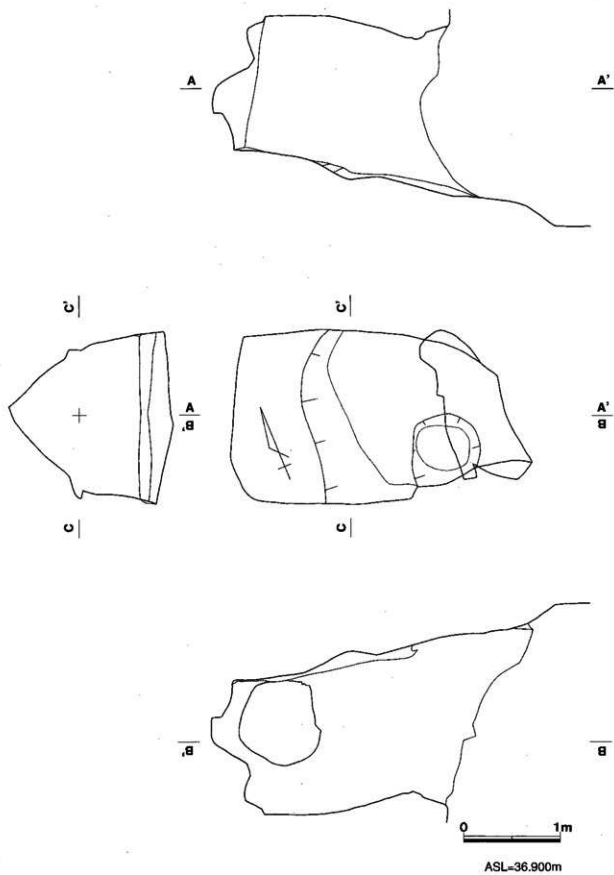
第17图 京德横穴群 B群5~8号墓墓前域实测图



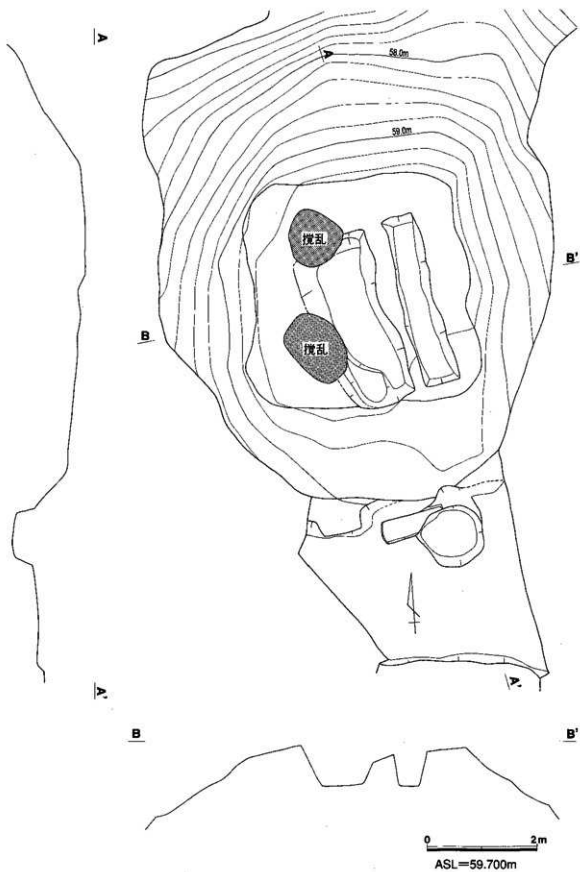
第18图 京德横穴群 B群5·8号墓实测图



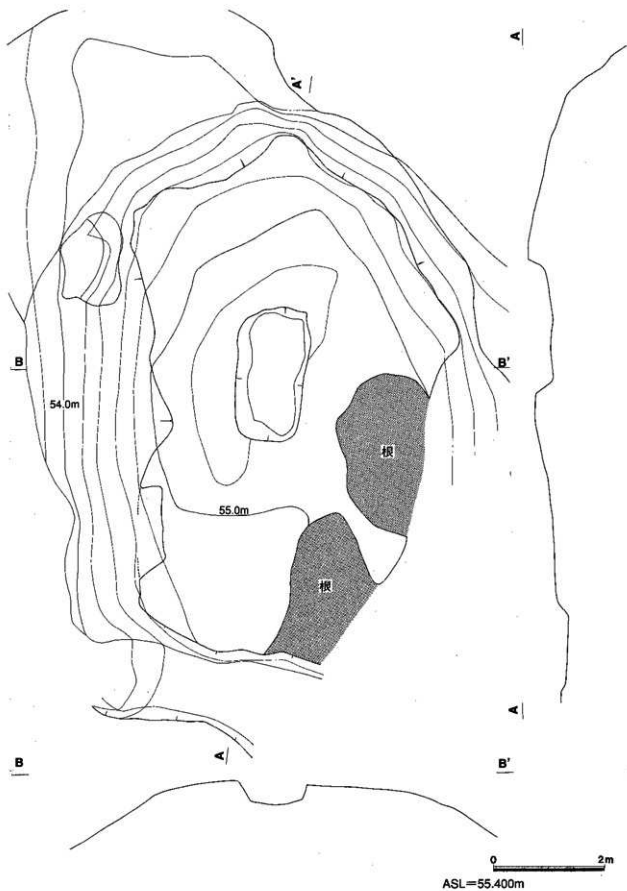
第19图 京德横穴群 B群6号墓实测图



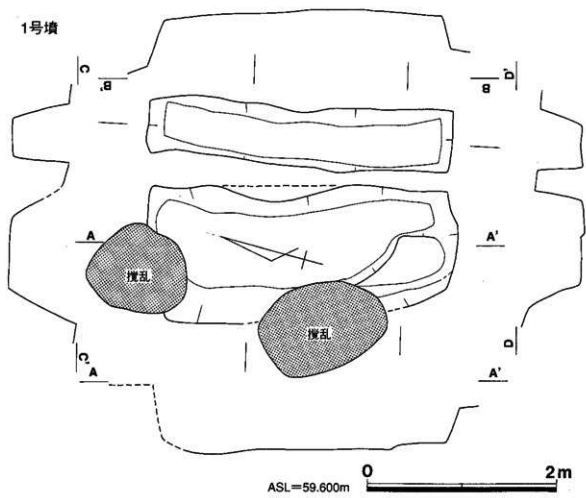
第20图 京德横穴群 B群7号墓实测图



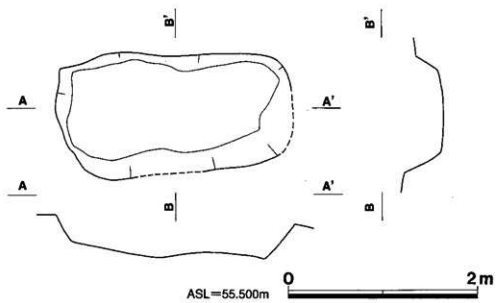
第21图 茶屋辻古墳群 1号墳全体図



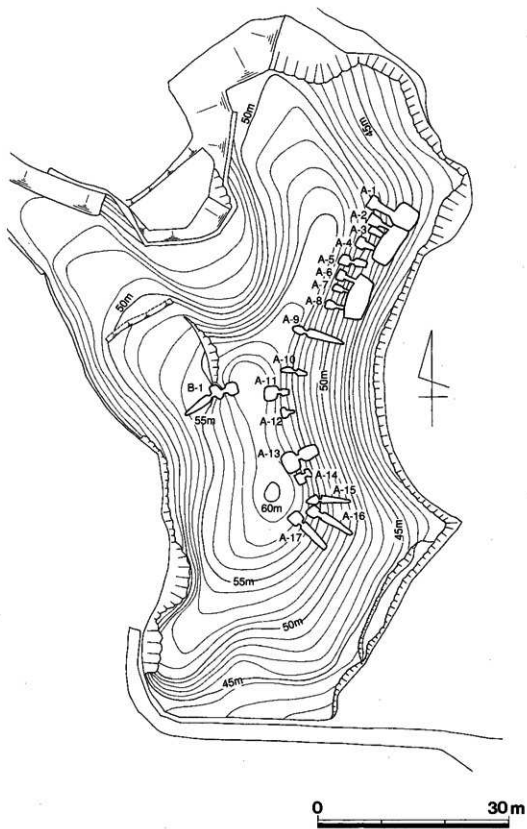
第22图 茶屋辻古墳群 2号墳全体图



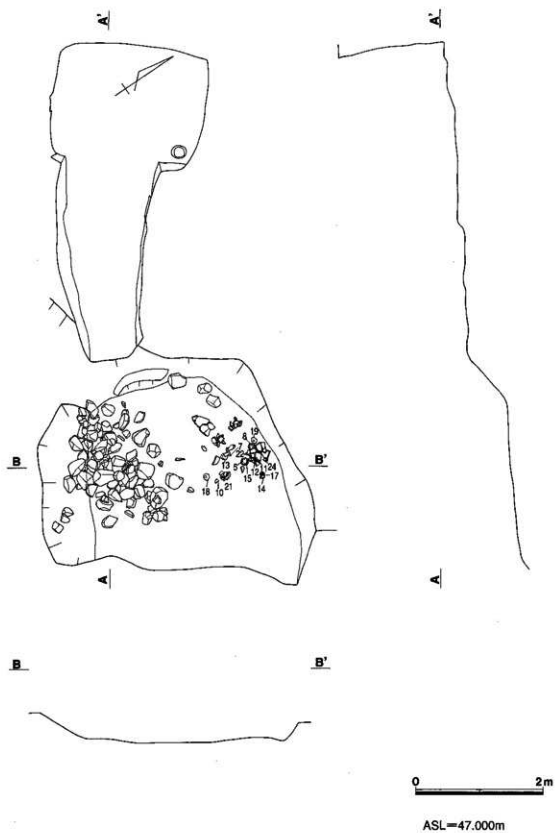
2号墳



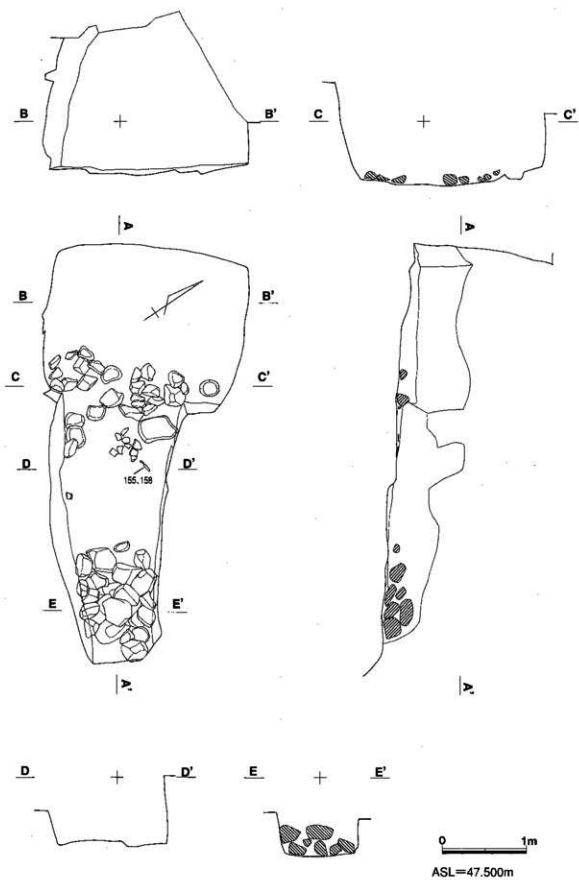
第23图 茶屋辻古墳群 1・2号墳 主体部実測図



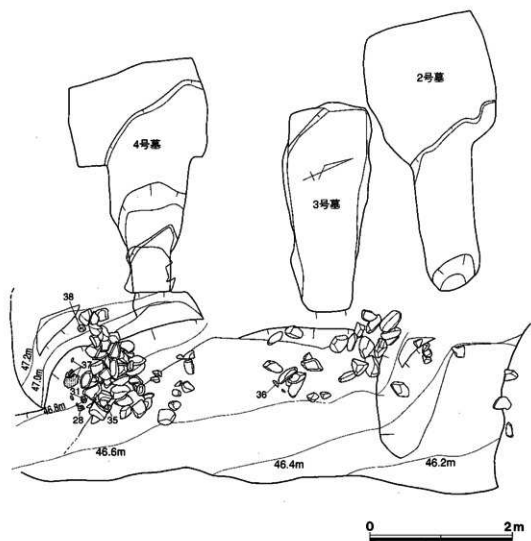
第24图 茶屋辻横穴群配置图



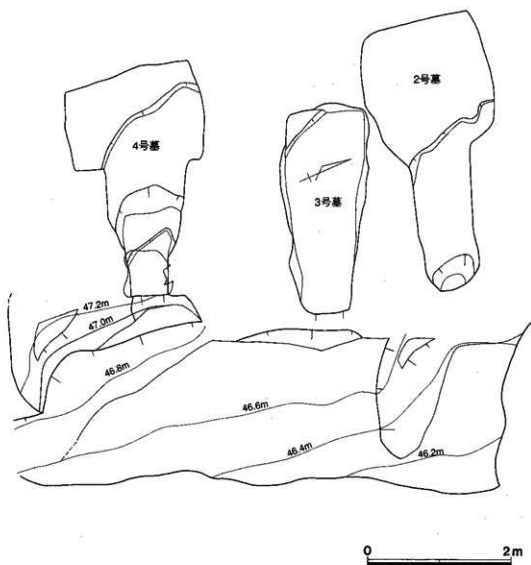
第25图 茶屋辻横穴群 A群1号墓基前域实测图



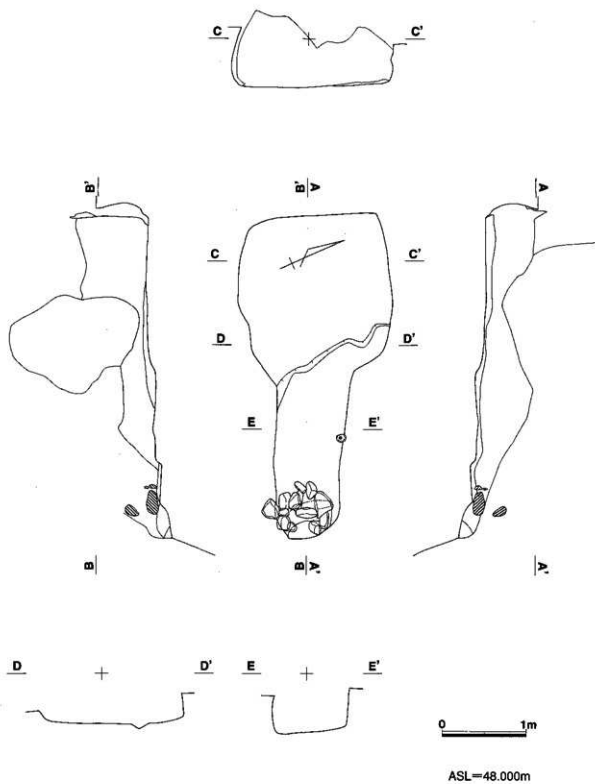
第26图 茶屋过横穴群 A群1号墓实测图



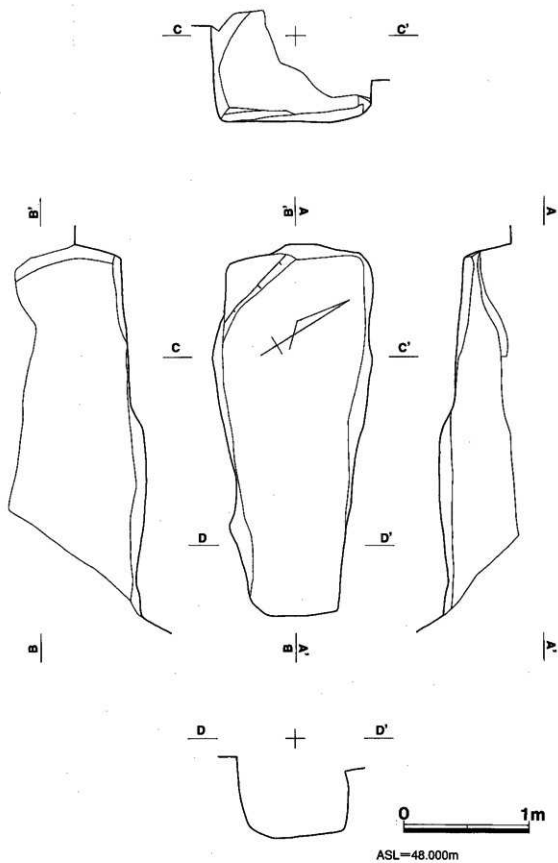
第27图 茶屋辻横穴群 A群2·3·4号墓墓前域遺物出土状態実測図



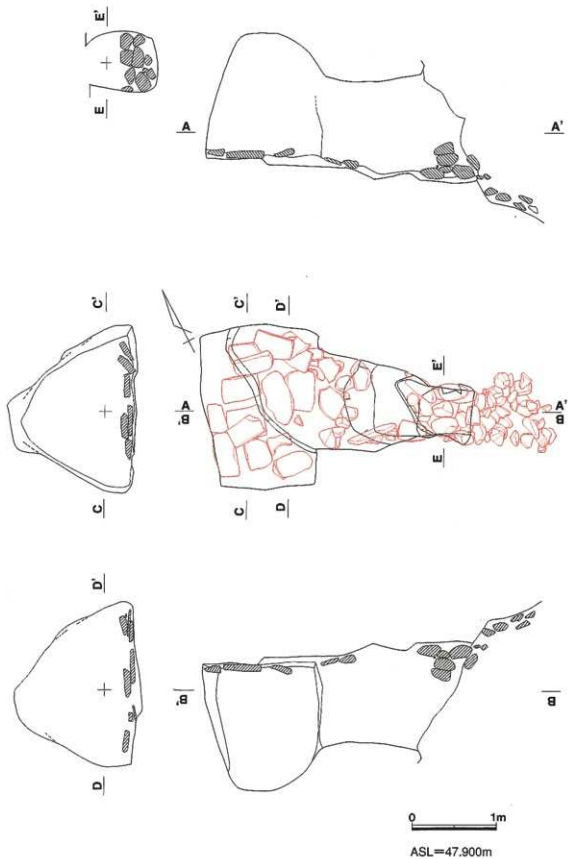
第28图 茶屋过横穴群 A群2·3·4号墓墓前域矢测图



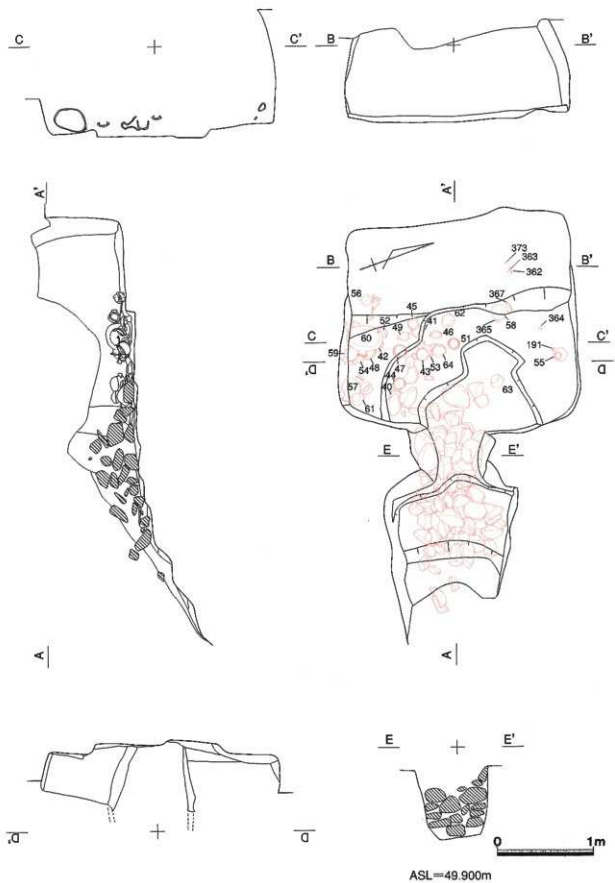
第29图 茶屋辻横穴群 A群2号墓実測图



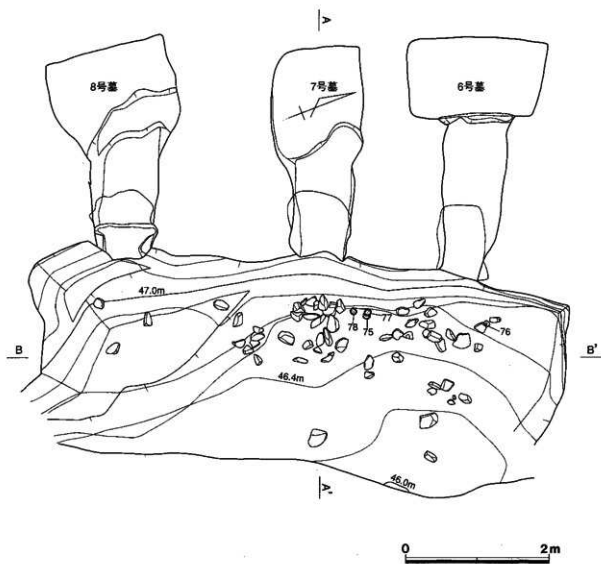
第30图 茶屋过横穴群 A群3号墓实测图



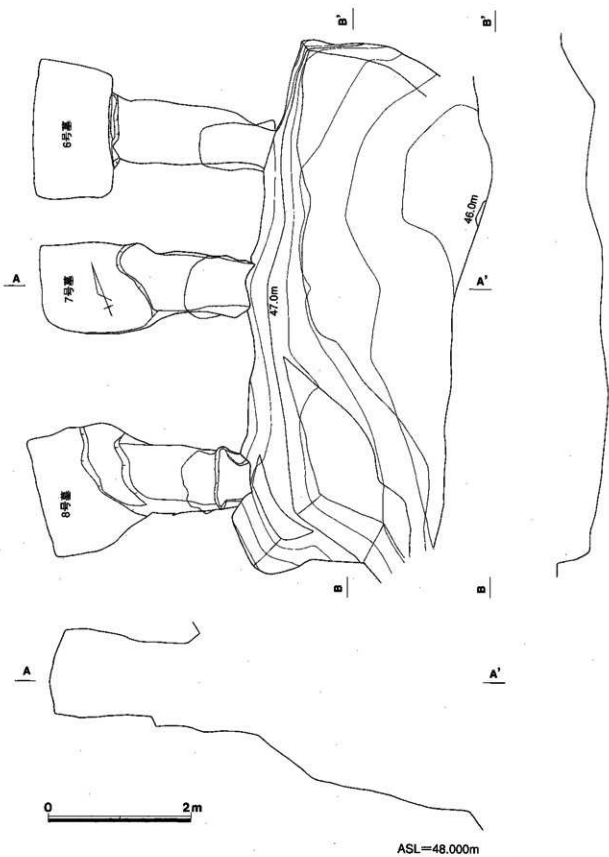
第31图 茶屋辻横穴群 A群4号墓実測图



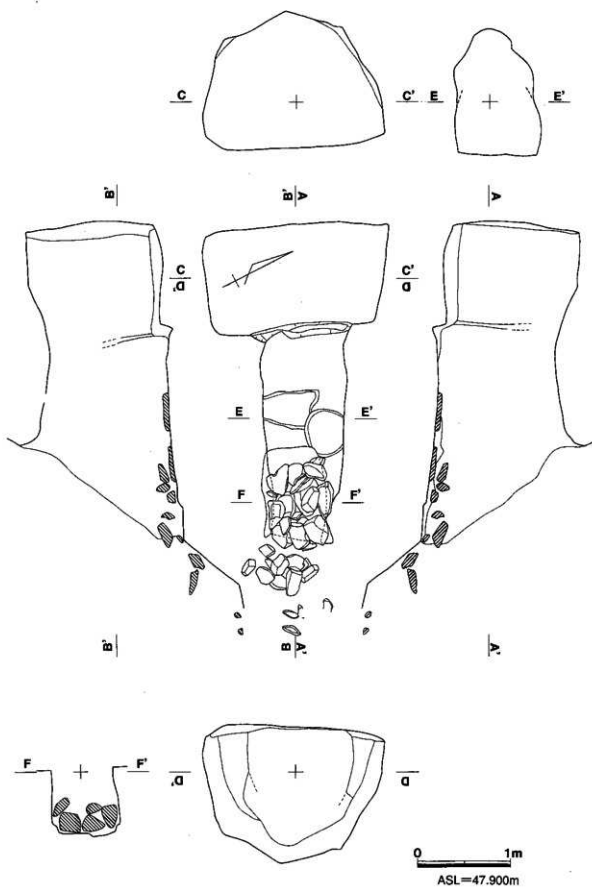
第32图 茶屋过横穴群 A群5号墓实测图



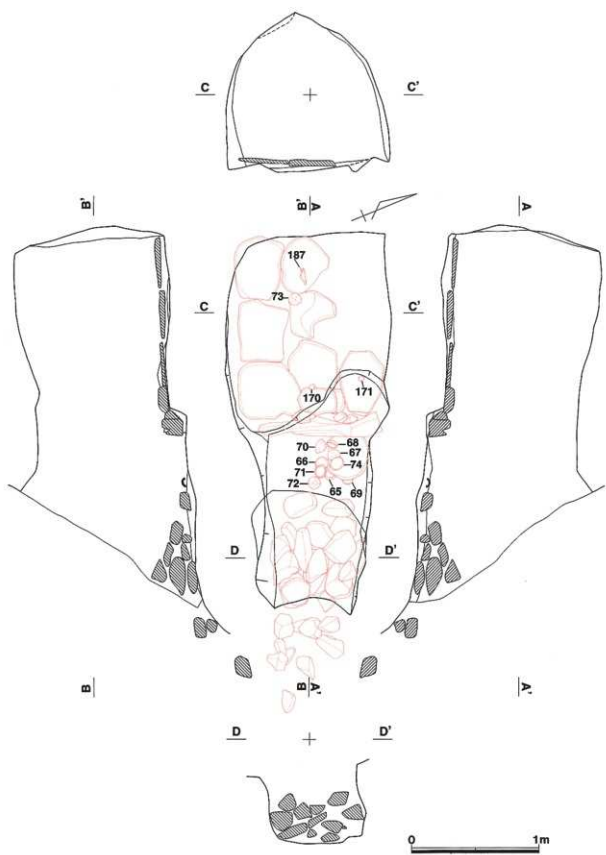
第33图 茶屋辻横穴群 A群6·7·8号墓墓前域遗物出土状态实测图



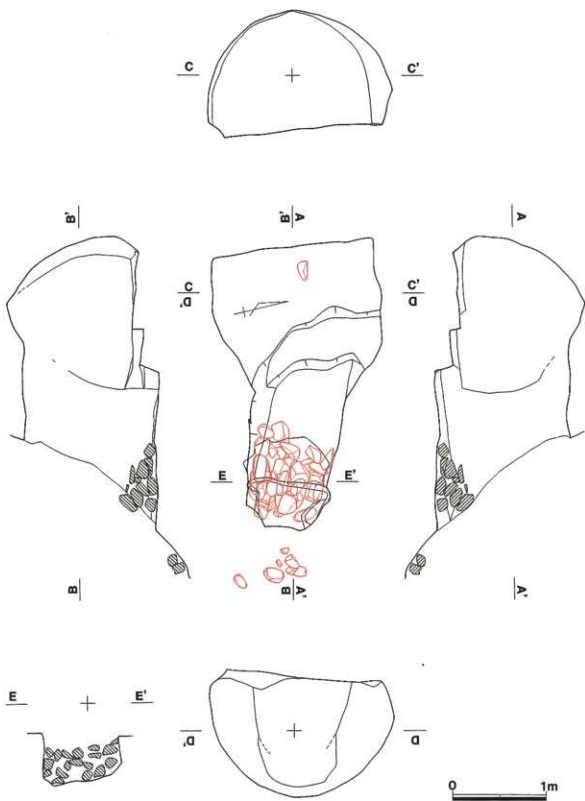
第34图 茶屋过横穴群 A群6·7·8号墓墓前域实测图



第35图 茶屋辻横穴群 A群6号墓実測图

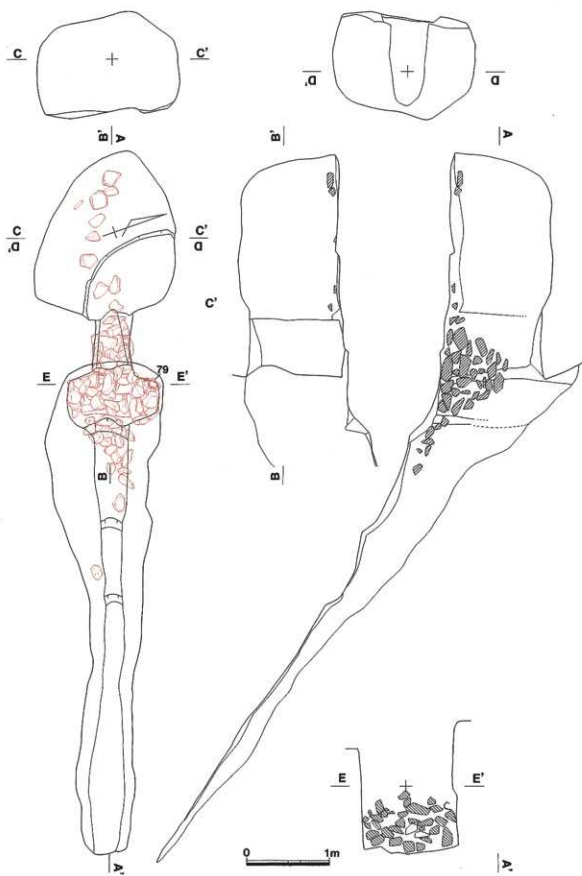


第36图 茶屋过横穴群 A群7号墨实测图

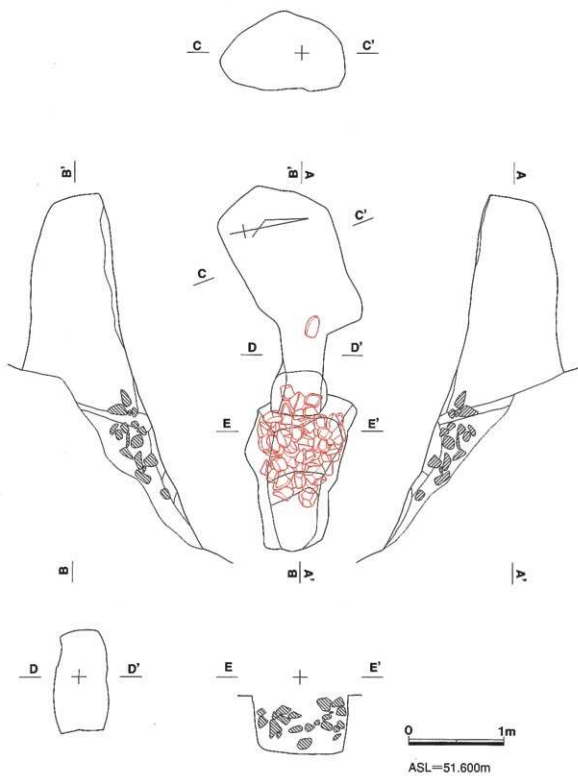


ASL=48.100m

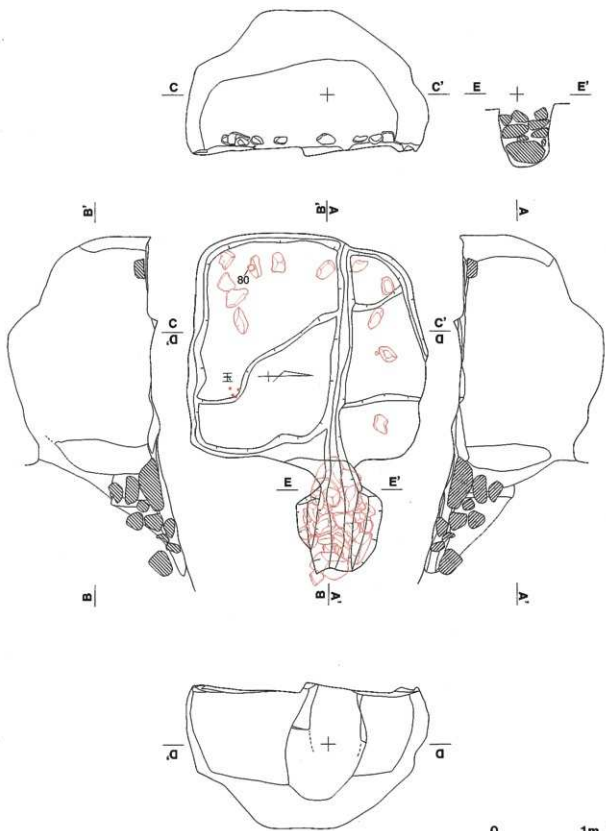
第37图 茶屋辻横穴群 A群B号墓实测图



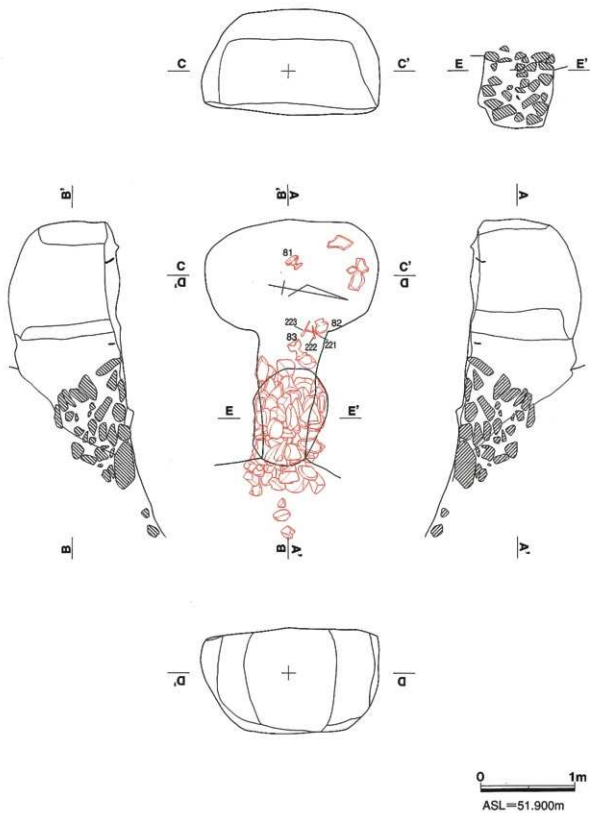
第38图 茶屋过横穴群 A群9号墓实例图



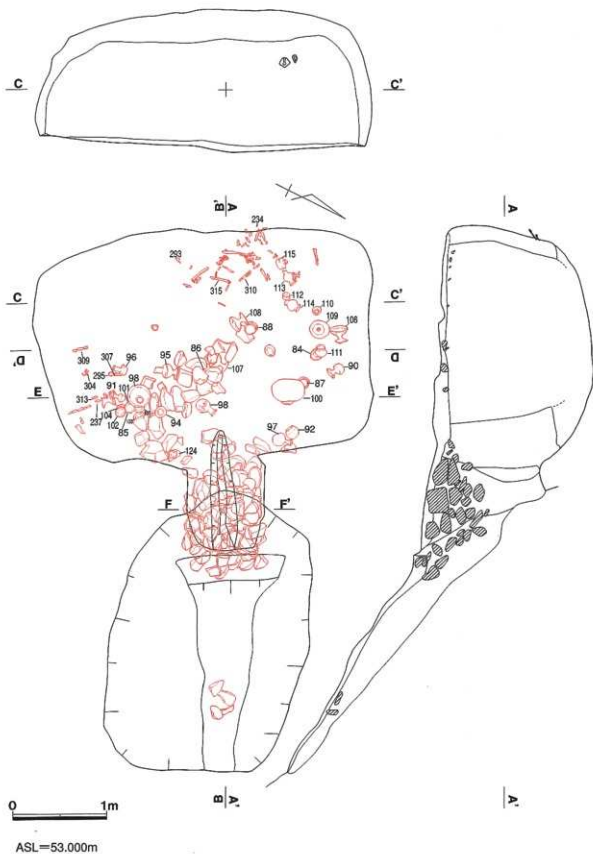
第39图 茶屋辻横穴群 A群10号墓实测图



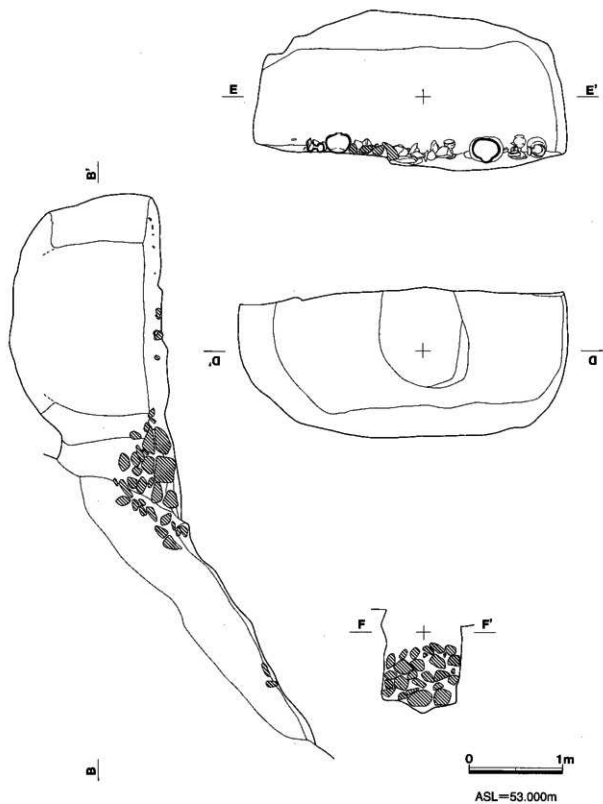
第40图 茶屋过横穴群 A群11号墓穴测图



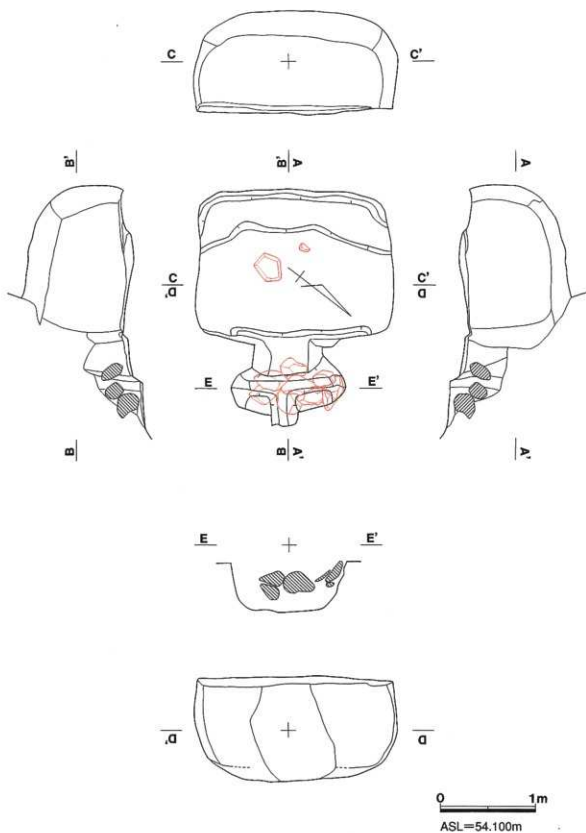
第41图 茶屋过横穴群 A群12号墓类测图



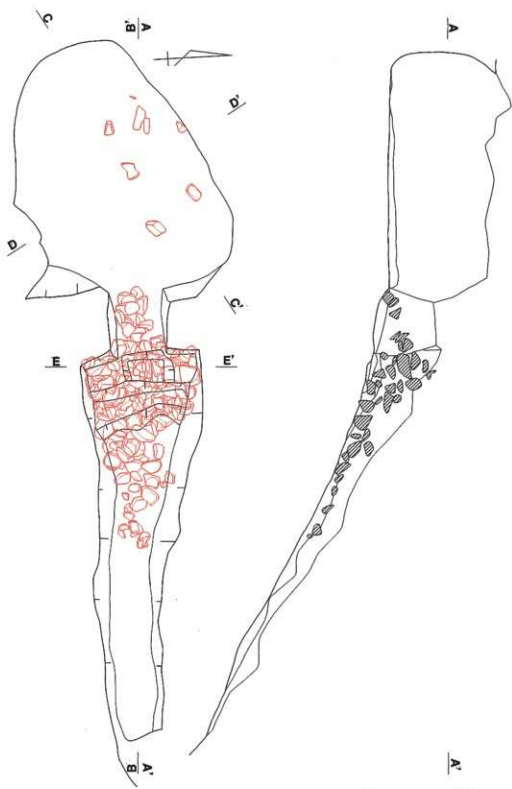
第42图 茶屋过横穴群 A群13号墓实测图(1)



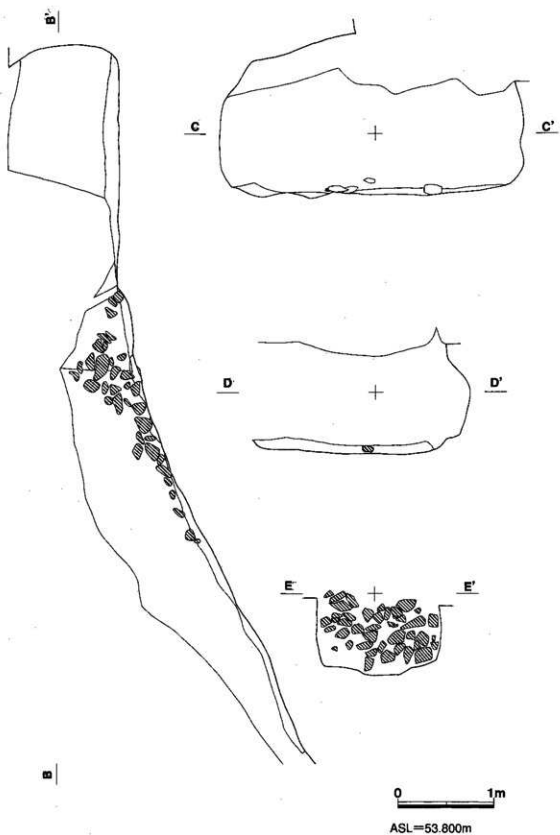
第43图 茶屋辻横穴群 A群13号墓実測图(2)



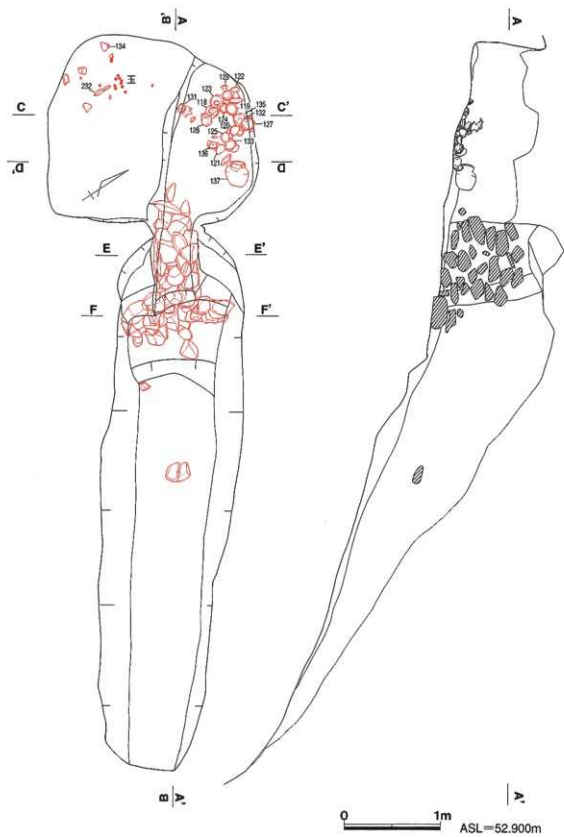
第44图 茶屋辻横穴群 A群14号墓实测图



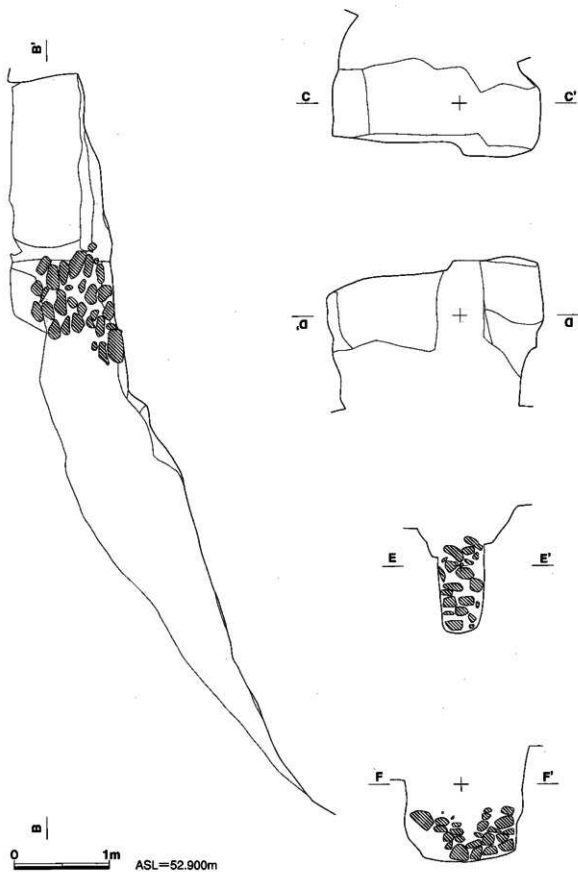
第45图 茶屋辻横穴群 A群15号墓实测图(1)



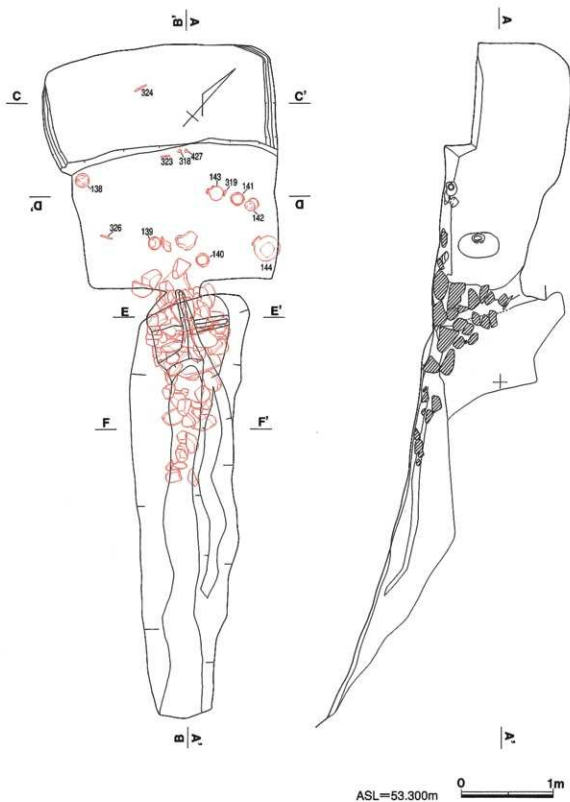
第46图 茶屋辻横穴群 A群15号墓穴测图(2)



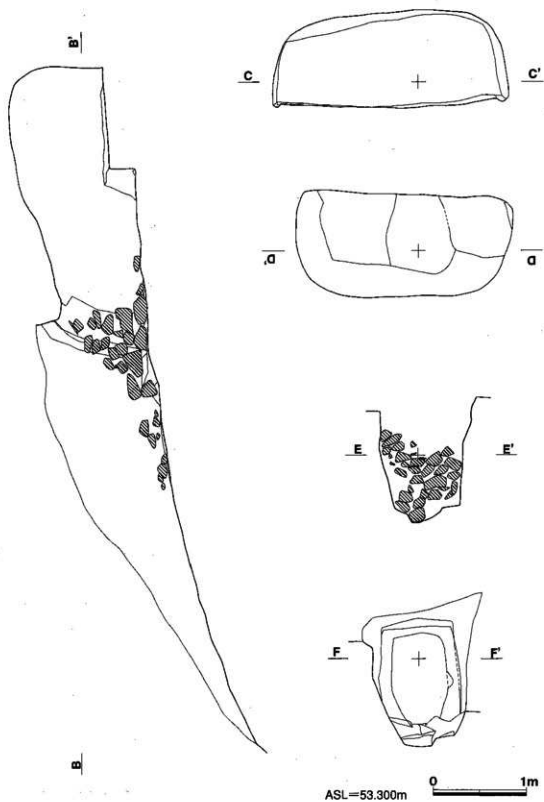
第47图 茶屋辻横穴群 A群16号墓穴测图(1)



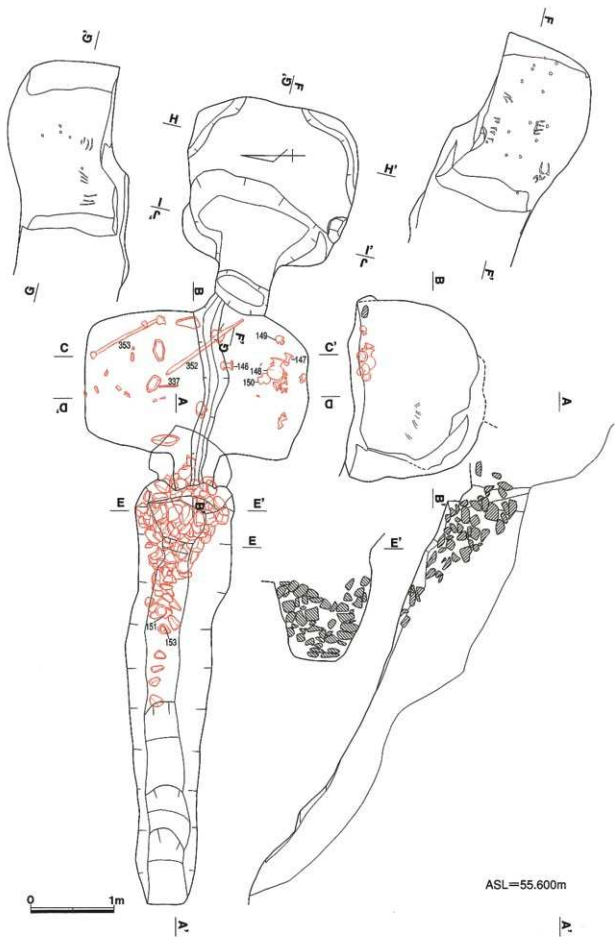
第48图 茶屋过横穴群 A群16号墓实测图(2)



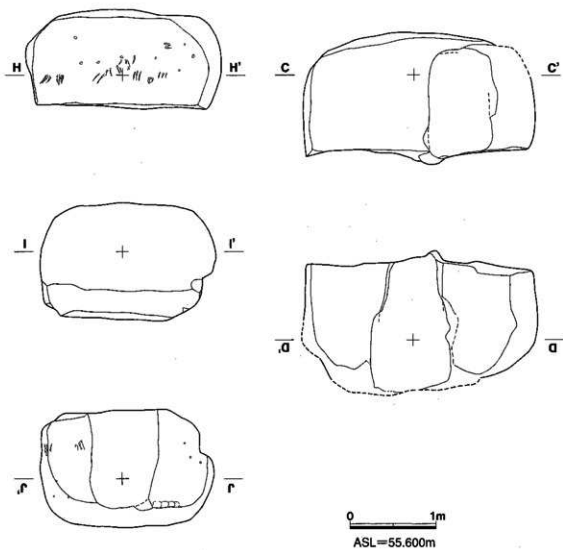
第49图 茶屋辻横穴群 A群17号墓実測图(1)



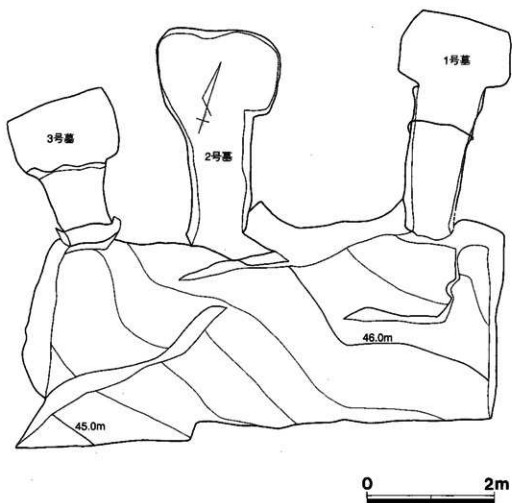
第50图 茶屋过横穴群 A群17号墓夹测图(2)



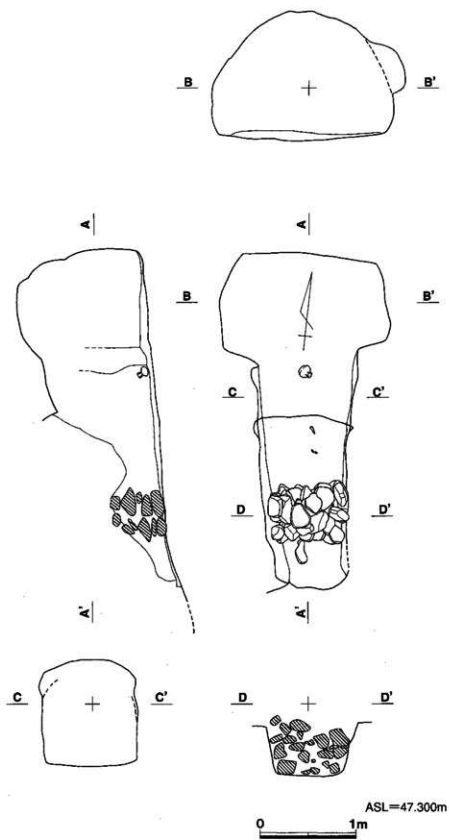
第51图 茶屋辻横穴群 B群1号窟实测图(1)



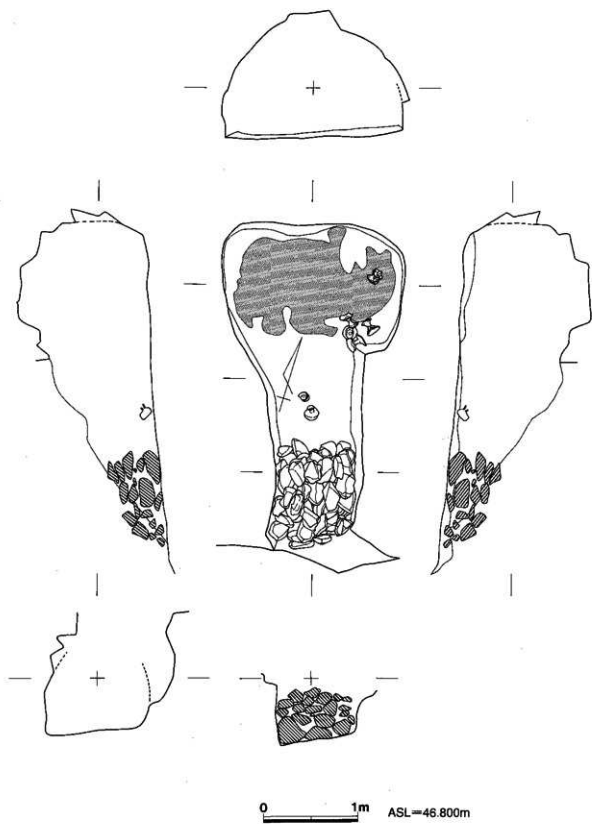
第52图 茶屋辻横穴群 B群1号墓実測图(2)



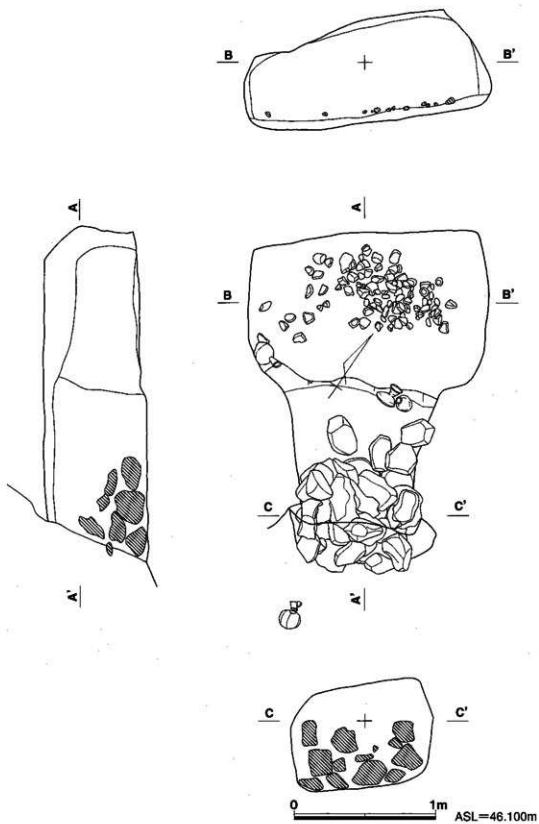
第53図 矢崎横穴群 D群1・2・3号墓墓前域実測図



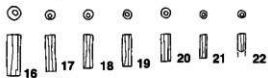
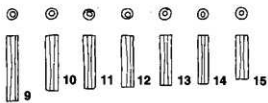
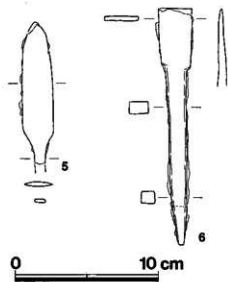
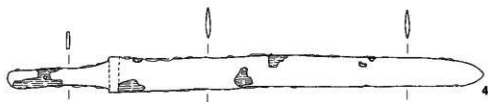
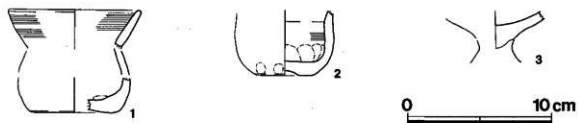
第54图 矢崎横穴群 D群1号墓实测图



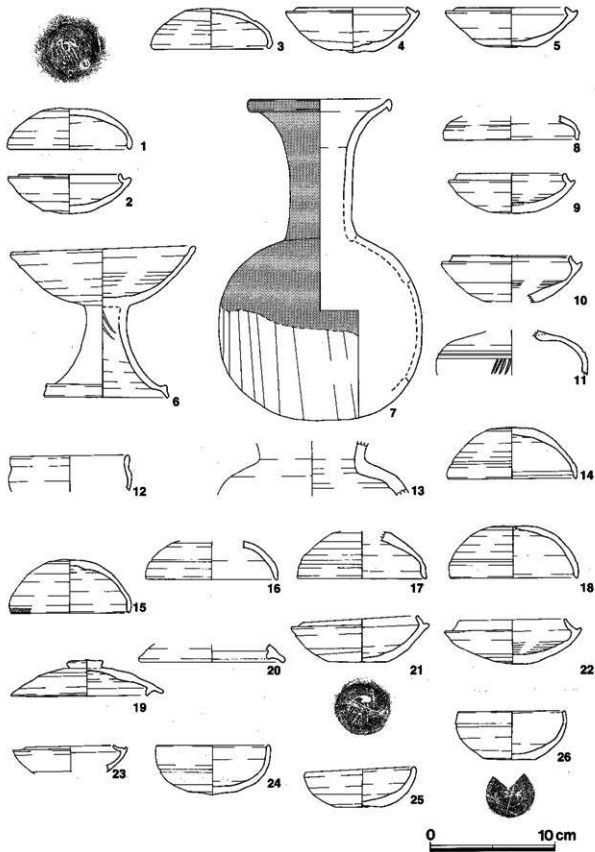
第55图 矢崎横穴群 D群2号墓実測図



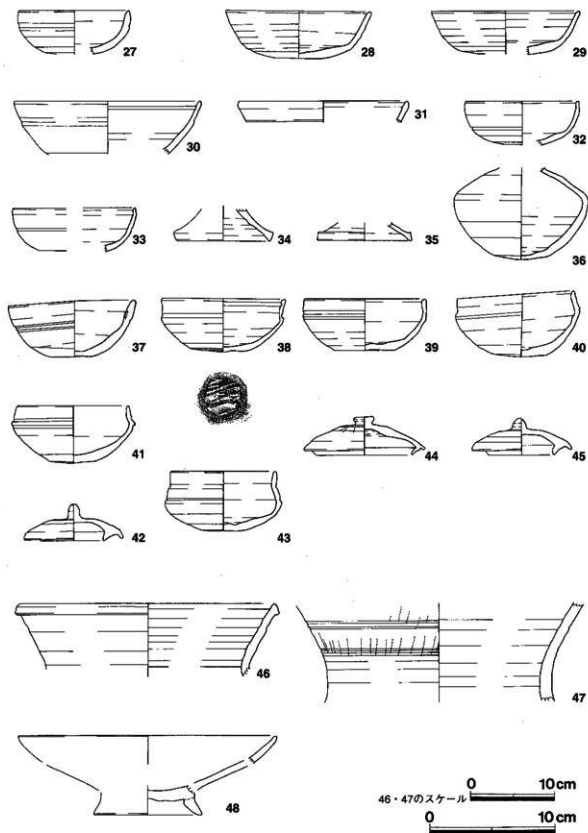
第56図 矢崎横穴群 D群3号墓実測図



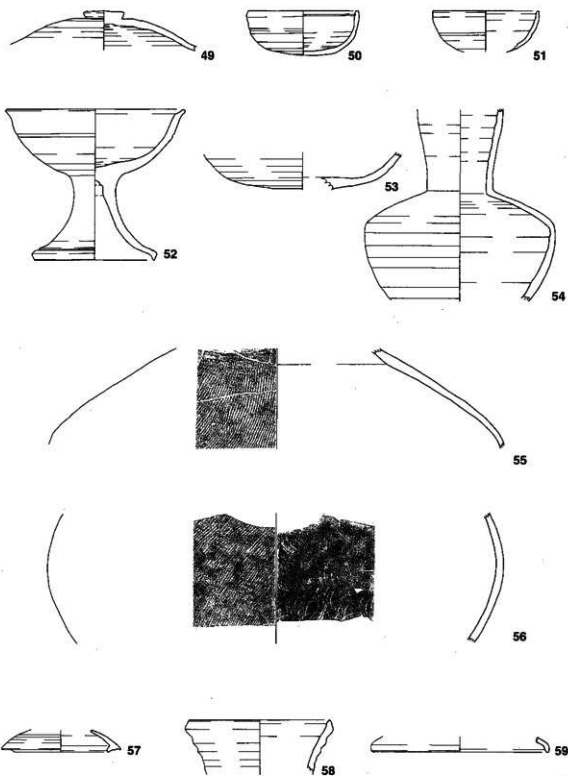
第57図 栗下古墳 出土遺物実測図



第58図 京徳横穴群 出土遺物実測図(1)

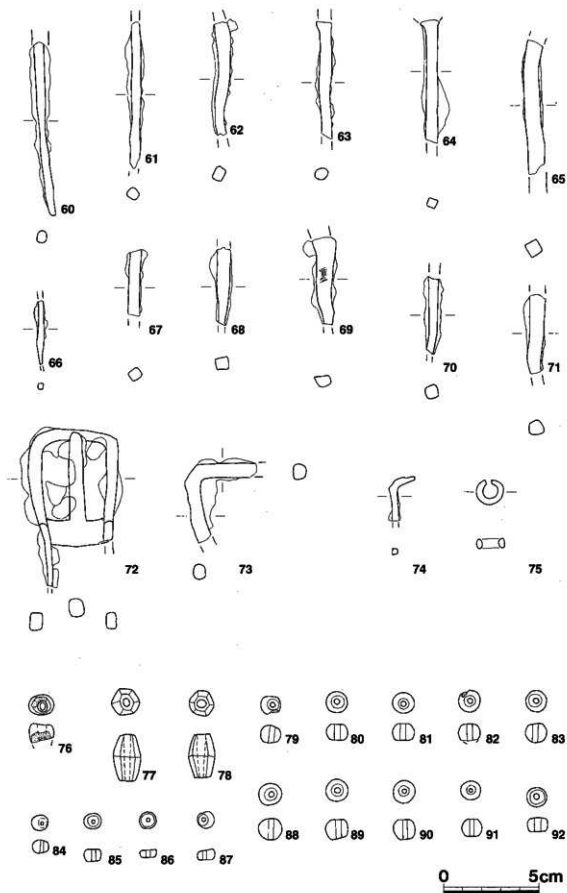


第59図 京徳横穴群 出土遺物実測図(2)

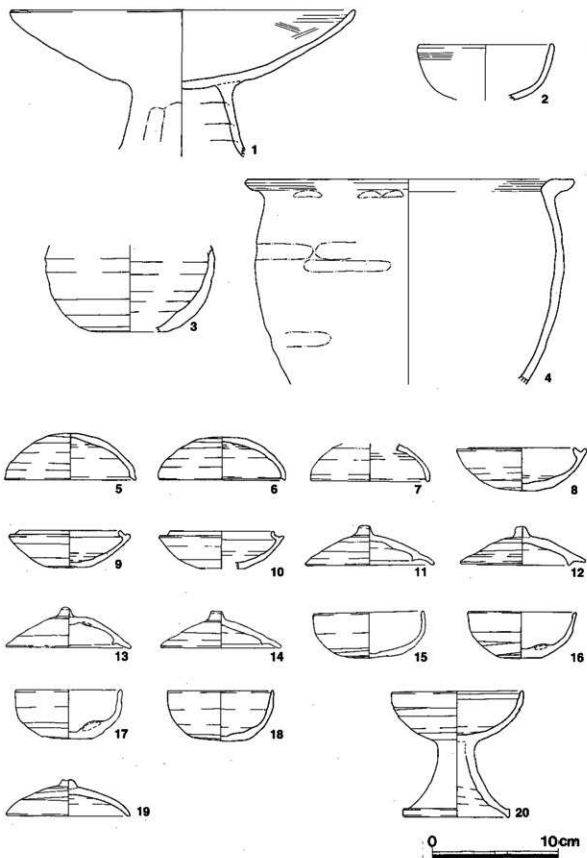


55・56のスケール 0 10 cm 0 10 cm

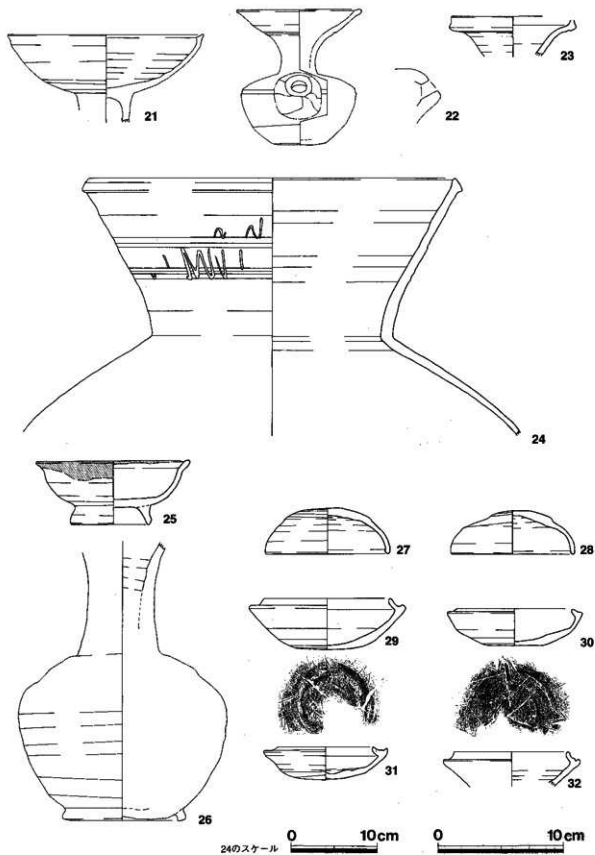
第60図 京徳横穴群 出土遺物実測図(3)



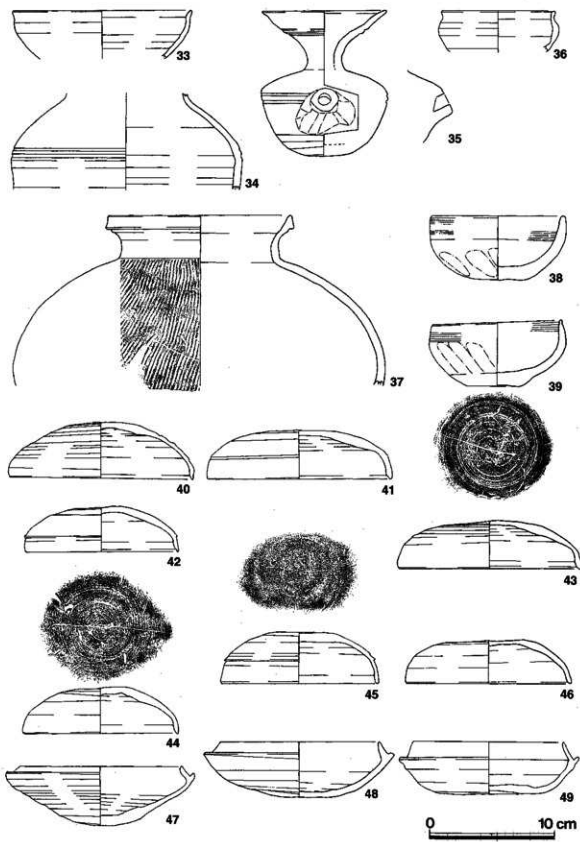
第61图 京德横穴群 出土遺物実測图(4)



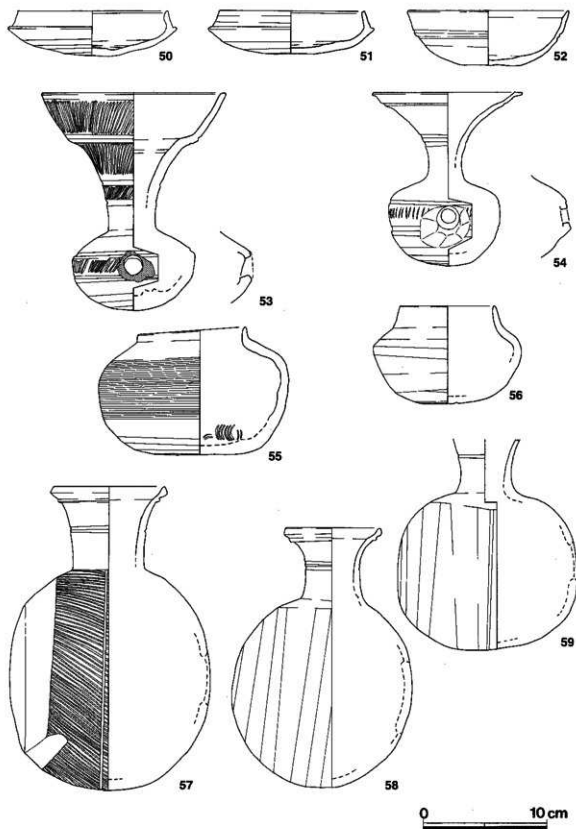
第62图 茶屋过横穴群 出土遗物实测图(1)



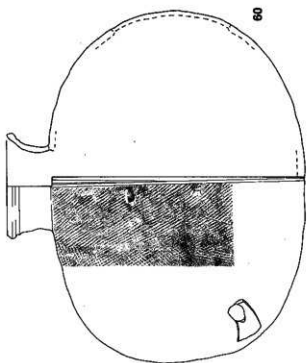
第63図 茶屋辻横穴群 出土遺物実測図(2)



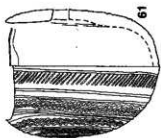
第64图 茶屋过横穴群 出土遗物实测图(3)



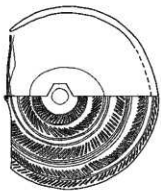
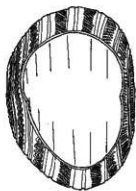
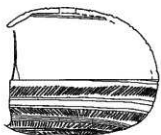
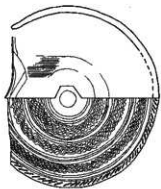
第65图 茶屋辻横穴群 出土遺物実測图(4)



60



61



60のスケール

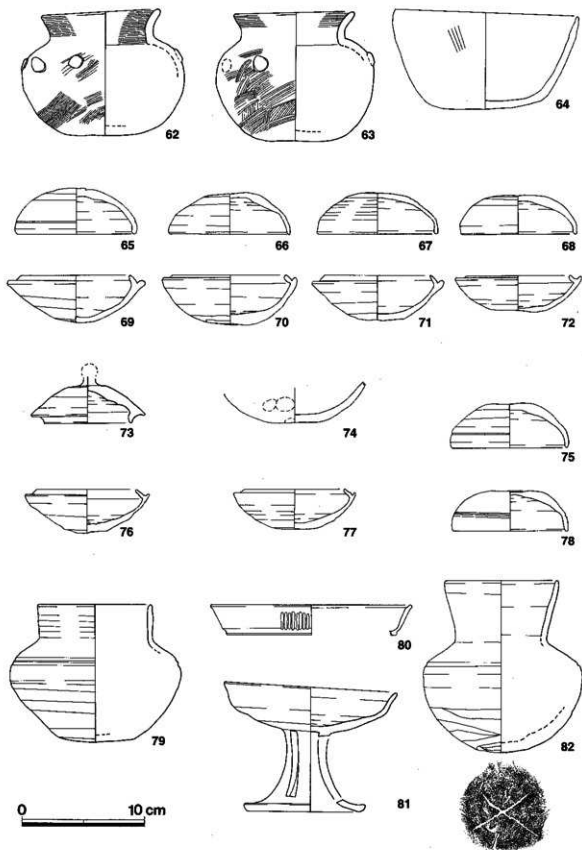
0

10cm

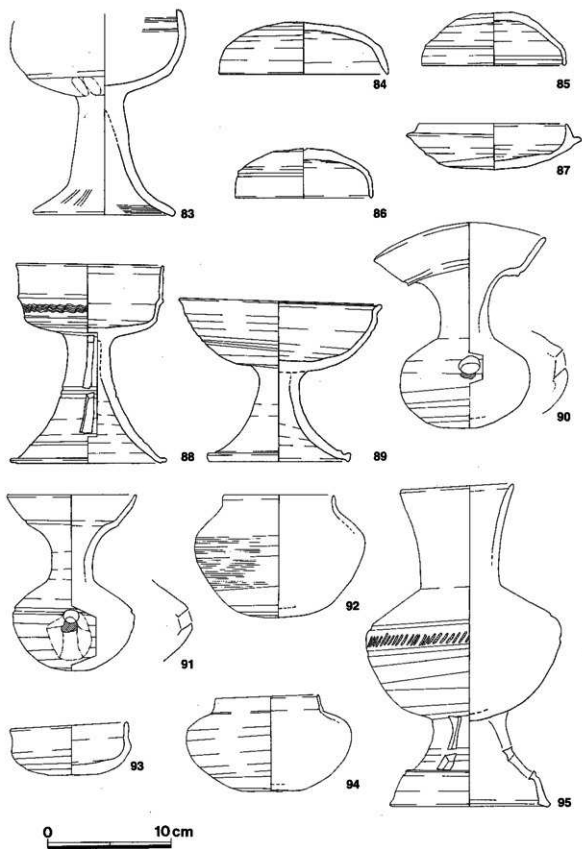
0

10cm

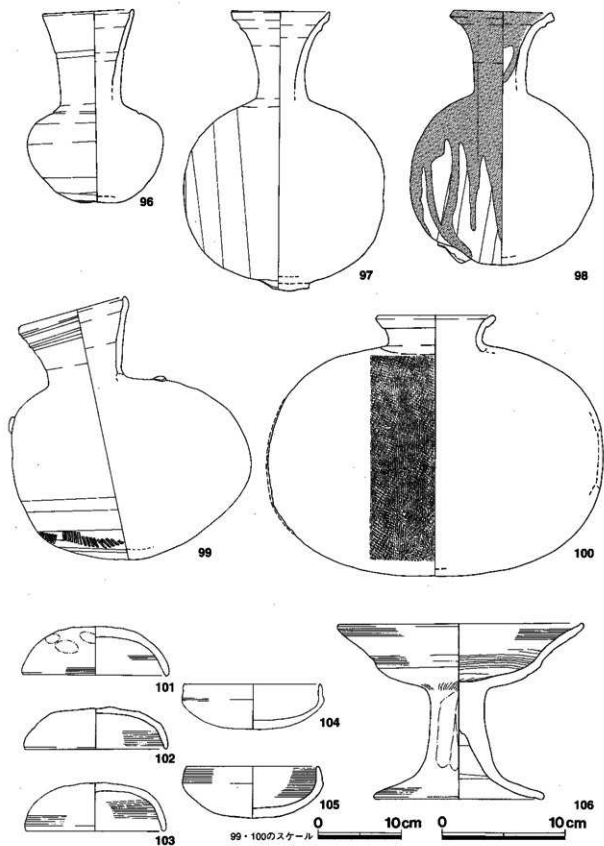
第66図 茶屋辻横穴群 出土遺物実測図(5)



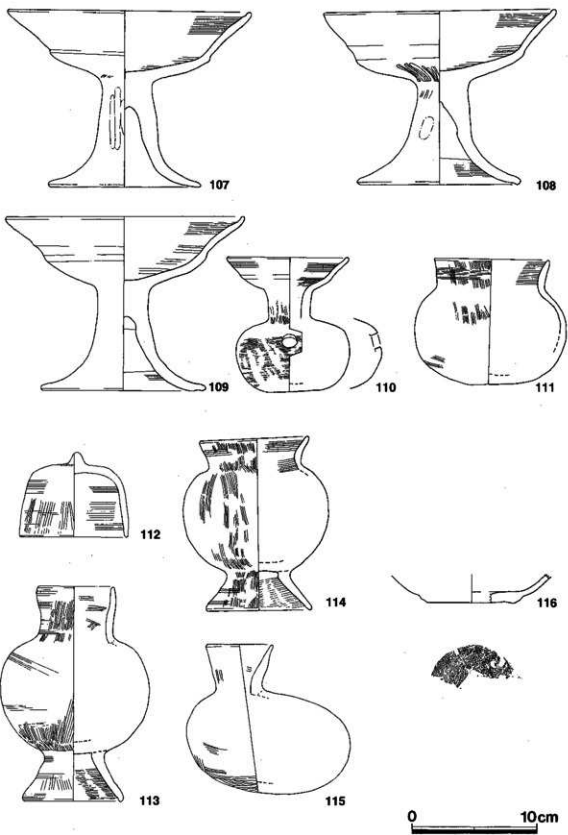
第67图 茶屋辻横穴群 出土遺物実測图(6)



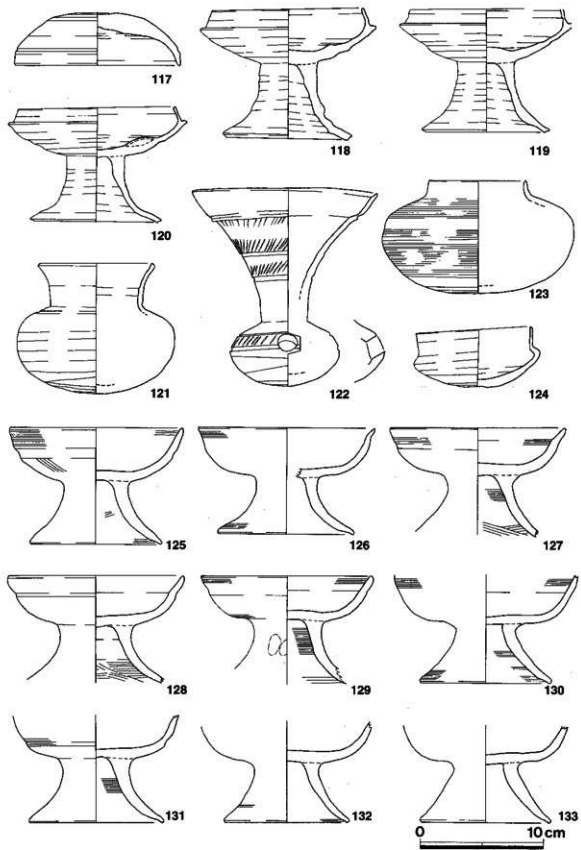
第68图 茶屋辻横穴群 出土遺物実測図(7)



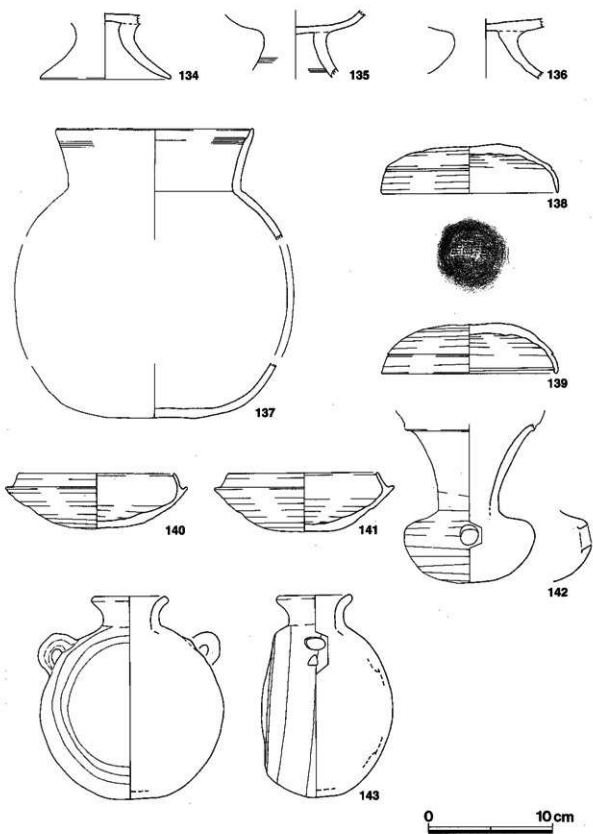
第69図 茶屋辻横穴群 出土遺物実測図(8)



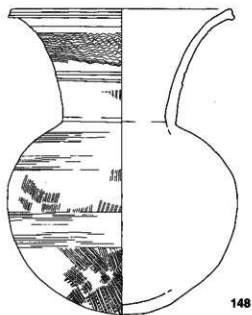
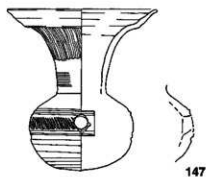
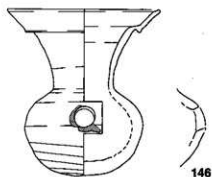
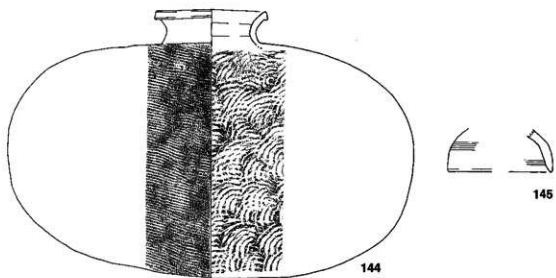
第70图 茶屋辻横穴群 出土遺物実測図(9)



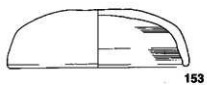
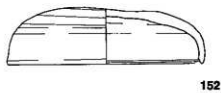
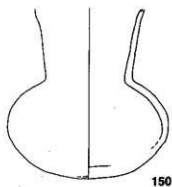
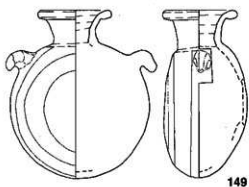
第71图 茶屋辻横穴群 出土遺物実測図(10)



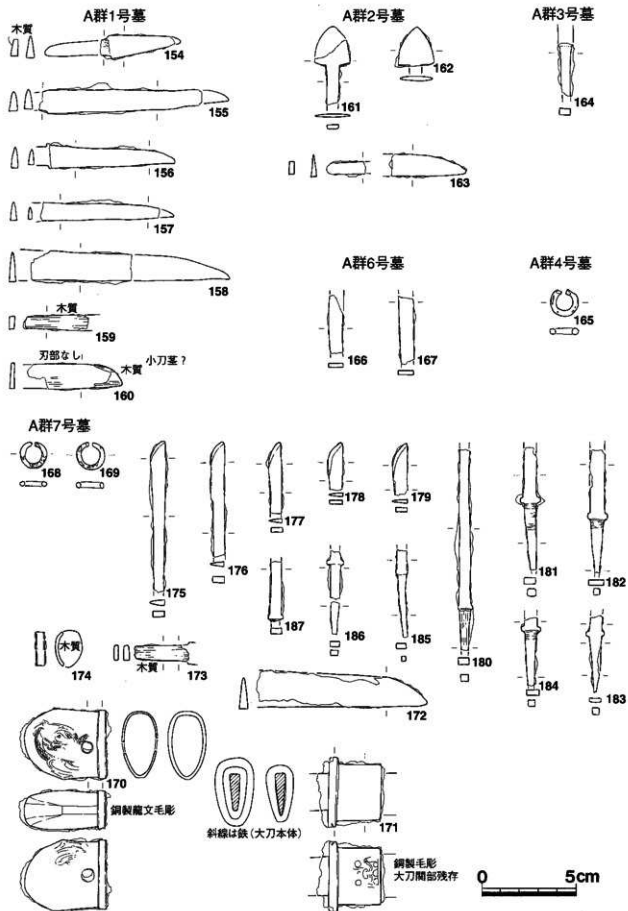
第72图 茶屋辻横穴群 出土遗物实测图(11)



第73図 茶屋辻横穴群 出土遺物実測図(12)

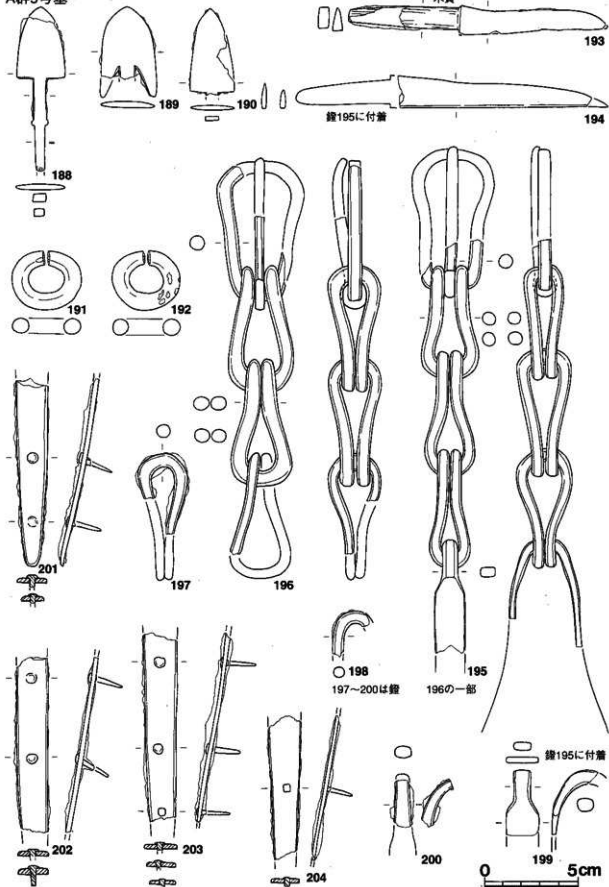


第74图 茶屋辻横穴群 出土遺物実測図(13)

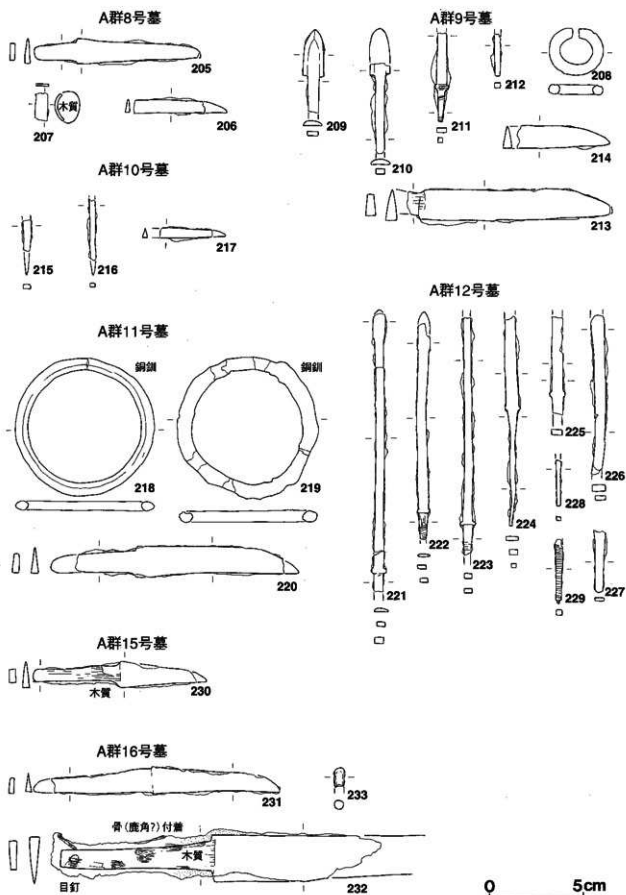


第75図 茶屋辻横穴群 出土遺物実測図(14)

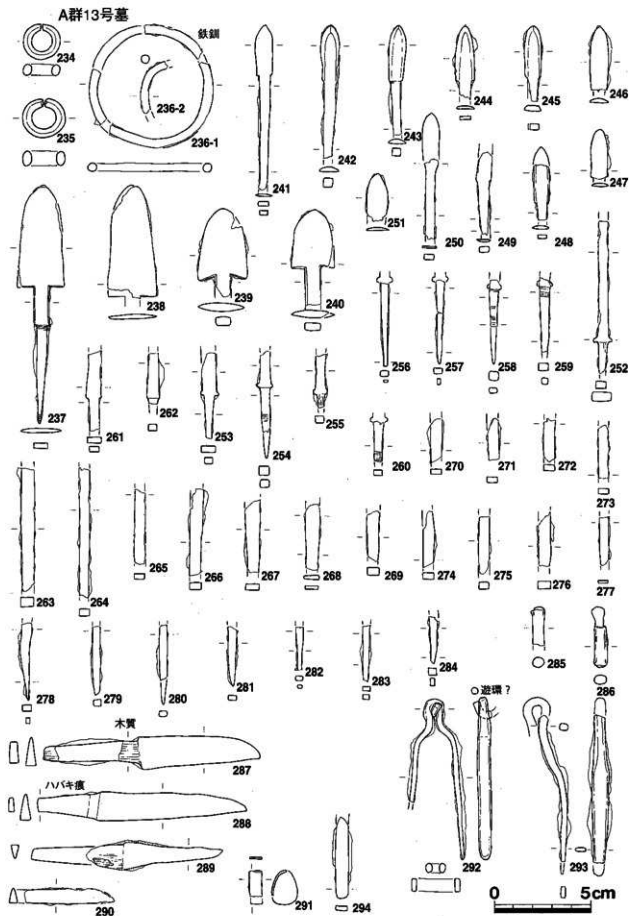
A群5号墓



第76図 茶屋辻横穴群 出土遺物実測図(15)

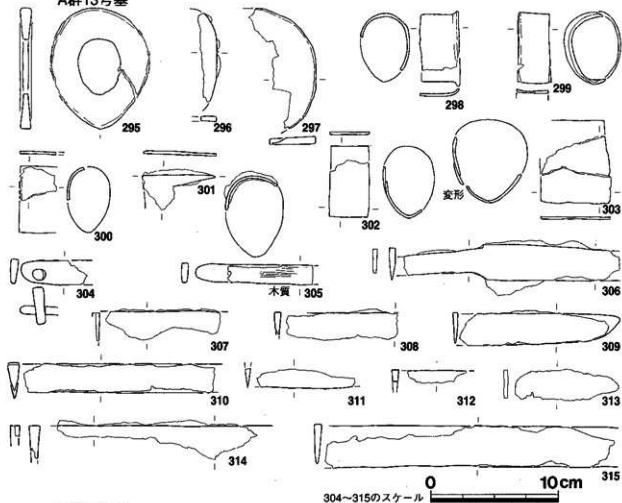


第77图 茶屋辻横穴群 出土遺物実測图(16)

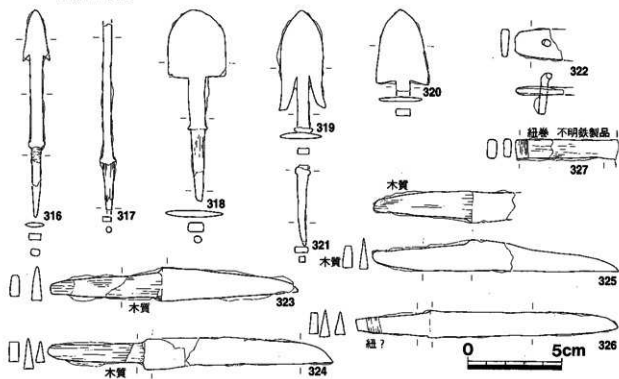


第78图 茶屋辻横穴群 出土遺物実測図(17)

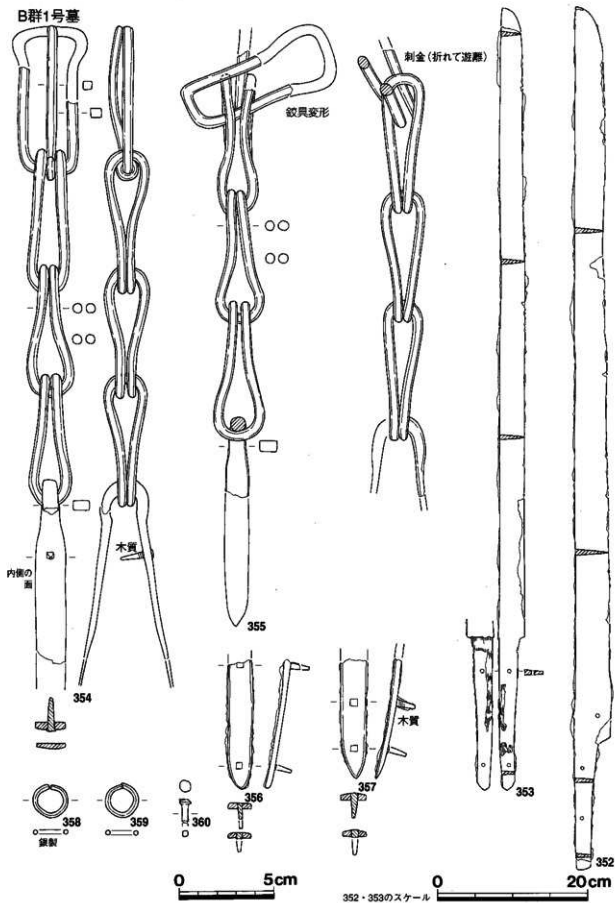
A群13号墓



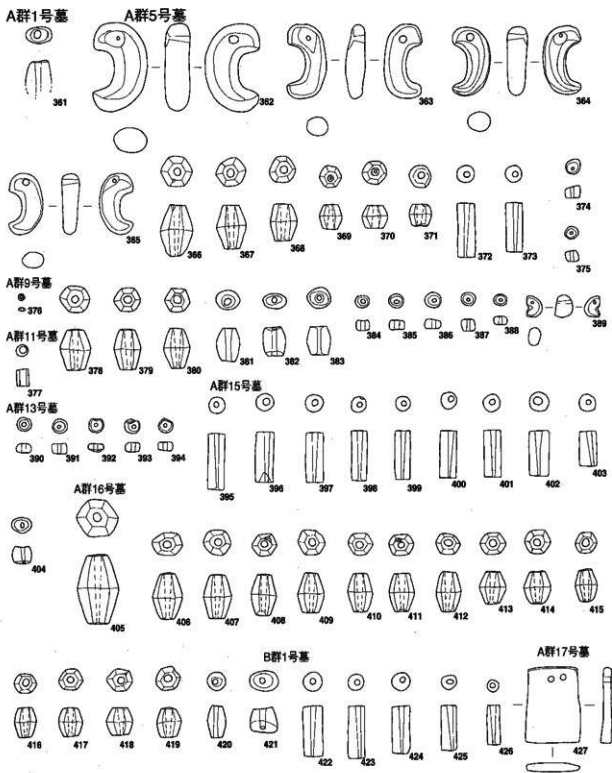
A群17号墓



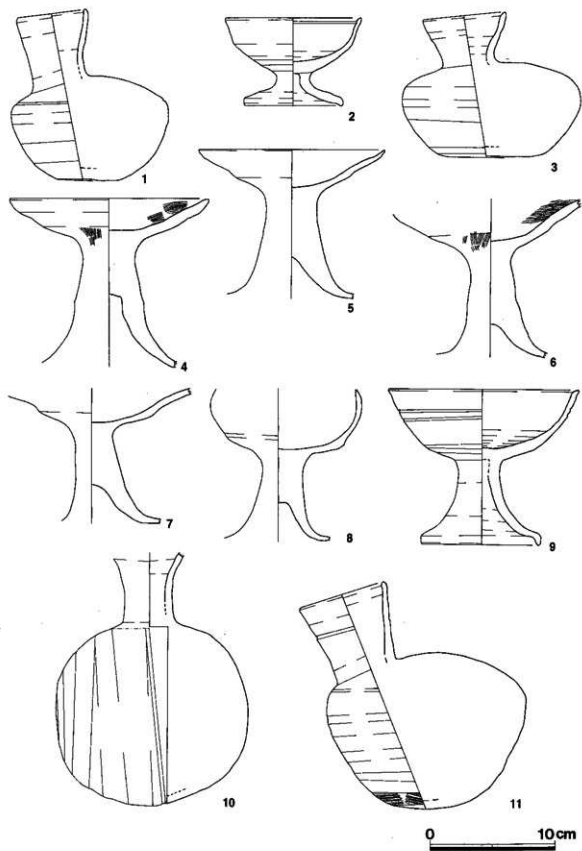
第79図 茶屋辻横穴群 出土遺物実測図(18)



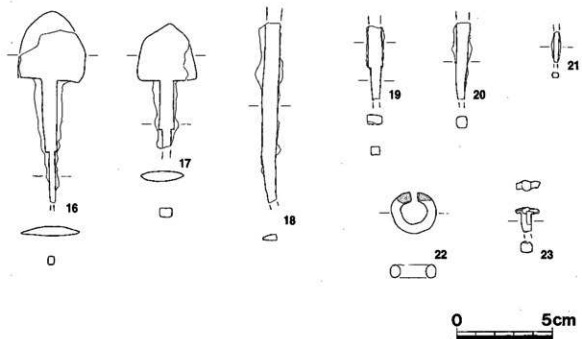
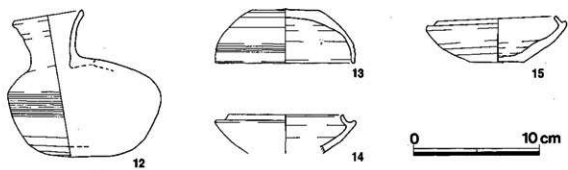
第81図 茶屋辻横穴群 出土遺物実測図(20)



第82图 茶厘过横穴群 出土遗物实测图(21)



第83図 矢崎横穴群 D群出土遺物実測図(1)



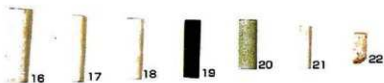
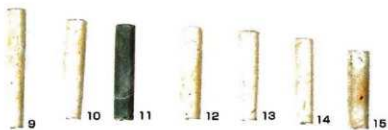
第84図 矢崎横穴群 D群出土遺物実測図(2)

写 真 图 版

図版
1



栗下古墳全景(垂直)



栗下古墳出土玉類

図版
2



京徳横穴群全景(東から)



茶屋辻古墳群全景(垂直)



茶屋辻横穴群A群全景(東から)



茶屋辻横穴群B群全景(西から)

图版
4



茶屋辻横穴群A群7号墓出土主頭柄頭



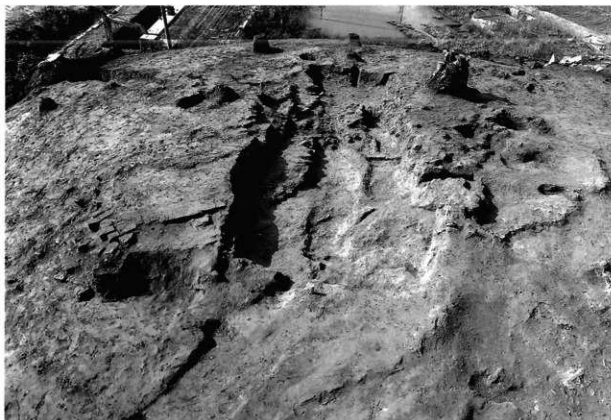
茶屋辻横穴群A群7号墓出土銅



茶屋辻横穴群A群13号墓出土土師器

栗下古墳

図版
5



全景(東から)



SFO1 完掘状態(北から)

図版
6



SF01 (第1主体部)玉類出土状態(東から)



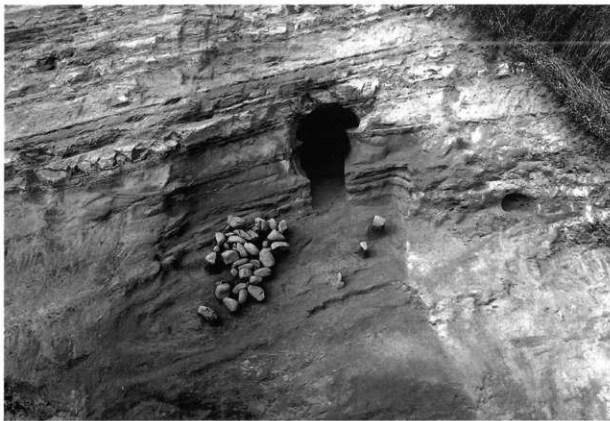
SF01 (第2主体部)鉄剣出土状態(北から)



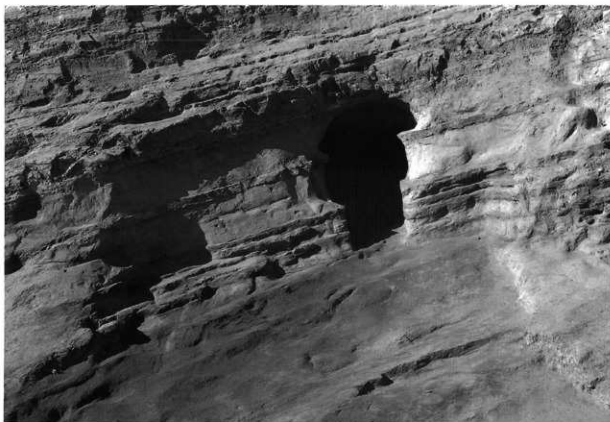
SF02完掘状態(北から)

京徳横穴群

図版 7



A群1号墓 全景(南東から)



A群1号墓 完掘状態(北東から)

図版
8



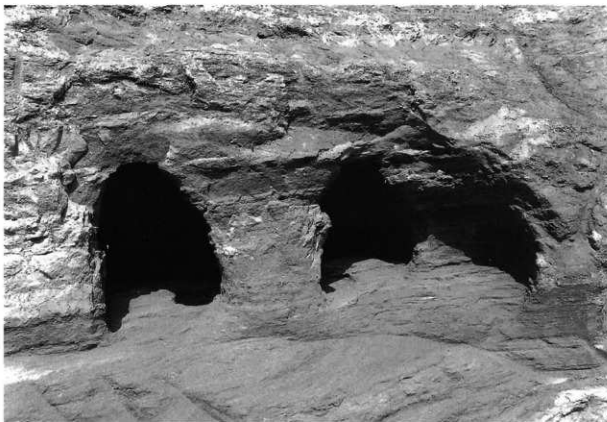
B群2~4号墓 墓前域遺物出土状態(東から)



B群2~4号墓 墓前域完掘状態(東から)

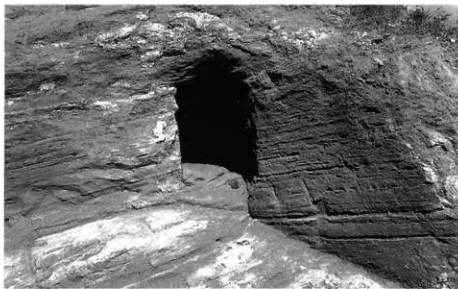


B群5・6号墓 完掘状態(東から)



B群6～8号墓 完掘状態(東から)

図版
10



B群1号墓 完掘状態(墓前域から)



B群2号墓 完掘状態(墓前域から)



B群3号墓 遺物出土状態(羨道から)



B群3号墓 玄室内の状態(墓前域から)



B群4号墓 完掘状態(墓前域から)



B群5号墓 完掘状態(墓前域から)

図版
12



B群6号墓 完掘状態(墓前域から)



B群7号墓 完掘状態(墓前域から)



B群8号墓 完掘状態(墓前域から)

茶屋辻古墳群

図版
13



1号墳 全景(南から)

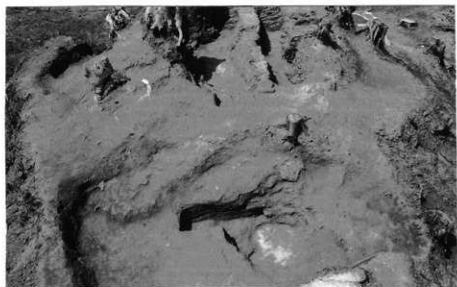


2号墳 全景(北から)

図版
14



1号墳主体部完掘状態(南から)



1号墳南側で検出した土坑(南から)



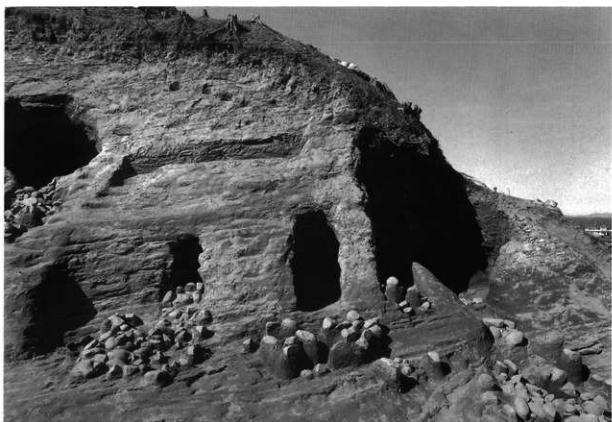
2号墳主体部完掘状態(南から)

茶屋辻横穴群

図版
15



A群全景(北東から)

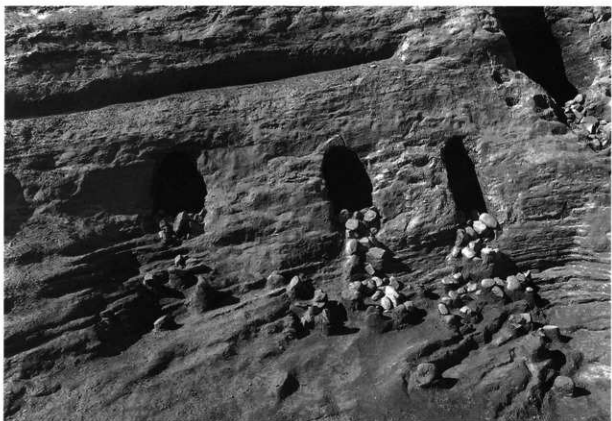


A群2~4号墓 墓前域遺物出土状態(東から)

図版
16



A群5～14号墓 全景(北東から)



A群6～8号墓 墓前域遺物出土状態(東から)



A群1号墓 閉塞石、墓前域遺物出土状態(北から)



A群1号墓 墓前域遺物出土状態(北から)



A群1号墓 墓前域遺物出土状態(東から)

図版
18



A群1号墓 閉塞石、玄室遺物出土状態(北から)



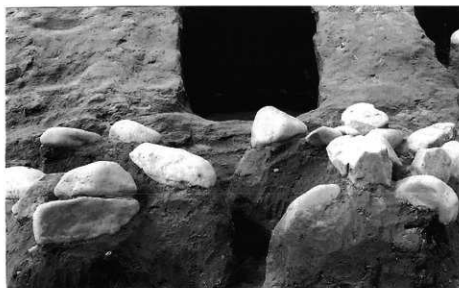
A群1号墓 閉塞石、玄室遺物出土状態(墓前域から)



A群1号墓 完掘状態(墓前域から)



A群2号墓 完掘状態(墓前域から)



A群3号墓 墓前域遺物出土状態(東から)



A群3号墓 完掘状態(墓前域から)



A群4号墓 閉塞石、墓前域遺物出土状態(東から)



A群4号墓 玄室板石等検出状態(後道から)



A群4号墓 完掘状態(墓前域から)



A群4号墓 玄室完掘状態(羨道から)



A群4号墓 奥壁の状態



A群5号墓 閉塞石検出状態(東から)



A群5号墓 玄室遺物出土状態(北から)



A群5号墓 玄室遺物出土状態(東から)



A群5号墓 玄室完掘状態(羨道から)



A群6号墓 閉塞石検出状態(墓前域から)



A群6号墓 完掘状態(墓前域から)



A群6号墓 玄室完掘状態(羨道から)



A群6号墓 奥壁天井周辺の状態



A群7号墓 閉塞石検出状態(墓前域から)



A群7号墓 玄室遺物出土状態(羨道から)



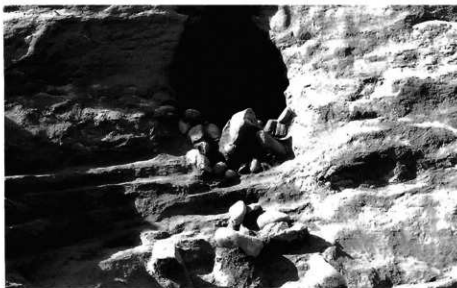
A群7号墓 完掘状態(墓前域から)



A群7号墓 玄室完掘状態(羨道から)



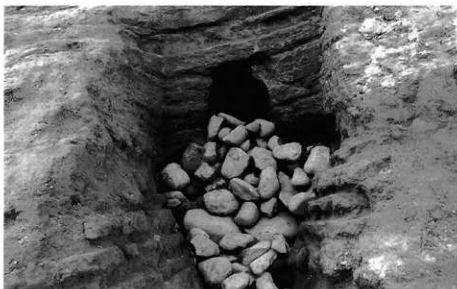
A群7号墓 玄室北側壁面の工具痕



A群8号墓 閉塞石検出状態(墓前域から)



A群8号墓 完掘状態(墓前域から)



A群9号墓 閉塞石検出状態(墓道から)



A群9号墓 玄室遺物出土状態(壘前域から)



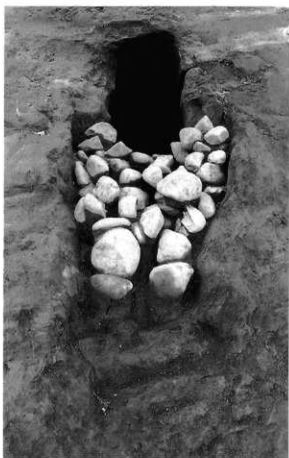
A群9号墓 遺物出土状態(墓道から)



A群9号墓 完掘状態(墓道から)



A群9号墓 全景(東から)



A群10号墓 閉塞石検出状態(墓道から)



A群10号墓 完掘状態(墓道から)



A群10号墓 玄室完掘状態(墓道から)

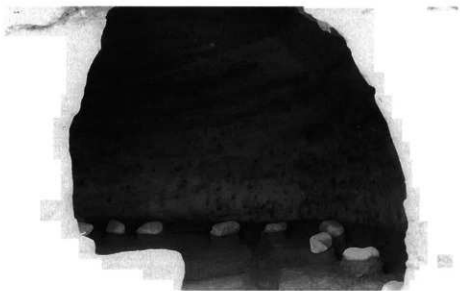


A群11号墓 閉塞石検出状態(墓道から)



A群11号墓 完掘状態(墓道から)

図版
30



A群11号墓 棺座・棺台検出状態(東から)



A群11号墓 棺台の状態(東から)



A群11号墓 玄室完掘状態(玄門から)



A群12号墓 閉塞石検出状態(東から)



A群12号墓 完掘状態(東から)



A群12号墓 玄室遺物出土状態(羨道から)

図版
32



A群12号墓
玄室完掘状態(羨道から)



A群13号墓
玄室遺物出土状態(墓前域から)



A群13号墓 閉塞石検出状態(東から)



A群13号墓 玄室遺物出土状態(北西から)



A群13号墓 玄室遺物出土状態(北東から)



A群13号墓 玄室遺物出土状態(北から)

図版
34



A群13号墓 玄室遺物出土状態(南から)



A群13号墓 玄室遺物出土状態(南から)



A群13号墓 玄室遺物出土状態(東から)



A群13号墓 玄室遺物出土状態(南東から)



A群13号墓 完掘状態(墓道から)



A群13号墓 奥壁に刺さった鉄礫検出状態



A群14号墓
閉塞石検出状態(東から)



A群14号墓
羨門部分の溝の状態(東から)



A群14号墓 完掘状態(東から)



A群15号墓
閉塞石検出状態(墓道から)



A群15号墓
玄室遺物出土状態(墓道から)



A群15号墓 完掘状態(墓道から)



A群16号墓 閉塞石検出状態(墓道から)



A群16号墓 閉塞石検出状態(東から)



A群16号墓 全景(南東から)



A群16号墓 玄室遺物出土状態(北西から)



A群16号墓 玄室遺物出土状態(南西から)



A群16号墓 玄室完掘状態(南から)



A群17号墓 閉塞石検出状態(東から)



A群17号墓 閉塞石根石の状態(東から)



A群17号墓 完掘状態(墓道から)



A群17号墓 玄室遺物出土状態(南東から)



A群17号墓 玄室遺物出土状態(南から)



B群1号墓 前室遺物出土状態(南西から)



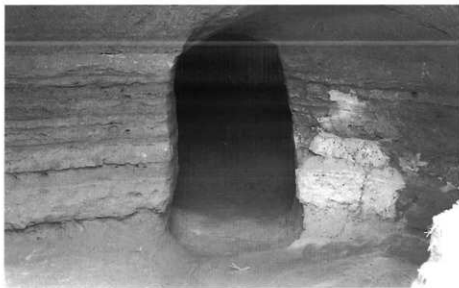
B群1号墓 閉塞石検出状態(墓道から)



B群1号墓 完掘状態(墓道から)



B群1号墓 前室完掘状態(墓道から)



B群1号墓 奥室入口(前室から)



B群1号墓 奥室完掘状態(前室から)



B群1号墓 奥室壁面の工具痕

矢崎横穴群D群

図
版
44



1～3号墓 完掘状態(南から)



1号墓 閉塞石検出状態(墓前域から)



1号墓 閉塞石検出状態(東から)



1号墓 閉塞石検出状態(玄室から)



1号墓 閉塞石根石の状態(南上方から)

図版
46



1号墓 完掘状態(墓前域から)



2号墓 閉塞石検出状態(墓前域から)



2号墓 完掘状態(墓前域から)



2号墓 玄室遺物出土状態(南から)



2号墓 玄室遺物出土状態(西から)



2号墓 閉塞石検出状態(南上方から)



2号墓 遺物出土状態(玄室から羨道)



3号墓 遺物出土状態(東から)



3号墓 閉塞石検出状態(南上方から)



3号墓 完掘状態(墓前域から)

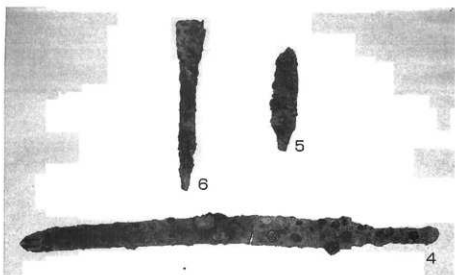


3号墓 完掘状態(玄室)

栗下古墳



2



京徳横穴群



1



2

3



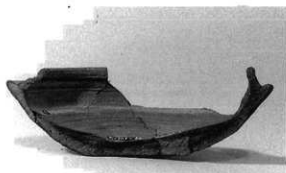
4



6



7



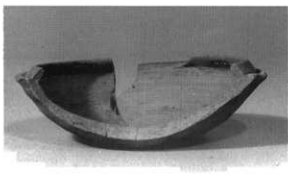
10



14



15



21



22



24



25



26



28



29



32



31



36



38



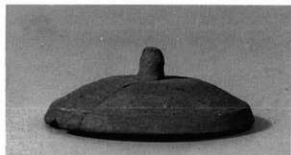
39



40



41



42



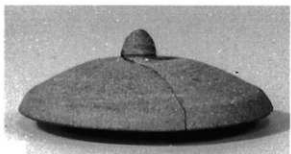
43



44

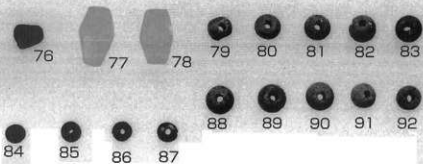
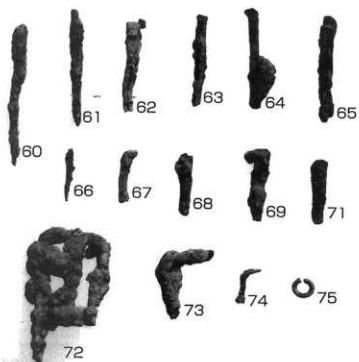


50



45

图版
54



茶屋辻横穴群

図版
55



1



4



5



8



6



9



11



13



12



14

图版
56



15



16



17



18



19



21



20



22



24



26



25



27



28



29



31



35



37



38



39



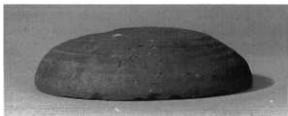
40



41



42



43



44



45



46



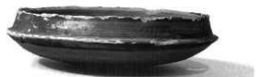
47



48



49



50



51



53



54



52



55



56



57



58



60



61



61



62



63



59



64

图版
62



65



66



67



68



69



70



71



72



73



75



76



79



77



82



78



81



83



84



85



86



87



88



92



89



94



90



91



93



97



95

図版
66



96



98



99



100



101



102



103



105



106



107



108



109

图版
68



110



111



112



114



113



115



117



118



121



119



123



122



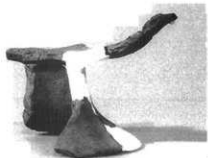
120



124



125



126



127



128



131



132



133



134



135



138



139



140



141



143



143



144



142



146



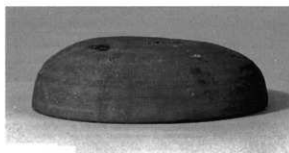
147



148



151



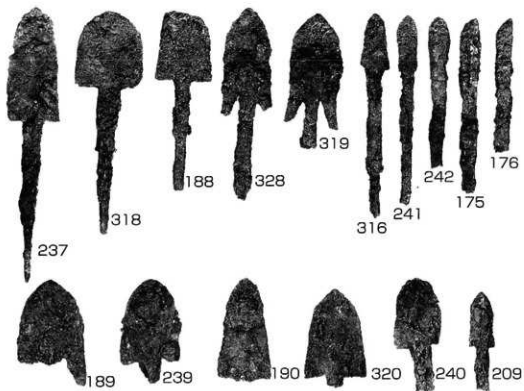
152



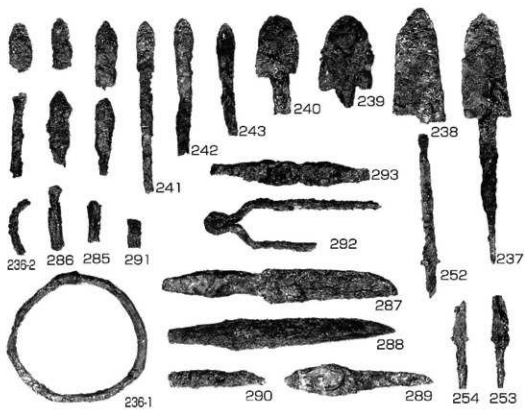
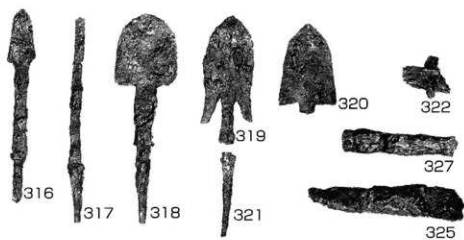
149

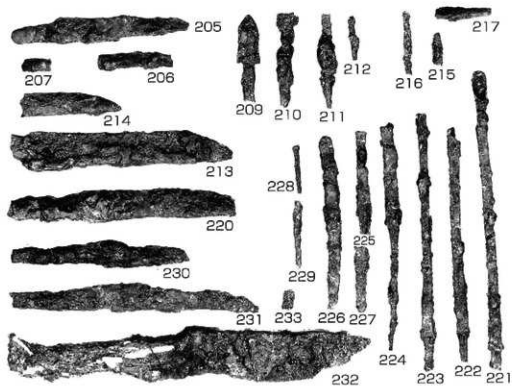
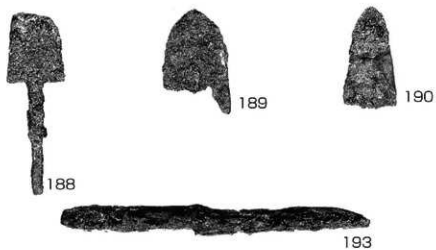


150

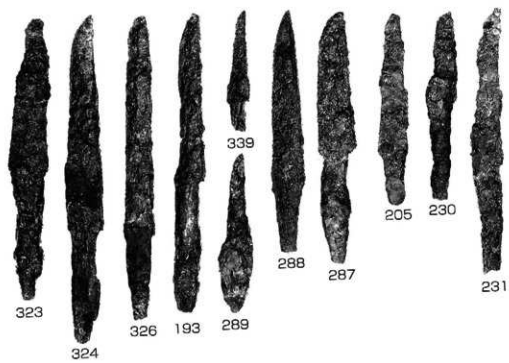
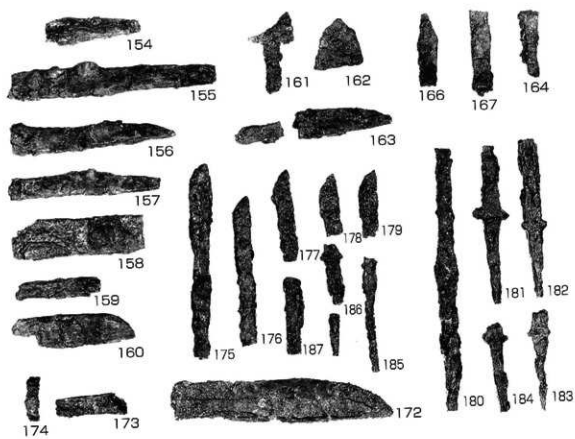


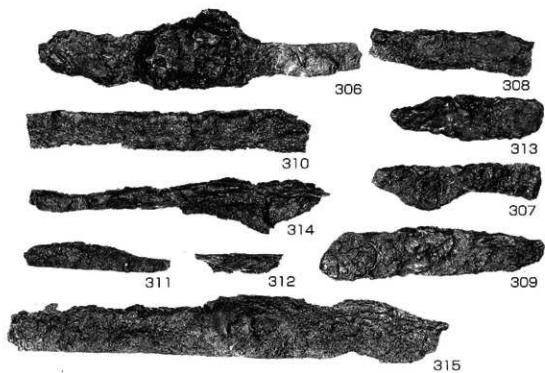
図版
74





圖版
76





图版
78



352



353



295



297



298



299



303



301



300



302



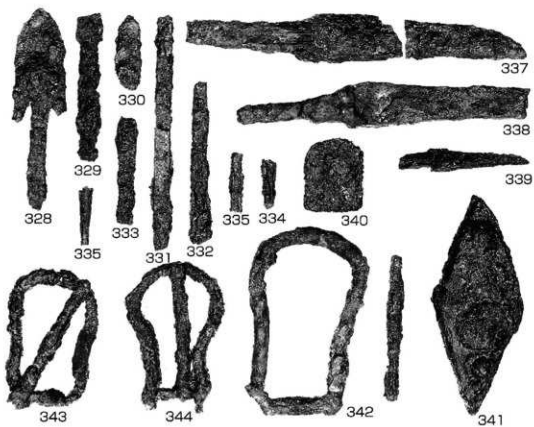
304



305



图版
80





346



349



350



351



348



347



361



362



363



364



365



366



367



368



369



370



371



372



373

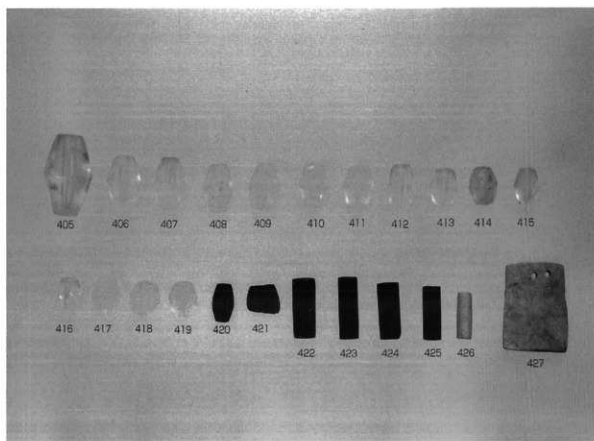
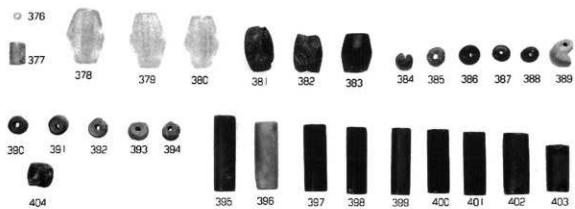


374



375

图版
82



矢崎横穴群D群

図版
83



1



2



3



4



5



6

図版
84



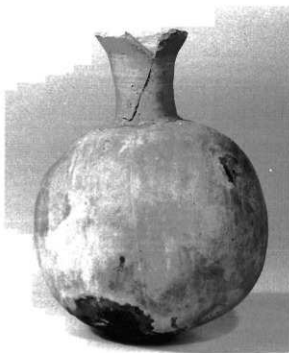
7



8



9



10



13



15



11



12



16



17



18



22

報告書抄録

ふりがな	かけがむしとうがいかけがむしあいらしゅうへんとちかくせりじぎょうにとりなまざいほうふんかざいはつちやうきょうこくしょ に
書名	掛川市東名掛川Ⅰ・C周辺土地地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ
副書名	
編著者名	大熊茂広、前田庄一
編集機関	掛川市教育委員会
所在地	〒436-8650 静岡県掛川市長谷701番地の1 TEL(0537)21-1158
発行年月日	西暦2003年3月15日

ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
くろしたこふん 栗下古墳	静岡県掛川市 上張668外	22213	520	34度 45分 47秒	138度 1分 22秒	1999/101 ～ 20000127	450m ²	東名掛川Ⅰ・C 周辺土地地区画 整理事業に伴う 発掘調査
きやうとくこふん 京徳横穴群 A群・B群	静岡県掛川市 上張76外		101-1 -2	34度 46分 0秒	138度 1分 25秒	19961219～ 19970120 20000713～ 20000918	1,000m ²	
ちやつじこふん 茶屋辻古墳群	静岡県掛川市 杉谷611外			34度 45分 57秒	138度 2分 0秒	19971205 ～ 19980429	450m ²	
ちやつじこふん 茶屋辻横穴群 A群・B群	静岡県掛川市 杉谷612外		102	34度 45分 57秒	138度 2分 0秒	19971205 ～ 19980429	600m ²	
あしづまこふん 矢崎横穴群 D群	静岡県掛川市 上張694外		99-4	34度 45分 53秒	138度 1分 25秒	19951113 ～ 19960124	200m ²	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
栗下古墳	古墳	古墳時代	古墳 1基	土師器、鉄剣、鉄鏃、玉	木棺直葬墳
京徳横穴群 A群・B群	横穴	古墳時代	横穴 A群1基、 B群8基	土師器、須恵器、鉄製品、玉	
茶屋辻古墳群	古墳	古墳時代	古墳 2基		木棺直葬墳
茶屋辻横穴群 A群・B群	横穴	古墳時代	横穴 A群17基、 B群1基	土師器、須恵器、鉄製品、玉	須恵器特殊扁壺、毛彫り の主頭柄頭と鉏
矢崎横穴群 D群	横穴	古墳時代	横穴 3基	土師器、須恵器、鉄製品、玉	

東名掛川I・C周辺土地区画整理事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ

2003年3月15日

編集発行 掛川市教育委員会
静岡県掛川市長谷701番地の1
TEL.0537-21-1158

印刷 株式会社 アビサレ
静岡県掛川市領家864-1
TEL.0537-24-2301(代)

